

中国東北における地域構造変化の地理学的研究

—— 松原調査報告 ——

小島泰雄 編

序

小島 泰雄（京都大学）

吉林省松原市におけるフィールド調査は、京都で開催された国際地理学会議（IGC）の終了をまって、2013年8月15日から8月28日までの14日間にわたって行われた。メンバーは長春に集合し、中国科学院東北地理与農業生態研究所の張柏氏をはじめとする中国のカウンターパートと打合せを行い、借り上げたコースターで長春から北西に150kmほど離れた松原に移動した。松原での8日間は、巡検やディスカッションを全体で行ったほかは、日中双方の研究者で構成されるサブグループに分かれて活動した。この調査報告書は、個別にテーマを設定して行われた調査研究の成果を集めたものである。

小野寺論文は、吉林油田の本部が所在する松原を資源型都市と捉え、資源開発と都市形成の関係を居住に焦点をあわせて考察したものである。王治良・張柏論文は、松花江をはさんで市街地がひろがる松原について、北の扶余と南の前郭（前ゴルロス）が1992年の松原市設立を契機に一体化が進んだことを示している。秋山論文は、長い時間軸に江北の扶余／伯都訥（ボドナ）と江南の前郭を置き直し、その形成史を概観したものである。これら3論文は、松原の都市形成を扱う点で接点をもつ。

張柏論文は、松原の発展において生活環境の整備が進む状況を、都市緑地が松花江を軸に市街地各所に展開してゆく姿として整理している。石田論文は、公園や広場で「休閒」（レジャー）を楽しむ人びとに対するインタビューを通して、都市生活と場所の結びつきを考察したものである。柴田論文は、市街地の小学校分布から、都市化と学歴社会化が進む中での教育サービスの現状を描いている。これら3論文は松原の都市生活を扱っている。

小島論文は、市街地の南にひろがる水田地域（前郭灌区）の形成過程を満洲国期からたどることで、地域開発とそこにおける日本の関与を考察したものである。王徳宣論文は、前郭灌区の現状を松花江の大規模な水利事業に焦点をあわせて紹介したものである。これら2論文は松原の農村を扱っている。

劉偉傑論文は、土地利用から推計される環境収容力の変遷を地図化し、松原が属する省西部の脆弱性を指摘している。高橋論文は、モンゴル族自治州における無形文化遺産の保護と伝承の取り組みについて、馬頭琴に着目して考察したものである。劉志明論文は、自然と経済、都市の3要素から松原市の生態的な地域区分を行ったものである。これらの3論文は松原の生態と文化を扱っている。

収録された11論文によって、東北平原の中央に位置する松原市がどこまで立体的に描き出されたかについては、読者の評価にゆだねたい。フィールド調査は日中関係が領土問題で緊張した時期に実施され、現地政府の協力はほとんど得られなかった。この報告書の成立の背後に中国の研究者の配慮と尽力があったことを記して謝意を示すとともに、日中関係が国家次元だけではないことに思いを致したい。

2015年3月26日

本調査研究は「中国東北における地域構造の変化に関する地理学的調査研究」と題して、2012年度から3年間にわたる科学研究費補助金（基盤研究(B)海外学術調査、課題番号:24401035）を得て行われるものであり、本報告書はその第二年次の成果の一部である。

2013年8月 松原フィールド調査

期間：2013年8月15日（木）～28日（水）

参加者：秋山 元秀 （滋賀大学 教育学部 教授）
石田 曜 （京都大学 人間・環境学研究科 大学院生）
小野寺 淳 （横浜市立大学 都市社会文化研究科 教授）
金 科哲 （岡山大学 環境生命科学研究科 教授）
小島 泰雄 （京都大学 人間・環境学研究科 教授）
柴田 陽一 （京都大学 人文科学研究所 産官学連携研究員）
高橋 健太郎 （駒澤大学 文学部 教授）
松村 嘉久 （阪南大学 国際観光学部 教授）

中国カウンターパート；

张 柏 （中国科学院 东北地理与农业生态研究所 研究员）
刘 志明 （东北师范大学 地理科学学院 教授）
王 德宣 （中国科学院 东北地理与农业生态研究所 研究员）
王 治良 （齐齐哈尔大学 理学院 讲师）
刘 伟杰 （中国科学院 东北地理与农业生态研究所 助理研究员）
吕 爽 （中国科学院 东北地理与农业生态研究所 助理研究员）
杜 嘉 （中国科学院 东北地理与农业生态研究所 助理研究员）

目 次

中国における資源開発と都市形成 ―吉林油田を事例に― 小野寺 淳（横浜市立大学）	1
松原市城市空间演变及发展模式分析 王 治良（齐齐哈尔大学）、张 柏（中国科学院东北地理与农业生态研究所）	14
草原から現代都市へ ―中国吉林省松原市の成立 秋山 元秀（滋賀大学・名誉教授）	23
松原市城区游憩绿地景观格局研究 张 柏（中国科学院东北地理与农业生态研究所）	30
吉林省松原市の都市公園・広場にみるレジャー空間の特性 石田 曜（京都大学・大学院生）	36
吉林省松原市中心部における小学校通学区域の変化と学校間格差 柴田 陽一（京都大学・産官学連携研究員）	47
前郭灌区の水田開発 小島 泰雄（京都大学）	60
吉林省松原市“前郭灌区”及哈达山水库 王 德宣（中国科学院东北地理与农业生态研究所）	71
基于 GIS 方法的吉林省生态承载力动态分析 刘 伟杰（中国科学院东北地理与农业生态研究所）	76
吉林省松原市前ゴルロスモンゴル族自治州における馬頭琴音楽の普及と無形文化遺産代表リストへの登録 高橋 健太郎（駒澤大学）	81
吉林省松原市自然经济现状与发展规划 刘 志明（东北师范大学）	92

中国における資源開発と都市形成 —吉林油田を事例に—

小野寺 淳（横浜市立大学）

1. 資源開発と都市形成の関係

中国では経済発展にともない、天然資源に対する需要が急増している。中国による国外での活発な資源調達の動きがよく伝えられているが、当然のことながらそれと同時に、国内での資源開発も活発に行われている。そして、そのような資源開発の動向が、その拠点となる都市の在り方を左右し、特殊な空間構造を形成している。内モンゴル自治区のオルドス市では、石炭開発のブームに沸いた不動産バブルにともなって都市開発が急激に進行したものの、まもなくバブルがはじけてゴースタウンと化してしまった。この顛末は、極端な例ではあるけれども、資源開発と都市形成との一つの関係性を示している。

一般的には、「資源枯渇型都市」の問題として、例えば石炭の採掘に依存してきた都市が資源の減少とともに衰退してしまうことが指摘されてきた。天然資源の埋蔵量そして採掘の技術とコストに規定される可採量には必ず限度があるため、資源の開発は増産期、安定期、減産期のライフサイクルを経ることになる。それにもなって資源開発の拠点となる都市は成長期、繁栄期、衰退期のライフサイクルをたどることが必然である¹⁾。そうしたことを踏まえて、都市の衰退を防ぐためには、繁栄期のうちに資源開発に依存している産業構造の転換を図り、「第二の創業」を進めておくという産業政策が肝要、という主張もなされている²⁾。

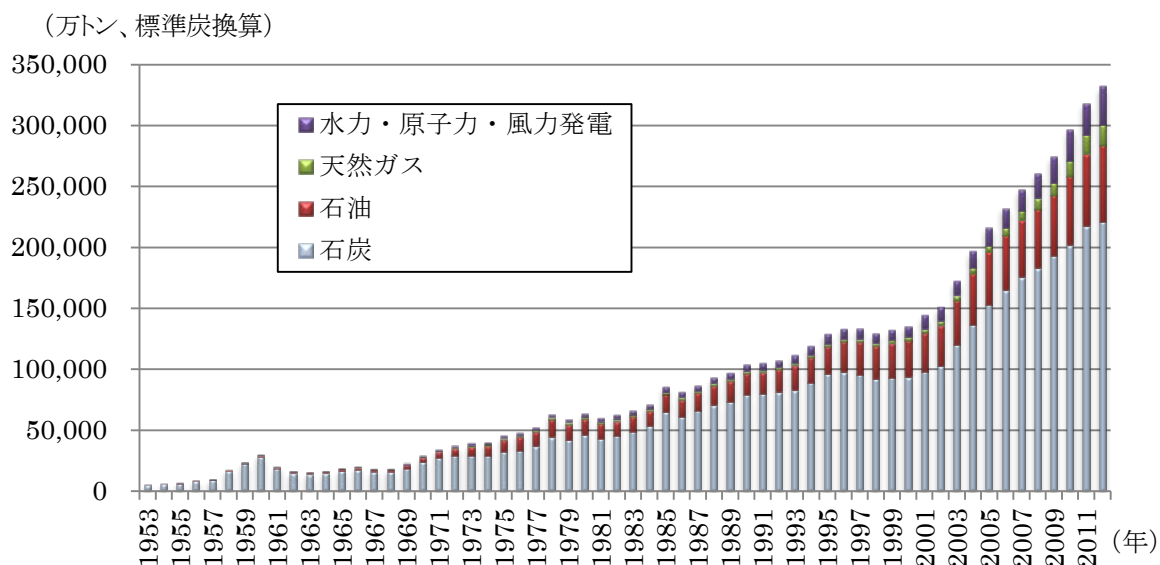
このような資源と都市の関係は、中国に限ったことではなく、例えば日本の産炭地域でも経験されたことであった。しかし、中国の資源と都市の関係には、特殊な事情も介在している。一つには、資源開発が全面的に国家主導で行われることである。天然資源は経済発展の基盤であるばかりでなく、安全保障上の戦略物資でもある。中国の天然資源はすべて国有であると定義され、資源開発を国家が強力に主導し、その開発は多くの部分を国有企業が担うことになる。特に本稿が研究対象とする石油資源の開発については、そのような体制がはっきりと採用されている。もう一つは、資源開発の拠点となる都市の形成についても、その主要な部分をしばしばそれらの国有企業が担うことである。都市を建設するための資金が、とりわけ成長期においては、国有企業を通じて政府から優先的に投下されうる。

本稿では、以上のような認識に基づき、中国においては資源開発と都市形成の関係が実際にはどのようになっているのかについて検証することを目的とする。また、資源型都市という特殊な事例を検討する中から、逆に中国の都市空間の特性を照射してみたい。そして、具体的な分析を行うために、吉林省松原市一帯に展開する吉林油田に焦点を当てる。以下、2章では石油資源開発について、3章では資源型都市の特徴について、そして4章では石油開発と都市空間の関係性について考察していく。最終の5章では以上の考察を踏まえて、資源型都市の空間構造がはらむ問題点について検討する。

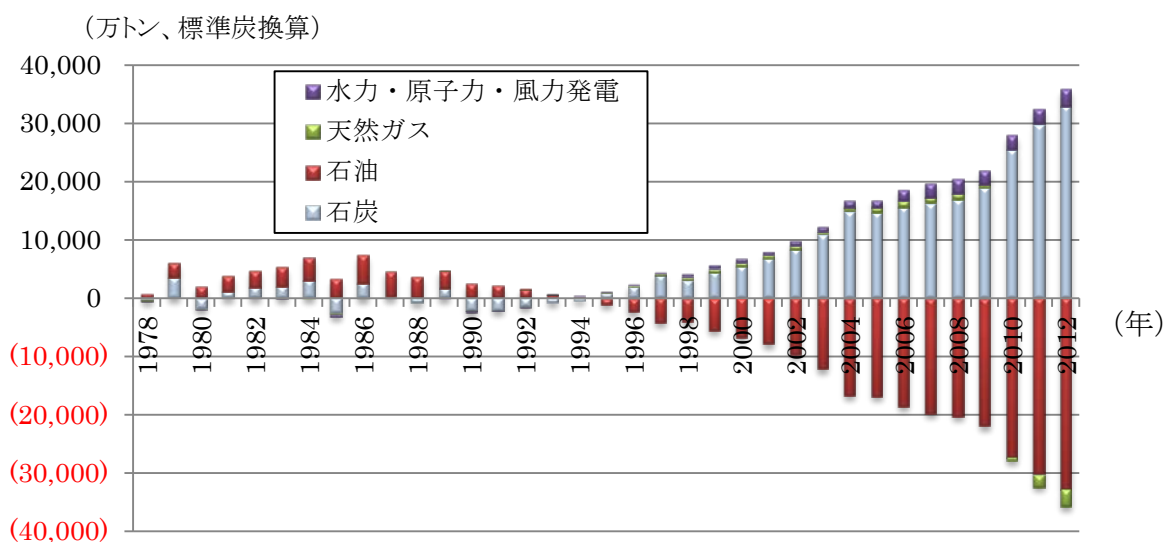
2. 中国における石油開発と吉林油田

(1) 石油開発の歴史

中国における近代的な意味での石油開発は、清代の洋務運動の中で、アメリカから技術が導入されて始められた。その後20世紀に入ると、新疆などの西部で生産が開始された。もっとも、アメリカの地質学者らの見解として、中国に石油の埋蔵量はそれほど多くないだろうというのが定説であった。それに対して、李四光などの中国の地質学者は反論し、その後の大慶油田などの発見につながったという。日中戦争が終結すると1946年には中国石油有限公司が上海に設立された。さらに中華人民共和国が成立すると1950年には中ソ石油株式会社が設立されて、今度はソ連の技術が導入された。1950年代の開発の重点は引き続き西北地区にあり、特に玉門やカラマイの油田が主力であった。そうした状況が大きく転換したのは1950年代末頃である。東北地区の松遼平原で油田が発見され、特に1959年に発見された大油田は建国10周年を祝って大慶油田と名付けられた。1960年代から70年代の石油開発の重点は東北地区にあった³⁾。



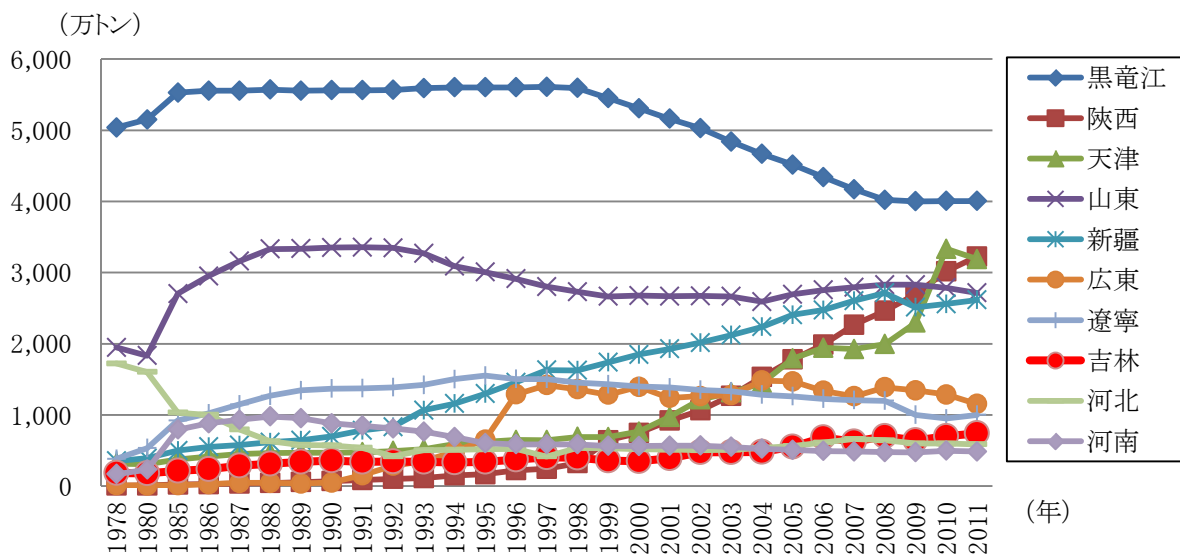
(中国統計年鑑各年版)。



(中国統計年鑑各年版)。

改革開放期を迎え 1980 年代になると、再び西北地区の開発が進められるとともに、渤海など海域での開発も行われるようになった。中国は 1993 年には石油の純輸入国になり、それ以降は中国企業が海外へ積極的に進出し、アフリカなどにおいて石油採掘権を相次いで獲得するようになった。

第1図は中国における石油を含めたエネルギー消費の推移を、第2図は特に改革開放期における各エネルギーの需給動向を示したものである。1960 年前後には大躍進運動を契機としたエネルギー消費の急速な増減や、1997 年からのアジア通貨危機の負の影響を読み取ることもできるが、全体としてエネルギー消費量は着実に増加しており、とりわけ今世紀に入ってから増加が著しい。また、石炭への依存が一貫して大きいこともわかる (第1図)。しかし近年においては石油の消費量が急速に拡大している。2010 年の石



第3図 中国各地区の原油生産量の推移（1978～2011年）

（中国能源統計年鑑各年版）.

油消費量が1990年からの20年間で約3.8倍に増加したのに対し、国内の原油生産量は約1.5倍にとどまったため、1990年代前半には輸入超過となり（第2図）、2010年の自給率は約47%であった。それだけに、輸入量の確保と同時に、国内での増産が期待されている。

第3図は、改革開放期の中国国内における原油生産の動向を省別のデータとして示したものである。黒竜江省の大慶油田が今世紀に入る頃から減産をしているものの依然として最大の生産量であり、勝利油田などの山東省の生産量も横ばいである。それらに対して、天津市の渤海油田や陝西省を中心とした長慶油田が近年になって急速に増産していることがうかがえる。本稿で取り上げる吉林油田は、それらの油田に比較して規模は小さいものの、この間に生産量を確実に増やしており、現在では全国で第8位に位置している。

（2）石油開発の組織

中華人民共和国の下で、高度に集権的な計画管理体制が採られた時期には、石油開発についても石油工業部が1955年に置かれ、所属企業を直接に管理していた。その後、改革開放期になると、生産責任制と近代的な企業制度が採り入れられるようになり、組織は度々再編された⁴⁾。

その第一段階は1978～88年にあたる。石油工業部に所属する各企業の自主権の拡大が経済責任制度の導入によって進められ、生産の積極性を引き出していった。1982年には、大陸棚の海底油田・ガス田の開発のために、国有企業の中国海洋石油総公司（CNOOC）が設立された。中国には海底油田探索のための十分な技術がなかったため、国際入札を通じて外資と共同開発を行うことが目論まれ、その中国側の受け皿となる企業であった。中国国内においては海底油田に関わる探査・開発・生産・販売の独占経営権を行使するようになった。

第二段階は1988～98年にあたり、石油工業部の職能が国有企業に分割され、さらにそれらの企業経営の改革が子会社の株式化という形で進められた。1983年に石油化学工業を担当する国有企業の中国石油化工総公司（シノペック）が誕生した。1988年には国務院による改革で石油工業部が廃止され、中国石油天然気総公司へと生まれ変わった。

第三段階は1998年以降である。国務院による再度の改革として、中国石油化工総公司と中国石油天然気総公司は、多様な事業を相互に交換した上で、石油探査から加工・販売までを一貫して行う二つの特大企業グループに再編された。1998年に、中国石油天然気集团公司（CNPC）と中国石油化工集团公司（シノ

ペック) が正式に成立したが、両者の領域はちょうど万里の長城を境に中国全土を南北に二分したようになっている⁵⁾。翌 1999 年に、両グループは、本業と副業、優良資産と不良資産、企業職能と社会職能を分離した。中国石油天然気集团公司 (CNPC) は 2000 年に現業部門を民間企業の中国石油天然気 (ペトロチャイナ) として分割した。

このような組織再編を踏まえ、中国海洋石油总公司 (CN00C) を含めた 3 大グループは、それぞれ海外での上場により資金調達を図っている。ペトロチャイナは上海・香港・ニューヨークで、シノペックは香港・上海・ロンドン・ニューヨークで上場した。中国海洋石油总公司 (CN00C) は、実際に油田探査・採掘事業を行う子会社として民営企業の中国海洋石油有限公司 (CN00C Ltd.) を有し、これが香港とニューヨークに上場している。このような資金を利用して、海外の石油関連企業を積極的に買収するなど、世界中で石油資源の獲得に全力を挙げている。

一方、中国国内においては、一部に外資企業が開発に参入し、地方においては若干の中小規模の公営・民営企業も併存するものの、国家資本によってコントロールされた上記の 3 大グループがほぼ独占的に開発から販売までのすべての領域に関与している。

(3) 吉林油田の経緯

中国石油吉林油田公司是中国石油天然気集团公司 (CNPC) グループ内の中国石油天然気 (ペトロチャイナ) に所属する地区会社であり、石油・天然ガスの探査・開発・生産・加工・販売から生産技術サービスや従業員の生活サービスまでも一体として取り組む大型石油企業である。本部は吉林省松原市にあり、油井は多くが松原市の管轄する区・市・県の範囲に分布している (写真 1、2)。現有の従業員は約 47,000 人であり、16 の部門、3 つの付属機関、直属の子会社が 7 社、系列の子会社が 57 ある⁶⁾。

採掘が最初に成功したのは 1959 年であり、当初は「扶余油田」と呼ばれた。黒竜江省の大慶油田とほぼ同時期のはじまりであり、すでに 50 年を超える歴史を有する。1961 年には吉林省管理下の国有企業「吉林油田」が発足した。1998 年に中国石油天然気総公司の傘下に入り、その際に株式上場部分と非上場部分の分離をして 2 つの組織にしたが、2007 年にはそれらを再統合している。2008 年には以前はシノペックに所属していた石油精製の前郭石化公司を吸収合併した。

生産量については先に第 3 図で示したような推移であり、2011 年の吉林油田の原油生産量は 735 万トンであった。累積の生産量は 1.3 億トンに達する。しかし、油田としての評価は、品質が劣り、浸透率や飽和率が低くて、開発の難度が高いとされる。初期の油井では早くから注水も行われている。その一方で、「会戦」と呼ばれる設備や労働力を総動員しての積極的な探鉱・開発がしばしば展開され、採掘技術の向上とあいまって、近年は着実な増産傾向にある。



写真 1 油井の掘削作業



写真 2 原油を採掘するポンプ

3. 資源型都市松原市の特徴

本章では、吉林油田の本拠地である松原市に焦点を当て、市街地の状況および人口と経済の面から資源型都市の特徴を明らかにする。

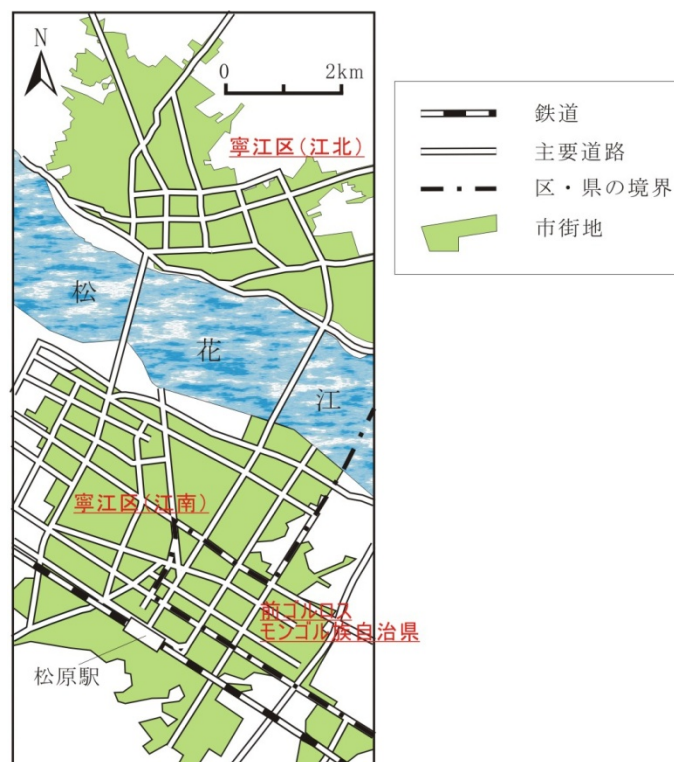
(1) 市街地の状況

松原市は中国東北地区吉林省の中西部にあり、市の中心部は省都である長春市から北西へ約 150km に位置する。黒竜江省の大慶油田からも南へ約 150km にあたる。市域は東北平原の一部である松嫩平原に、アムール川の支流である松花江（ソンホワ川）の上流（第二松花江）の流域を中心として広がっている。

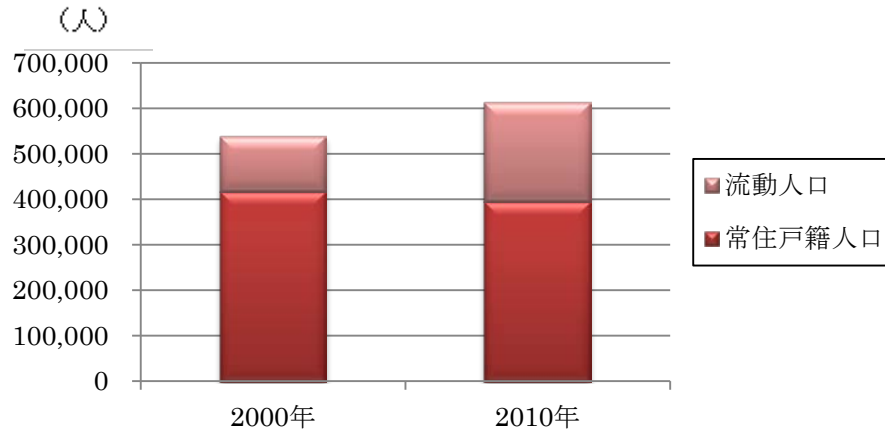
清代の康熙年間にチチハルへ通じる要衝として伯都訥という拠点が第二松花江の北岸（江北）に建設され、後に扶余鎮と呼ばれるようになった。この地区が現在の松原市の中心市街地の北部に相当する。その後 1914 年にこの地に扶余県が置かれ、1987 年には扶余市となった。他方、第二松花江の南岸（江南）には草原が広がりモンゴル族が生活する地域であった。1934 年に鉄道の前郭駅（現在の松原駅）が設けられて市街地が形成され始め、1955 年には前ゴルロスモンゴル族自治州が置かれて前郭鎮がその県都となった。

1992 年に白城地区から松原市が地級市として分割され、扶余市は扶余区となるが、1995 年にはその西部のかつての扶余鎮付近を切り離して寧江区が設置され、東部は改めて扶余県となった。その後、行政区画が徐々に調整されて、松花江南岸（江南）にある前郭鎮の西側の部分も寧江区に編入されていった。このような経緯により、現在の松原市の中心市街地は、寧江区がその多くの部分を占め、それに前ゴルロスモンゴル族自治州の前郭鎮を加えた範囲になっている（第 4 図）。

現在、松原市の党委員会や政府は江南に置かれている。前ゴルロスモンゴル族自治州の党委員会や政府はやはり江南の市街地中央部に置かれている。それらに対して、寧江区の党委員会や政府は江北に置かれている。鉄道駅は江南にあるが、長距離バスターミナルなどは江北と江南それぞれに立地し



第 4 図 松原市の中心市街地



第5図 松原市寧江区の人口の変化

(吉林省人口センサス資料 2000 年版および 2010 年版)。

第1表 学歴構成 (2010 年)

	6 歳以上の人口	小学以下	中学	高校	短大	大学	大学院
松原市寧江区	100.0%	14.6%	39.0%	30.4%	10.0%	5.8%	0.1%
長春市区部	100.0%	15.5%	34.2%	22.0%	11.2%	15.5%	1.6%
吉林省	100.0%	13.2%	34.6%	30.1%	10.6%	10.7%	0.8%

(吉林省 2010 年人口センサス資料)。

第2表 職種別従業者構成 (2010 年)

	国家機関・党 軍組織・企業 等責任者	専門技術職	事務関連職	商業・サー ビス職	農林牧漁水 利生産職	生産・運輸設 備操作関連	分類 不能	合計
松原市寧江区	2.0%	20.7%	9.9%	36.5%	5.0%	25.8%	0.1%	100.0%
長春市区部	3.9%	22.7%	10.3%	36.4%	2.4%	24.2%	0.1%	100.0%
吉林省	3.4%	18.8%	10.1%	36.4%	4.9%	26.4%	0.1%	100.0%

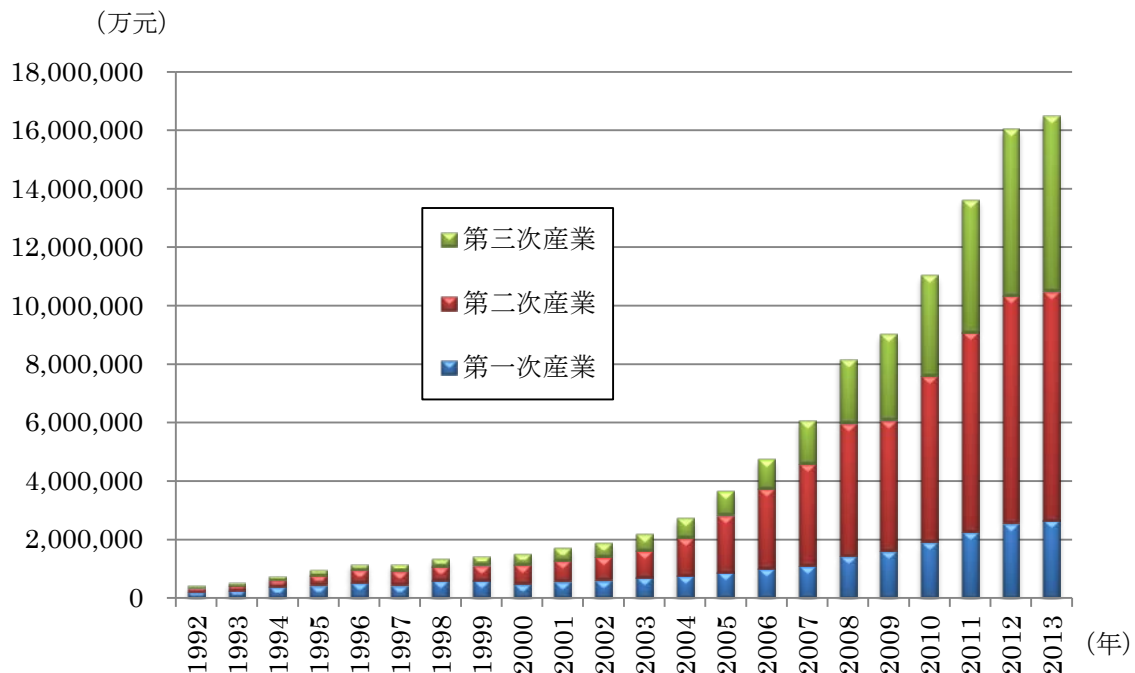
(吉林省 2010 年人口センサス資料)。

ている。両岸はこの市街地区においては松花江大橋と松原大橋で結ばれており、往来は便利である。詳しくは後述するが、吉林油田の主な施設はおおよそ寧江区内 (江北と江南の両方) に分布している。あるいは、地域政策を進めやすくするために吉林油田の主な施設がおおよそ寧江区という範囲に含まれるように行政区画が変更されてきた、とする方がよりの確な説明であろう。

(2) 人口と経済の状況

松原市は寧江区、扶余市、長嶺県、乾安県、前郭ゴルロスモンゴル自治県を管轄し、面積は 20,159 km²、人口は 282.9 万人 (2013 年末) である。中心市街地を広くカバーする寧江区について見てみると、2000 年から 2010 年の 10 年間に、寧江区の総人口は 538,469 人から 612,816 人へ増加したが、そのうち常住の戸籍人口は 416,659 人から 395,870 人へむしろ減少しており、総人口の増加は流動人口による (第5図)。

第1表は、寧江区市街区域の住民の学歴構成を示したものであり、比較検討するために、長春市区部や吉林省全体の市街区域における学歴構成も列記した。中卒や高卒の学歴の比率が高い一方で大卒や大学院卒の比率が顕著に低いことがわかる。第2表は同様にして職種別従業者構成を示したもので



第 6 図 松原市における GDP の推移 (1992～2013 年)

(松原市統計年鑑 2011 および松原市国民経済和社会発展統計公報各年版)。

第 3 表 業種別従業者構成 (2010 年)

	採掘業	製造業	交通運輸業	卸売・小売業	サービス業	教育関連	公務員 等	その他	合計
松原市寧江区	25.1%	4.3%	9.5%	12.7%	5.4%	5.5%	7.7%	29.8%	100.0%
長春市区部	0.5%	20.4%	8.0%	23.9%	3.7%	7.9%	5.6%	29.9%	100.0%
吉林省	2.1%	16.4%	9.6%	21.5%	4.8%	6.6%	7.1%	32.0%	100.0%

(吉林省 2010 年人口センサス資料)。

ある。これについては、「国家機関・党軍組織・企業等責任者」という管理職の比率が低いことに気がつく。以上の人口のデータから、都市機能の中心性がそれほど高くはないと考えることができる。

松原市の産業の成長と構造を GDP の推移から見てみると (第 6 図)、順調に成長を続けており、特に 2000 年代半ばから年率 20% を優に上回る急速な伸びを記録していることがわかる。このことから東北地区において最も経済成長が速い都市と呼ばれ、吉林省においては経済規模が長春市と吉林市に続く第 3 位になった。産業構造としては、第二次産業の比率がこの間に上昇して 2007 年頃には約 58% に達した。近年はその比率がやや低下して 2013 年には約 48% になり、それに対して第三次産業の比率が高まる傾向にある。また寧江区について業種別従業者構成を見ると (第 3 表)、採掘業に極めて特化した産業構造にあることがわかる。とりわけ製造業や卸売・小売業の構成比が低く、都市の産業構造としては特異な状況にある。

松原市の都市住民一人あたり可処分収入は 2013 年に 25,933.4 元に達したのに対して、農村住民一人あたり純収入は 9,800 元と推計されており (松原市 2013 年国民経済和社会発展統計公報)、その格差は他都市に比べても大きい。国有企業等に雇用される従業者の平均賃金水準について見てみると、2012 年に松原市寧江区は年額 41,748 元となり、吉林省内において長春市や吉林市の区部に次ぐ高い水準になっている (吉林省統計年鑑 2013 年版 pp. 73-74)。これらのデータは松原市市街地に居住す

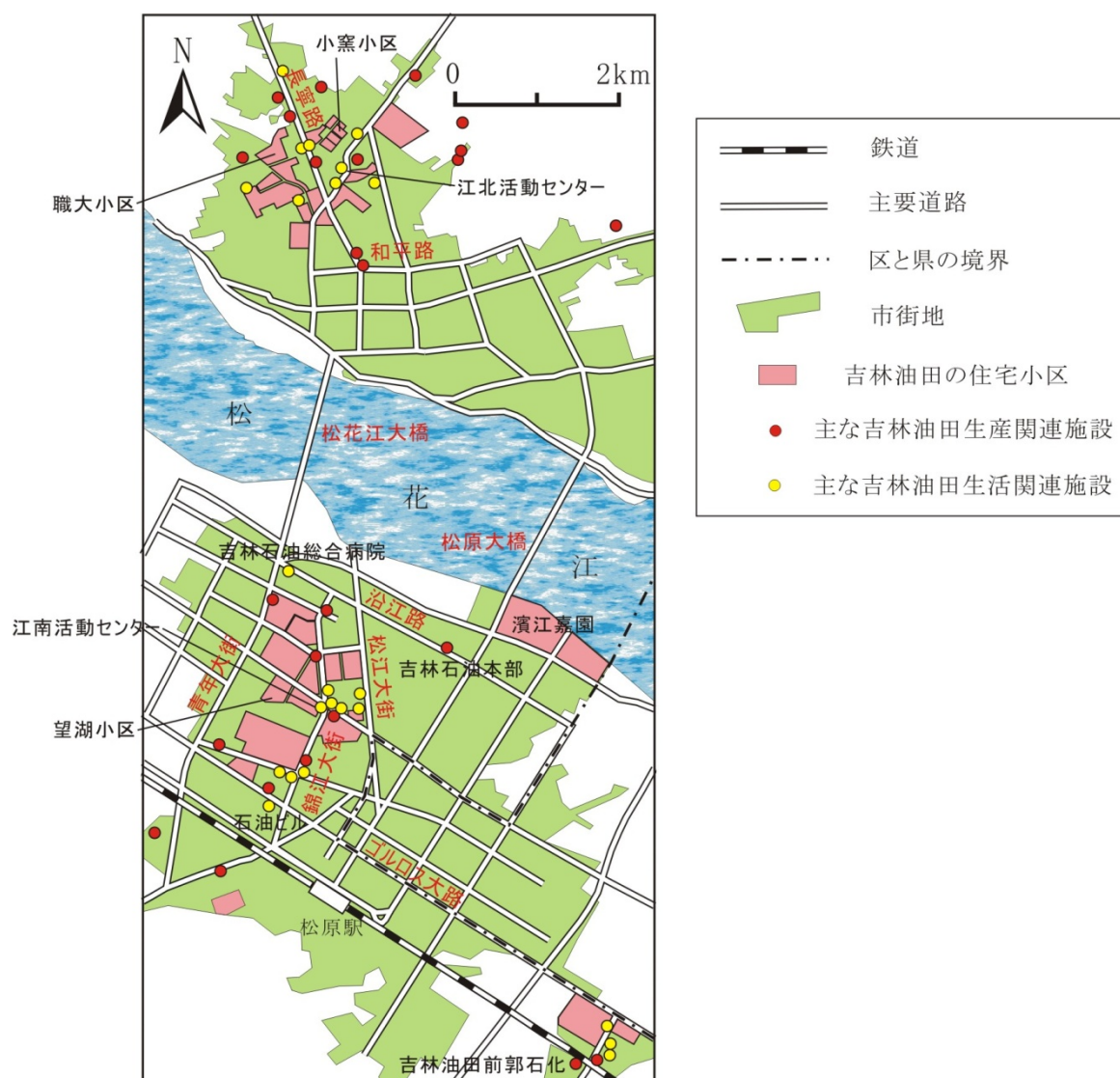
る吉林油田従業員の所得が恵まれていることを示唆している。

4. 吉林油田による都市形成

(1) 住宅小区の建設

1960年代から吉林油田の生産が増えるにしたがって従業員とその家族も増え、国有企業としては彼らのために住宅を供給しなければならなかった。吉林油田の油井は寧江区のみならず、扶余市や前ゴルロスモンゴル族自治州など周辺の市県にも分布しているが、従業員家族の住宅は、現場作業に従事するための現地の宿舎を別にすれば、多くが現在の寧江区に建設された。集合住宅が複数棟集まった団地を住宅小区と呼ぶ。

松花江の北岸（江北）においては、当時の扶余鎮がすでに市街地として発展していたので、新しい住宅建設の用地をその郊外に求める必要があった。実際には扶余鎮の北部、すなわち和平路から北側の地区において建設が始められた（第7図）。南岸（江南）においては前郭鎮の西部に広がっていた沼沢地や荒地が新しい住宅の建設地と定められた。1963年に“干打埧”の（徒手によりその場所の土などを用いて築いた）最初の吉林油田従業員家族用の住宅小区ができた。1970年代には次第に住宅の建築材料が土からレンガへ、そしてコンクリートへと変わり、1980年代には平屋から多層住宅の建設が主流になった⁷⁾。



例えば江南では1980年代半ばまでに、松江街（現在の松江大街）を越えて、錦江路（現在の錦江大街）までは市街化され、住宅小区が建設されていた。住宅だけではなく、生産や生活に関わる多様な施設の建設も始められた。沿江路と江橋路（現在の青年大街）が交わる地点には吉林油田医院が、吉林油田管理局が、ゴルロス大路と錦江路が交わる現在の吉林油田探査開発研究所の地点には吉林油田管理局がすでに置かれていた⁸⁾。

1990年代になると住宅制度改革が行われ住宅の従業員への売却が進み、その回収資金を利用して住宅開発がさらに進展した。2000年代以降は大規模な住宅開発が行われ、居住環境が大幅に向上した。

以下では、いくつかの住宅小区の事例を見ていくことにする。

(a) 小窯小区（写真3）

小窯小区は江北の長寧北路から東に入ったところに位置している。最初に建設されたのは1970年代であり、写真1のようなレンガ造りの住宅が今も残っていて使用されている。小区には1990年代に建設された6階建ての住宅もある。レンガ造りの住宅の方は、10戸ほどが連なった長屋がおおよそ10棟並んでいる。2階建ての部分と平屋の部分が後の改築によって繋げられたことが見て取れる。しかし各戸にはトイレがなく、小区内に公衆便所が配置されている。周囲の生活道路は舗装が不十分でぬかるんでいたりかなりデコボコであったりするなど、居住環境は決してよくない。しかし、きれいな自家用車を所有する住民も中にはいて、そうした道路に駐車している様子も見られた。

(b) 職大小区（写真4）

職大小区は江北の長寧北路から西へ入ったところに位置している。道路を挟んで北区と南区に分かれており、北区については、1994～96年に建設され、敷地面積は8.7万㎡、6階建ての住宅が25棟あり、1,116戸、約5,000人が居住している（写真2）。各戸の居住面積は平均して50㎡程度である。建設された当時は、居住環境が優れている模範的な住宅小区として表彰された。南区の建設はもっと古く1980年代であり、3～4階建てのメンテナンスが不十分な集合住宅が並んでいる。

(c) 望湖花園（写真5）

望湖花園は江南の錦江公園のすぐ北側に位置する住宅小区である。2007年に建設が開始され、敷地面積は7万㎡、建築面積は1万㎡、緑化面積は1.6万㎡であり、10階建ての明るい色合いの住宅が14棟配置されていて、770戸が居住している。各戸の居住面積は平均して100㎡あまりと見られる。小区の一角には吉林油田望湖社区管理センターの建物があり、そこには望湖社区居民委員会、同共産党支部、社区警務室、社区サービスセンター、社区衛生サービスステーションなどが置かれている。社区居民委員会は公的な行政システムの末端に位置する一般的な組織であるが、ここではそうした組織の運営を吉林油田という企業が実質的には主導しているのである。その他、小区内には活動ステーション、地下駐車場、運動器具が備わった広場などが配されている。

(d) 濱江嘉園（写真6）

濱江嘉園は松花江の南岸にある最新で最大の住宅小区である。遠隔の油井で勤務していた従業員とその家族を優先的に入居させることを特に意図している。さらに拡大する計画であるが、2013年の段階で261棟あり、11,168戸が入居している。瀟洒な6階建ての住宅が数多く並んでいるが、30階建て前後のマンションも数棟そびえている。各戸の居住面積は平均して120㎡あまりと見られる。小区内は緑化や清掃が行き届いており、社区サービスセンターをはじめ、駐車場、広場、集会所、その他の諸施設がゆったりと配置されている。「居住・レクリエーション・文化・教育・医療・商業が一体となった生態田園住宅小区」とうたわれており、引退した高齢者から幼い子供たちまで、吉林油田従業員の家族の福祉の向上が強く意識されている。この住宅小区の道路を挟んだ向かい側には、松原市で



写真3 小窯小区



写真4 職大小区



写真5 錦湖小区



写真6 濱江小区

最も高級で大規模なショッピング・コンプレックスが開業している。

(2) 閉じた空間の形成

吉林油田は、石油の開発とともに、住宅の供給を含めて従業員とその家族（「吉林油田人」）の民生の改善に力を注いできた。それを効率的に実現するためには、住宅小区やそれらが集中する吉林油田関連地区のような閉じた空間を形成することが必要であった。翻って、そのような閉じた空間を形成することによって、吉林油田という企業の一体性を強め、企業の価値を高めていこうとする戦略を読み取ることができる。

閉じた空間を形成するために最も重要な方策は、住宅所有のルールの設定であろう。吉林油田が建設した従業員向け住宅は、1990年代の住宅制度改革後も、所有が「吉林油田人」に限定され、つまり企業関係者の間でのみ所有権の譲渡が認められ、企業の外部へ売却してはならないという規則になっており、これによって閉鎖的な空間が現在も強固に維持され続けている⁹⁾。最近（2012年）新たに示された方針では、「親が吉林油田人ではない子女の（血縁ではなくて新規に外部から雇用された）従業員にも、吉林油田の住宅を購入することを許可する。」とされており、「吉林油田人」の範囲が若干拡張された。

吉林油田は江北地区、江南地区、前郭石化地区、濱江嘉園地区に4つの不動産管理会社を設立し、住宅の修繕だけにとどまらず、小区内の清掃・緑化・保安などを高い水準に保っている。それらの業務の拠点となる活動ステーションが各小区に置かれており、毎日午前8:00-11:00と午後1:00-4:30



写真 7 吉林油田第 12 中学の出迎え風景



写真 8 吉林油田江北活動センター



写真 9 民生プロジェクト推進のスローガン



写真 10 「城中村」と不動産開発

に開かれて、担当者が常駐している。行政組織の末端の社区居民委員会が住宅小区とほぼ重複しており、住民のさまざまな要求や訴えを受け付けて対応している。ゴミの回収が地区ごとに行われており、社章である「宝石花」¹⁰⁾が目印のゴミ集積場が、小区の各所に置かれている。

吉林油田の従業員の賃金などの待遇が恵まれていることはすでに地域での共通認識になっているが、諸手当や福利の基準を引き上げて年間の一人当たりの収入を大幅に向上させることが引き続いて目指されている。また、これまでは従業員の中でも「身分」があり、親が吉林油田の従業員かどうかによって福利に格差があったが、今後は同等の待遇を享受できるようにするとの方針が新しく出されており、住宅所有と同様にこの面でも「吉林油田人」の範囲が拡張される方向にある。しかしながら、大学新卒者を広く雇用することが期待されるとともに、吉林油田従業員の子を積極的に雇用することも依然として堅持されている。

従業員の家族のための教育、医療、福祉などの社会サービスにも全面的に企業が関与している（写真 7、8）。教育については、松原市や寧江区の系統とは別に、吉林油田による油田教育処があり、豊富な資金により優秀な教師を招聘して高い教育レベルを誇っている。現在は吉林油田の子でなくても入学はできるという。医療・保健施設、体育施設、生涯学習施設などの充実についても一貫して進められている。進学支援や生活扶助の制度も用意されている。

国家のために油田開発へ邁進しよう、それと同時に、私たちの居住環境を向上させようという文脈のスローガンが街のいたるところに掲げられ、吉林油田人の強い使命感とそれに加えて優越感が感じられた。例えば、「民生プロジェクトの建設を推進し続け、吉林油田の人々の生活をますます素晴らしくしよう」（写真 9）、「党の指導を常に堅持し、祖国に石油を献上するという核心的な価値観を積極的

に実行しよう」、「一千万トンを生産する石油・天然ガス田と幸福な石油の故郷を建設するために奮闘しよう」といった横断幕や大きな掲示が見られた。

なぜこのような閉じた空間が形成され、維持され、さらには強化されようとするのだろうか。一つ目の理由としては、経済成長が著しい中国においてエネルギー資源の確保は最優先事項であり、国際的な状況に左右されず安定的な確保を見込むことができる国内の資源開発が重視され、吉林油田のような企業が優遇されて豊富な国家的資金が流入する、という図式があると考えられる。二つ目の理由としては、そのような図式の中で、事実上の国有企業という官僚的な組織が、有利な状況を利用して、自らを増殖させる過程にあるとも考えられる。三つ目の理由としては、近隣とも言える大慶油田において、すでに減産期に入った2002年に経営合理化にともなう大規模な抗議行動が発生したことが契機となり、企業文化の涵養という形で従業員共同体を強化しなくてはならないという危機感が高まったのではないかと推察される。

このような閉じた空間が形成されることによって、それ以外の地区との相違が都市景観において顕在化し、それが社会経済的な格差として認識されるようになる。そうした状況に対して、顕在化した相違や格差を緩和しようという動きも見られる。吉林油田が、例えば油田教育処所管の学校への入学を広く許可するようになったように、自らの敷居を低くしようとする傾向も一部に観察される。松原市政府は、「城中村」と呼ばれるような危険で老朽化した掘立小屋が集まっている地区の再開発を進め、そのような地区に居住していた低所得層に対して公共賃貸住宅や低価格住宅を供給している。それとは別に、民間の不動産開発業者による大規模な商品住宅の開発も市内の各所で進められている（写真10）¹²⁾。ただし、これらの動きは、吉林油田の閉じた空間に起因する松原市中心市街地の二元的な景観を大きく変更するところまでには至っていない。

5. 資源型都市の脆弱性

中国では天然資源の所有権は国家に属し、資源開発が明確に国策として位置づけられ、しばしば特定の国有企業がその主体となる。そのため、その国有企業を通じて大規模な国家投資が行われ、資源開発の拠点となる都市の形成はもっぱらその国有企業が主導する。その結果、かつての計画経済システムが固守されたような特異な空間を形成することになった。そこには、特殊なシステムが特殊な空間を生み出し、その特殊な空間がその特殊なシステムを温存させるという関係が見出され、現代中国の都市空間を考察するための一つの鍵があると思われる。以下では、その特殊な都市空間がはらむ脆弱性について、いくつかの視点から指摘しておきたい。

第1は、資源に依存することそのものによる脆弱性である。吉林油田そして松原市は、資源開発と都市形成のライフサイクルの前半に相当し、確かに最近までは高い経済成長率を誇ってきたけれども、資源型都市の宿命である資源が枯渇することの脆弱性からは将来的には免れえず、あるいは、ナショナルなそしてグローバルな資源の需給関係の影響を必ずや受けるであろうことから、この国有企業と都市空間が今後いつどのように変化するのか注目される。

第2は、「第二の創業」に関わる脆弱性である。ライフサイクルの繁栄期のうちに産業構造の転換を図らなければならないわけであるが、国有企業が国家政策の下で長きにわたって主導してきた結果であるこの都市の産業構造をダイナミックに転換させることは、果たして可能であろうか。また、このことは、「資源の呪い」とも関係する。それは資源が豊富である国ほど経済発展しないという逆説であり、発展途上国の国民経済のレベルで宗主国との関係などにおいて論じられてきたことであるが、国民経済の内部において天然資源を産出する地域についてもこの考え方を応用できるだろう。中国においても、資源型地域では人口と経済活動が分散化しがちであり、核心部の集積効果が弱く都市機能が偏っているため、製造業やサービス業の発展を抑制し、「資源の呪い」の陥穽にはまりやすい、という指摘がなされている¹³⁾。

第3は、「国進民退」に関わる脆弱性である。「国進民退」すなわち国有企業の躍進と民営企業の後退が、2000年代半ばから指摘されるようになった。国有企業改革は1990年代末から行われたが、資

源開発を含む特定の産業分野に限れば、国有資本が絶対的な支配権を保持している¹⁴⁾。このように国有セクターが肥大化していることが、市場メカニズムの機能を妨げているのだけれども、そこには共産党幹部の既得権益があり、解決は簡単ではない¹⁵⁾。このような現代中国の政治経済の焦点とも言える敏感な問題が、資源型都市の行く手には立ちはだかっている。

最後に、資源と階層あるいは資源と民族に関わる脆弱性である。天然資源が国有として定義され、実際上は国有企業が主導して開発を進めた時、国有企業グループに加われない人々は開発の果実になかなか接近できない。松原市の中心市街地の二元的な都市景観は、吉林油田の恩恵を享受できる人とできない人との格差を体現したものになっている。それは社会経済的な階層間の問題であるだけではない。そもそも天然資源が誰のものかまで遡って考えた時、民族間の問題となる可能性もはらんでいる。

謝辞

本研究の調査活動にあたっては、中国科学院東北地理及農業生態研究所の張柏研究員から多くのサポートやアドバイスをいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

注

- 1) 陳慧女『中国資源枯渇型都市的産業転型——基於科学發展觀視角的分析』中国社会科学出版社，2012。
- 2) 常春勤・関中美「資源開発与鉱業城市發展耦合關係与機理」（喬旭寧・常春勤・陳小素・楊永菊・聶小軍・関中美編著『資源与区域發展』煤炭工業出版社，2012），173-186 頁。
- 3) 徐建山等『石油的軌跡——幾個重要石油問題的探索』石油工業出版社，2012。
- 4) 前掲 3)。
- 5) 前掲 3)。
- 6) 中国石油吉林油田公司ホームページ <http://www.jl.xinhuanet.com/youtian/jianjie.htm>（2014 年 6 月 14 日閲覧）。
- 7) 中国石油吉林油田公司編『吉林油田五十年』（「基地建設」396-401 頁）石油工業出版社，2010。
- 8) (1) 張福山「迅速崛起的城建事業」（前郭尔羅斯蒙古族自治县委宣传部・前郭尔羅斯蒙古族自治县文聯編『騰飛的前郭尔羅斯』2001），81-91 頁，(2) 『前ゴルロスモンゴル族自治県地名誌』（内部資料）1989。
- 9) 吉林油田の内部の状況については、数か所の住宅小区における聞き取り調査に基づく他、(1) 中国石油吉林油田公司ホームページ http://www.jl.xinhuanet.com/youtian//2012-10/19/c_113430628.htm に掲載された新聞記事「以發展促民生 以民生聚人心吉林油田着力建設和諧家園」（吉林日報 2012 年 3 月 1 日版）（2014 年 6 月 14 日閲覧）や、(2) 阿汝汗編『松原文化述略』時代文芸出版社，2009 を参考にしている。
- 10) 「宝石花」はそもそも親会社である中国石油天然氣（ペトロチャイナ）の社章であり、子会社の吉林油田に属する施設などにはよく付されている。写真 8 や写真 9 にも見られる。
- 11) 範鳳勤主編『松原年鑑 2012』長春出版社，2012，p. 177。
- 12) この都市の人口や経済の構造から判断すれば、近年の怒涛のような不動産開発は過剰な投資ではないかとも危惧される。
- 13) (1) 謝繼文「“資源詛咒” 国内研究現状述評」對外經貿 12，2011，27-29 頁，(2) 郭文炯「“資源詛咒” 的空間結構解析—核心辺縁理論視角」經濟地理 34，2014，17-23 頁。
- 14) 大橋英夫「習近平・李克強を待ち受ける「二つの罌」」（21 世紀中国総研編『中国情報ハンドブック』蒼蒼社，2013），19-49 頁。
- 15) (1) 柯隆「經濟教室 視界不良の中国經濟(中) 不動産バブル崩壊の恐れ」日本經濟新聞 2014 年 5 月 15 日。他方、(2) 丸山知雄「經濟教室 視界不良の中国經濟Ⅳ 民間主導の時代近づく」日本經濟新聞 2014 年 5 月 16 日，は、国有企業の民営化の進展に注目して、「国進民退」の傾向を確認できないとしている。

松原市城市空间演变及发展模式分析

王治良^{1, 2, 3}, 张柏^{2, 3}

(1. 齐齐哈尔大学理学院地理系, 黑龙江 齐齐哈尔 161006; 2. 中国科学院东北地理与农业生态研究所, 吉林 长春 130102; 3. 中国科学院大学研究生院, 北京 100039)

摘要: 20 世纪 90 年代以来, 随着中国经济实力的增长, 内陆滨江城市进入了跨江发展时代。在有着百年历史的扶余县和前郭县基础上建立起来的新兴城市松原市, 近年来经济发展突飞猛进, 先后修建(规划修建)了 6 座横跨第二松花江的大桥联通南北。对照国内外滨江城市跨江发展的过程和模式, 分析了松原市城市空间演变过程、跨江发展的影响因素和驱动机制以及目前发展面临的“门槛”, 提出了政策引导下进行体制创新, 完善产业结构, 加强城际联动, 大力弘扬松原文化, 发展职业教育等措施。努力打造“一江两岸、五桥相连、组团分布、环道串联”的“大松原”城市整体框架, 使其成为联结东北三省和内蒙古自治区的重要交通枢纽和物流中心。

关键词: 滨江城市; 跨江发展模式; 松原

1. 引言

世界上许多著名的城市大都傍水而建, 在城市发展到一定阶段时就会从单岸走向两岸发展。据不完全统计, 约有 60% 的国家首都属于大河流域城市, 跨江发展是其必然。在国外有的城市在城市形成早期便开始跨江发展, 如巴黎、伦敦; 大多城市是在工业革命以后开始选择跨江发展, 如明尼阿波利斯、孟菲斯、圣路易斯等城市。

中国城市亦如此, 历代古都名城, 都位于水陆交通便利之地, 因而具有顽强的生命力, 即使饱经战火刀兵之灾, 也能死而复生^[1]。古人选择城址综合考虑地理因素、自然环境、军事防御等诸多因素, 在利于生产、生活、生存的地理条件之地建城。以《管子》的地利说为集大成者。

《管子·乘马》云: “凡立国都, 非于大山之下, 必于广川之上, 高毋近旱, 而水用足, 下毋近水, 而沟防省。因天材, 就地利。故城郭不必中规矩, 道路不必中准绳。”

《管子·度地》云: “故圣人之处国者, 必于不倾之地, 而择地形之肥饶者, 乡山左右, 经水若泽, 内为落渠之写, 因大川而注焉。乃以其天材, 地之所生利, 养其人, 以育六畜。”

《管子·水地》又云: “水者, 何也? 万物之本原也, 诸生之宗室也。” “是以圣人之治于世也, 不人告也, 不户说也, 其枢在水。”

故中国古代城邑大都山水环绕, 无山则水绕之。根据国际著名的地理学家陈正祥先生所编绘的中国“城的年龄”图, 自周初至清末约三千内, 中国境内筑有约 4300 座城邑, 其中周初至汉初(城龄三千至二千年)所筑城占总数的 40%, 汉初至五代(城龄二千至一千年)占 39%, 宋至明中叶(城龄一千至五百年)占 15%, 明中叶至清末(城龄五百年以下)占 6%^[1, 2]。

古代中国重农抑商, 以自给自足的自然经济为主。因循守旧、墨守成规和闭关自守更使近代中国陷入半封建半殖民之境地, 纵有清末的“洋务运动”, 直到 1937 年才有茅以升设计的跨钱塘江大桥, 实难以改变中国城市因水而兴、受水所束、隔江相望的窘迫, 才有“我住长江头, 君住长江尾。日日思君不见君, 共饮长江水”的千古流传。

到现代, 特别是改革开放以来, 中国经济飞速发展, 业已进入城市化加速发展阶段。城市数目猛增, 原有的城市的范围大大扩展, 城市总体经济实力巨增。依水而建的城市大都提出跨江发展的战略目标, 如上海、杭州、南京、沈阳、哈尔滨等在 20 世纪 90 年代就开始实施跨江发展战略。通过对国内跨 50m 以上江河的城市进行统计分析, 全国有 136 座跨江河发展城市, 其中有 56 座城市跨江发展程度较高, 占总数的 41% (如第 1 表)。跨大江大河且两岸发展相对均衡的城市数量较少, 跨宽 500m 以上河流的城市仅 8 座, 多为经济水平较高的省会城市^[3]。

城市跨江河发展是城市空间结构演变过程中的一种特殊形式, 是城市拓展生长空间、优化空间结构、产业结构以及提升城市竞争力, 实现跨越式发展的重要举措。城市空间扩展研究已成为中国城市研究的热

点问题，尤其是近十多年，中国学者对城市空间拓展进行了大量深入细致的分析研究^[4-10]，但对跨江发展这一城市空间演变形式的研究，通过检索文献发现国内外学者对其研究较少。在国外仅有一些较分散的探讨^[11-16]，国内学者研究多侧重于总结我国城市跨江河发展的普遍影响因素和发展模式^[17-23]，对单个城市的具体分析较少^[24]。

第 1 表 中国跨 50m 以上江河的城市统计表

河流宽度	城市数量	代表城市
>1000m	9	南京、杭州、武汉、哈尔滨
500-1000m	14	重庆、上海、广州
200-500m	56	沈阳
100-200m	25	天津、长春
50-100m	32	芜湖

现有研究表明，滨江城市跨江发展受众多因素影响，比一般城市空间扩展要复杂。由于各城市发展条件不同，城市跨江发展过程和模式有很大差异，需要在理论和实践层面进行系统研究。建于 1992 年的吉林省松原市，是由以第二松花江为界江南的前郭尔罗斯自治县和江北的扶余县两个老县城为基础建立的一座新兴城市。在综合分析国内外滨江城市跨江发展过程和模式的基础上，分析了松原市城市空间结构演变和跨江发展的影响因素和驱动机制，以期破解松原市城市发展过程中的“门槛”。

2. 松原市城市空间演变

2.1 松原市概况

松原市位于吉林省中西部，地处北温带，介于东经 123° 6′ -126° 11′，北纬 43° 59′ -45° 32′ 之间。北以松花江与肇源县分界，东与长春市、南与四平市，西部与白城市为邻。全境东西长 240km，南北宽 172.4km，幅员面积 2.2 万 km²，占吉林省面积的 12%。总人口 281 万人（截至 2004 年底），有汉、满、蒙古、回、朝鲜等 31 个民族。

松原市下辖扶余县、前郭县、长岭县、乾安县和宁江区 4 县 1 区（如第 2 表），设经济技术开发区、农业高新技术开发区和查干湖旅游经济开发区 3 个省级开发区，太平川、郭尔罗斯、长山、水字、陶赖昭、蔡家沟、雅达虹等 7 个市级工业园区。



第 1 图 吉林省松原市地理位置图

第 2 表 松原市行政区概况

行政区	面积 (km ²)	人口 (万)	政府住地
宁江区	1269	52	宁江区（江北）
扶余县	4464	77	三岔河镇
前郭县	5117	58	前郭镇
乾安县	3522	30	乾安镇
长岭县	5787	64	长岭镇
松原市	20159	281	宁江区（江南）

注：此处区划地名资料截至 2005 年 12 月；面积、人口数据根据《中华人民共和国行政区划简册（2006）》，人口截至 2004 年底。

2.2 松原市建城史

松原地区最早的文化当属肃慎文化和扶余文化。公元前 22 世纪，这里属于早期肃慎王国。在西汉初期，涉貊人在这建立了中国东北地区第一个地方农业制国家——扶余国（都城长春），扶余国的农业畜牧业已经十分发达，开创了北疆历史文化的先河。

据有文献可查的资料记载，松原地区建城的历史，可以上溯到古代渤海国时期。

北魏魏文帝太和十七年(493)勿吉族灭夫余国，这里归属勿吉。隋朝时勿吉称靺鞨，隋统一中原后，一直生活在粟末水（今第二松花江）两岸的靺鞨七部之一粟末部逐渐强大，自号渤海，该地归属靺鞨的伯咄部。唐代宗宝应元年（762 年），唐朝正式诏以渤海为国。渤海立国后，经过数世的发展，成为历史典籍中誉称的“海东盛国”。渤海学习唐朝封建制“开置郡邑”后，在原靺鞨伯咄部所居之地（今松原市东北部，宁江、扶余地方）设夫余府（府城址即在今伯都讷古城址），置地方官治之^[25, 26]。渤海国的夫余府城，应该是松原地方最早的城郭。

辽代，契丹人征服渤海国后，在松嫩两江交汇流域先后设立长春州和宁江州两个州城。长春州位于今前郭县八郎镇塔虎城旧址。道宗清宁四年（1058），辽王朝为了加强对生女真部落政治上的统治和军事上的防御，在契丹人生活区域和生女真部落之间的第二松花江与嫩江汇流处设立宁江州（址即在原渤海夫余府城址，今伯都讷古城址）。此为松原地方继渤海设夫余府之后，较早的两个城廓。

在女真反辽、金灭辽的战争中，长春州和宁江州被战火毁灭。今扶余县徐家店乡石碑崴子村东坎下，为金太祖举兵伐辽誓师之地。得胜后，名此地得胜陀。1119 年，松花江南岸（今套浩太乡）以龙坑为中心发生八到九级地震，范围西至塔虎城，东至黄龙府，震中地裂形成一长条形沟壑，地下水大量喷涌，至今未息，形成莲花泡沼泽。时，每三五里一帐，因次生水灾，死数千人。天灾战祸，松嫩两江流域人烟稀少，荒芜数十年。金章宗昌明六年（1195 年），金国出征蒙古弘吉剌惕部，弘吉剌惕部首领忒里虎诺颜率本部及所属五部降金。金国为削减其力量，改变金国内地松嫩两江流域一带因战争和大地震灾害人口骤减的状况，遂将弘吉剌惕六部中的以纳仁汗为首的豁罗剌思（亦即郭尔罗斯）部迁往。该部蒙古人入驻后，受当地农耕文化的影响，逐渐改游牧为驻牧的生活习惯，并在今伯都讷一带设立“纳仁汗浩特”（即城廓，后来有的汉文文献记为那尔浑），此为松原城市演变过程中又一个重要城廓。

元朝，伯都讷属开元路，是肇州通泰宁交通线上的驿站。明朝明成祖永乐六年(1408)，设撒叉河卫，址在伯都讷西北六十里处的三岔河口。明嘉靖二十六年（1547），嫩科尔沁蒙古首领奎蒙克·塔斯哈喇之孙哈布图·哈萨尔第 16 世孙乌巴什，按封建世袭制度率部接管了纳仁汗所属的古郭尔罗斯驻牧地（即松花江、嫩江以南地区和江北岸的“三肇”地区），并以郭尔罗斯作为自己的部号在这里驻牧，部落指挥系统城廓在三江四岸流动设帐。从此，纳仁汗的古郭尔罗斯部大部分领地受嫩科尔沁孛儿只斤氏所辖。而纳仁汗部领地缩小到松花江大拐弯处的里侧台地，由其世袭管辖，是独立的政治军事部落实体，其军事和行政由科尔沁直辖。这一时期，划小范围的纳仁汗部一直沿松花江流域驻牧，史籍上也把他们记为“高勒楚德”（即沿江河的人们），汉语还有译为“卦勒察”或“卦尔察”。明万历二十一年（1593），嫩科尔沁所属的纳仁汗部，参加了征伐努尔哈赤的九部联军作战，汉文中将参加这次战争的纳仁汗部译为挂尔察部。

明万历四十四年(1616)努尔哈赤称汗后，后金天聪九年（1635），后金军攻破那尔浑（伯都附近一村），在纳仁汗浩特设立了官军队站，称伯都讷站。纳仁汗部的古郭尔罗斯及嫩科尔沁的郭尔罗斯于是年正式归顺后金。郭尔罗斯以嫩江为界分成前后两旗，江北为郭尔罗斯后旗，江南为郭尔罗斯前旗。郭尔罗斯前旗王府先后设在今查干湖畔、长岭、昂格赉、哈拉毛都一带。1692 年伯都讷设治，由于伯都讷旧城是在宁江州、纳仁汗浩特老城和原兵站、驿站基础上建立起来的，副都统衙署和驻军移驻后，其规模已不能适应需要，加之松花江主航道向外移动，城址离江距离渐远，水路交通亦感不便。为解决这些问题，满族将领伯都讷首任副都统巴尔达到任的次年，即康熙三十二年（1693 年），于伯都讷旧城南 12.5 公里处另建新城（今宁江区城区江北中心地带）。经过一个多世纪的发展，到清朝后期，伯都讷新城已成为松嫩平原上的工商名城和重要的商品集散地。

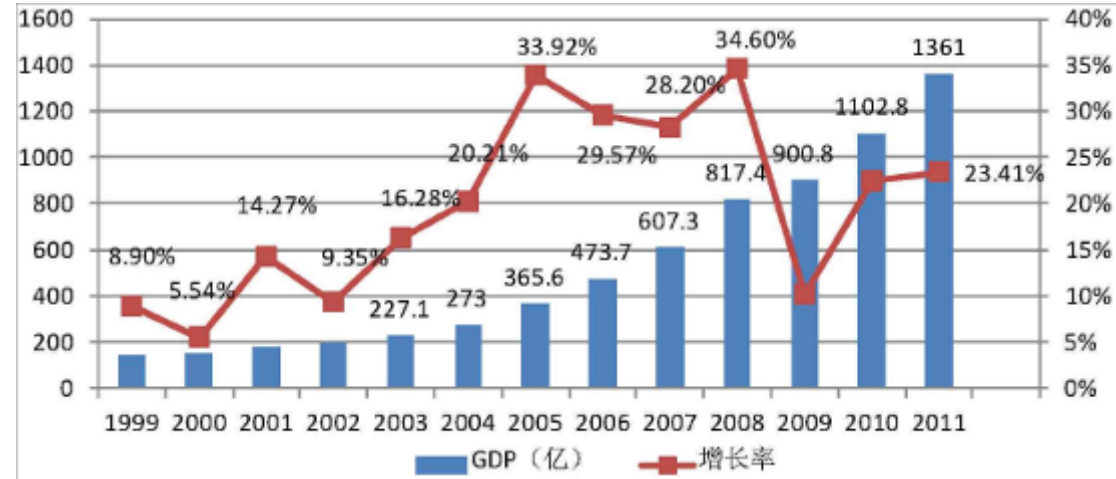
20 世纪初，伟大的革命先行者孙中山先生在著名的《建国方略·实业计划·第四计划第三部：东北铁路系统》中说道：“未论及此网式铁路之各支线以前，吾意以为当先设立一铁路中区，犹蜘蛛巢之于蜘蛛网也。吾且名此铁路中区曰“东镇”。此东镇当设立于嫩江与松花江合流处之西南，约距哈尔滨之西南偏

一百英里，将来必成为一最有利益之位置。此之新镇，不独可为铁路系统之中心，至当辽河、松花江间之运河成立后，且可成为水陆交通之要地”。中华民国成立后，1913 年 3 月，此地改为新城县，隶属吉林省西北路道。后因与河北、山东等省新城县重名，奉令改称扶余县。东北沦陷后，隶属吉林省管辖。1932 年，修建长（春）白（城）铁路时，前后瓦房屯之间偏西建郭前旗站（今松原站），1935 年在火车站所在地设立郭前旗街，伪旗公署从哈拉毛都迁此。此后，郭前旗街快速发展，很快取代哈拉毛都成为郭尔罗斯前旗的政治经济文化中心。

建国后，江北仍为扶余县（1987 年改为扶余市），江南的郭尔罗斯前旗于 1956 年改为前郭尔罗斯蒙古族自治县。1992 年在扶余、前郭两座县城基础上建立松原市。

2.3 松原市城市空间演变进程

松原市成立前，因第二松花江所隔，扶余、前郭两座县城独立发展。1973 年 10 月建成的前扶松花



第 2 图 1999-2011 年松原市经济发展速度图

注：资料来源于 1999 年到 2012 年《吉林统计年鉴》和《松原统计年鉴》^[27]

江大桥（当时全国公路桥梁第二位），彻底改变了发展方式。特别是，1992 松原市成立后，依托吉林油田，以中国石油吉林油田分公司、中国石油前郭石化分公司、长山化肥厂等大企业为主体，重点发展了石油化工、农畜产品加工两主导产业和生化制药、建筑材料、商贸旅游三个新兴产业，形成了石油开采、石油炼制、化工、医药、轻工、食品、建材、纺织、机械、电力等门类较为完整的工业体系和以现代商贸、现代物流、房地产和旅游为主体的现代服务产业发展格局。经济增长速度，在东北区域城市中高居首位，经济总量名列吉林省第三，与包头、呼和浩特、鄂尔多斯一起被称为“中国北方经济增长四小龙”。

基于快速增长的经济实力，松原市又兴建了松原大桥、龙华大桥，规划修建宁江大桥、松陶铁路桥、天河大桥。中心城区基本形成“一心两翼、三区五片”的城市空间结构：“一心”是指江南与江北城区、中心城区与前郭县城统一规划，共同高水平建设滨江新区；“两翼”是指设施相对自成体系的江南、江北两个城区；“三区”是指三个工业区，即雅达虹工业区、江南东南工业区、江南西南工业区；“五片”是指五个居住



第 3 图 松原市城市规划图

片区，分别是江北居住Ⅰ片区、江北居住Ⅱ片区、江南居住Ⅰ片区、江南居住Ⅱ片区、江南居住Ⅲ片区。

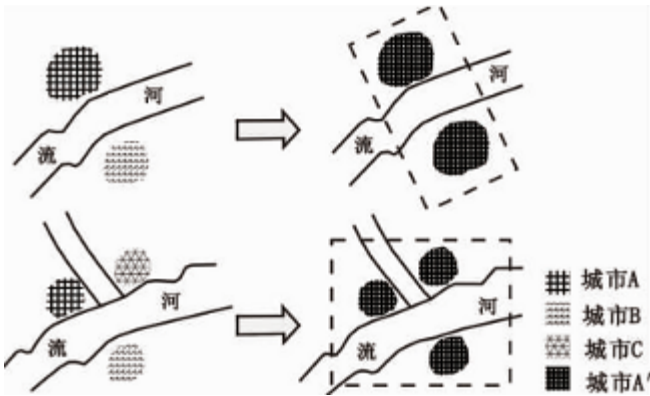
3. 松原市跨江发展模式及发展阶段

李俊峰等 2012 年提出国内外滨江城市跨江发展可概括为四种模式和四个阶段（如第 3 表，第 4 图），其具体含义不再赘述。按松原市目前社会经济发展现状，分析其所处的境地及所面临的“门槛”。

第 3 表 滨江城市跨江发展模式特征及比较

发展模式	特征	代表城市
独立跨越模式	①以一个城市为主体；②对岸多为本城市所辖区域；若为其他城市所辖，可以通过区划调整将对岸区域化为本城市所有；③跨小江河城市多为城市自组织结果，跨大江河城市多在城市发展到一定水平才进行跨江发展	首尔、上海、沈阳
兼并跨越模式	①涉及两个或两个以上城市；②多发生在大江河流域，江河作为城市的分界线；③城市中经济发展水平有较大差异，以实力较高的城市为主体兼并其他城市	杭州、南京
组合跨越模式	①涉及两个或两个以上城市；②多发生在大江河流域，江河作为城市的分界线；③各城市综合实力较接近，共同组合成一新城市；④多为政治需要的结果	布达佩斯、武汉
联合跨越模式	①一般涉及两个城市；②多发生在大江河流域，江河作为城市的分界线；③两个城市有较大的互补性	江阴-靖江

由松原市的历史可知，尽管江北老城扶余县建城历史悠久，但江南前郭县自 1935 年长白铁路设站伪旗公署迁入后，一跃成为郭尔罗斯前旗的政治经济文化中心。目前江北城区人口约有 27 万人，江南城区约有 28 万人，经济总量两城区也相差不大，应属于跨江发展模式中的“组合跨越模式”。组合跨越模式是指在河流两侧布局相互独立的城镇，受政治、经济、历史、交通等因素的影响，两个或多个独立的两岸发展的城市或城镇被组合成一个整体，成为跨江河城市（如第 4 图）。在国外如匈牙利首都布达佩斯坐落在多瑙河中游两岸，1873 年由位于多瑙河西岸的城市布达和古布达以及东岸城市佩斯合并而成的，后经几个世纪的扩建，特别是跨江大桥的修建（现有九座跨江大桥），推动了布达和佩斯的迅速发展成为远近闻名的匈牙利首都布达佩斯。国内“武汉三镇”更为典型，1927 年国民政府自广州迁都武汉后，把原武昌、汉口、汉阳三城划为一大区域，合并为“京兆区”作为首都，成立武汉特别市。解放后，汉口、武昌、汉阳三镇统一建制，设立武汉市。目前跨江建有九座公路长江大桥、两座公铁两用长江大桥、一条过江隧道，南北联动已使武汉成为华中地区的金融、交通、文化中心。

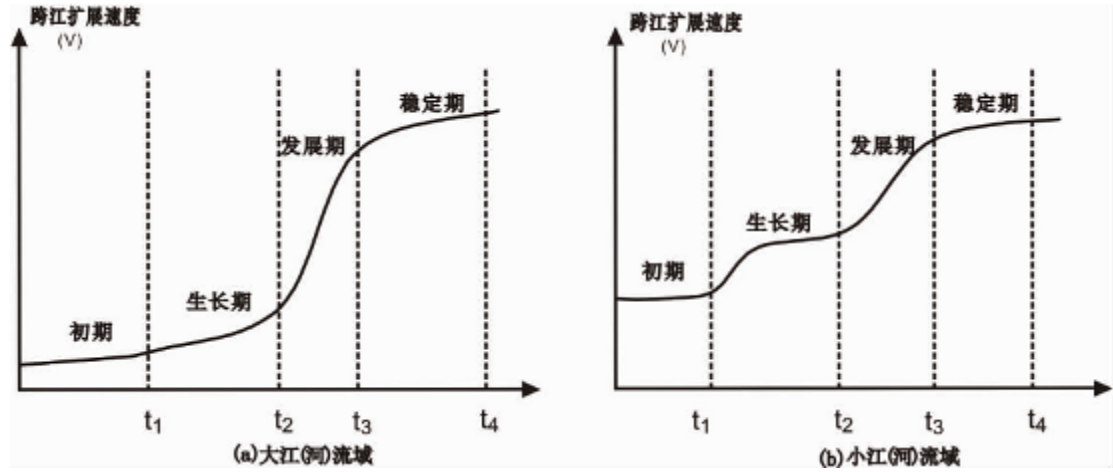


第 4 图 组合跨越模式

如第 5 图，无论大小江河流域的滨江城市，其跨江发展一般要经过初期阶段、生长阶段、加速发展阶段和稳定阶段。小江河流域城市在整个发展过程中，跨江发展速度相对均匀，为自组织驱动型。而大江河流域城市发展在其初期和生长期呈自组织驱动，在发展期政府通过政策、规划、区划调整、园区建设等手段引导城市跨江发展，时间相对集中且发展速度爆发式增长，呈现为他组织驱动。而进入稳定期，城市形态基本形成，又呈现为自组织驱动。

1932 年长白铁路修建以前，尽管松原地区发展已有数百年，但中心城市一直为江北的扶余县，城市空间格局为单岸布局，经济发展缓慢。自 1935 年伪旗公署从哈拉毛都迁至前郭到 1973 年前扶松花江大桥修建前，松花江两岸城市各自发展，尽管早在 1961 年就成立了扶余采油厂等工业企业，但当地经济也未有大的起色，符合滨江城市跨江发展初期和生长阶段发展比较缓慢的规律。直到 1988 年成立了前扶经济开

发区，特别是 1992 年松原建市以后，城市扩张迅速，现基本形成“一心两翼、三区五片”的城市空间结构。为满足城市快速发展的需要，松原市现已修建了 3 条过江大桥，并规划再修建 3 条跨江通道。可见，目前松原市的城市扩张明显符合大江河流域城市的加速发展阶段，属他组织驱动型。在长余高速公路、长白一级路、松原至黑龙江肇源的松花江大桥、大广高速、203 国道以及松陶铁路（规划修建）等交通网络体系的推动下，松原市将成为联结东北三省和内蒙古自治区的重要交通枢纽和物流中心。



第 5 图 滨江城市空间跨江扩展阶段

“门槛理论”认为城镇和工业区发展至一定阶段，常出现妨碍其向某一方向发展的诸如“梯级门槛”和“斜坡形门槛”等的限制因素^[25]。松原市要突破河流束缚实现到两岸跨越发展，必须克服三个妨碍空间发展的基本条件：①达到跨越式发展条件；②克服“跨河”的技术和空间制约；③在城市承载力允许范围内。松原建市时间短短 20 年，近 10 年才实现了经济实力的快速增长（见第 2 图），对比国内其他城市全面跨江发展时的经济实力（见第 4 表），显得捉襟见肘。有研究表明：当一个城市人口年均增长率达到 3%，经济增长率达到 10%，并保持 25 年左右的持续增长时，应该实行跨越式发展从一核发展为多核^[28]。松原市目前经济实力还不如 10 年前杭州跨江发展时的水平，人口年平均增长率仅为 2.6%，要想实践跨越式发展面临众多挑战。不仅要保持住目前的经济发展速度，而且要加快人口向中心城区的聚集，提高人口年均增长率。

第 4 表 松原与南京、杭州经济实力对比表

城市	跨江河	全市 GDP（亿元）	人均 GDP（元）	财政收入（亿元）	时间
杭州	钱塘江	1568.01	25000	188.46	2001
南京	长江	2413	40919	510	2005
松原	松花江	1102	约 38000	约 106.1	2010

4. 松原市跨江发展的影响因素和驱动机制

4.1 影响因素

（1）自然地理因素

河流的宽度、两岸的地形地貌及地质条件是影响城市跨江发展最为重要的自然因素，河流宽度直接影响城市跨江发展的进程。随着城市发展水平和筑桥等技术水平的提高，松原市的经济实力能够支撑跨江交通的建设，河流宽度对城市发展的阻碍作用不大。松花江两岸地势平坦，除去不可抗拒的如地震等地质灾害，洪涝是影响松原城市建设的自然因素之一。

（2）经济因素

大江大河城市实行跨江发展大多是在经济发展速度较快、水平较高时实现的。松原经济已高速发展 10 余年，但经济发展方式单一，以农业和石油工业为主，经济增长率不稳定，易受国际国内大环境影响而出现大幅度波动，如受 2008 年金融危机影响，2009 年增长率由原来的近 30%下降到 10.02%。

（3）政治政策因素

松原市成立以前的扶余县和前郭县可以说是“划江而治”，行政区划不仅对区域经济发展是一种刚性

约束，而且对城市化所要求的空间集聚、中心城市发展所要求的地域扩散亦有制约作用。松原市的成立，打破了行政区划界限，进行了区划调整，实现城市跨江扩展。但政府职能转变，政府管理制度的创新不会一蹴而就，许多工作需要长期细致地开展。

(4) 社会文化因素

社会因素对城市跨江发展的影响主要体现在思想文化、社会心理以及社会基础设施等方面。松原市有汉族、满族、蒙古族、回族、朝鲜族、锡伯族等 31 个民族，在城市发展过程中如何处理民族间事务如民族聚居、民房拆迁、民族文化文物保护等方面，也是影响发展的重要因素之一。

4.2 驱动机制

一个城市实现跨江发展的驱动机制无非两种：一是产业发展驱动城市跨江扩展，城市单侧用地不能满足产业发展需要，城市用地开始向对岸扩展；二是城市化进程加快，城市规模的扩大、城市空间结构的优化驱动城市跨江扩展。不同城市跨江发展的驱动力有一定差异，但总的来说，城市化水平的快速提高导致城市用地紧张是许多国内滨江城市跨江发展的共同因素。松原建市以来短短 20 年间，城市综合竞争力在全省的排位由建市之初的末位跃升至第 3 位，正逐步成为吉林省西部的核心区域。但松原市中心城市存在着城市功能弱、城乡差距较大、人口规模小、技术人才匮乏（如第 5 表）、人口集聚效率低等矛盾和问题，甚至没有一所本地的高等院校，还不能完全承担一个区域性中心城市带动和辐射周边地区的职能任务。如何破解松原跨江发展过程中的“门槛”，成为首要任务。

第 5 表 松原市人才培育现状统计表

年份	中等职业教育					普通高中教育				
	学校 (所)	毕业生 (人)	招生 (人)	在校生 (人)	教师 (人)	学校 (所)	毕业生 (人)	招生 (人)	在校生 (人)	教师 (人)
2007	20	1867	6023	16091	927	141	52208	50356	157459	8945
2008	20	2149	2464	15533	972	138	53511	47505	149739	8742
2009	21	7551	4246	13815	1062	143	52743	45579	143297	9649
2010	23	6333	4053	10023	1103	142	49979	43326	134650	9807
2011	20	2591	3707	9699	1079	142	48890	44998	134070	9541

注：资料来源于 1999 年到 2012 年《吉林统计年鉴》和《松原统计年鉴》^[27]

(1) 完善产业结构，加强城际联动

着眼于吉林省中部城市群和哈大齐工业走廊城市间产业结构的互补和延伸，加快调整产业结构，重点发展石油化工、生物化工、农畜产品加工、机械加工、新型建材、制药等技术密集与劳动密集并重的现代制造业和高新技术产业。随着区域交通枢纽地位的进一步巩固，形成松原市两小时经济圈，向北加强与大庆、“三肇”、哈尔滨的经济联系，向南与长春地区的经济联系，尤其是与长吉图先导开发区的经济联系，完善“一江两岸、五桥相连、组团分布、环道串联”的城市整体框架，奠定“大松原”都市区，努力成为联结东北三省和内蒙古自治区的重要交通枢纽和物流中心。

(2) 弘扬松原文化，提高软实力

注重城市特色形象的塑造和城市文化的培育，尤其是通过滨江新区和松花江景观带的建设，展现松原市悠久的满蒙、辽金、石油、湿地、江河、森林与宗教文化，打造“天河之滨，关外水城”的现代化滨江亲水城市形象，大力培育和弘扬包容、大气、自信、创新的城市精神，提高城市文化品味和竞争力，提升城市软实力。

(3) 体制创新，激发活力

从中心城区人口集聚的途径来看，除去常规人口的自然增长外，市域内人口城镇化迁居和外来人口是中心城人口集聚的主要来源。要大胆进行户籍改革，改变城乡二元结构，要以适宜人居、适宜创业为建设目标，通过制定相关政策，吸引人口向松原集聚。周边哈尔滨、大庆、齐齐哈尔、长春、白城等都有高等学校，而松原没有一所本科院校。应在松原职业技术学校、松原教育学院的基础上，大力发展职业教育，为区域发展培养和输送技术型人才。

总之，城市跨江发展受多种力的作用和影响，政策引导下的体制创新、区划调整下的空间整合、园区

带动下的区域发展、交通引导下的空间组织是松原市跨江发展重要的引导和驱动因素。

5. 结论与启示

正如国内外滨江城市跨江发展一般要经过初期阶段、生长阶段、加速发展阶段和稳定阶段一样。松原市经历了：1932 年长白铁路修建以前数百年的发展初期，中心城市一直为江北的扶余县，城市空间格局为单岸布局，经济发展缓慢；1935 年伪旗公署从哈拉毛都迁至前郭后到 1973 年前扶松花江大桥修建前的生长阶段，松花江两岸城市各自发展；1988 年成立了前扶经济开发区，特别是 1992 年松原建市以后，进入了快速发展期，为满足城市快速发展的需要，松原先后修建（规划修建）了 6 条跨江通道，现基本形成“一心两翼、三区五片”的城市空间结构。明显属于大江河流域城市跨江发展模式中的“组合跨越模式”，目前跨江发展呈现他组织加速发展阶段。

尽管如此，松原市存在着城市功能弱、城乡差距较大、人口规模小、技术人才匮乏、人口集聚效率低等矛盾和问题，还不能完全承担一个区域性中心城市带动和辐射周边地区的职能任务。为此，应该在政策引导下大胆地进行体制创新、区划调整，完善产业结构，加强城际联动，大力发展职业教育，弘扬松原文化，提高软实力、向心力，努力将松原建设成联结东北三省和内蒙古自治区的重要交通枢纽和物流中心。

参考文献：

- [1] 吴庆洲. 中国古城选址与建设的历史经验与借鉴[J]. 城市规划, 2000, 24(10):34-41.
- [2] 陈正祥. 中国文化地理. 第三篇, 中国的城. 香港: 三联书店香港分店, 1981.
- [3] 李俊峰, 焦华富, 梁梦鸽. 滨江城市跨江发展模式、过程及驱动机制[J]. 地理研究, 2012, 31(12):2162-2172.
- [4] 吴启焰, 张占祥. 现代中国城市居住空间分异机制的理论研究[J]. 人文地理, 2002, (3):26-30.
- [5] 张晓平, 刘卫东. 开发区与我国城市空间结构演进及其动力机制[J]. 地理科学, 2003, 23(2):142-149.
- [6] 周一星, 孟延春. 中国大城市郊区化趋势[J]. 城市规划汇刊, 1998, (3):22-27.
- [7] 王冠贤, 魏清泉. 广州城市空间形态扩展中土地供应动力机制的作用[J]. 热带地理, 2002, 22(1):43-47.
- [8] 刘曙华, 沈玉芳. 上海城市扩展模式及其动力机制[J]. 经济地理, 2006, 26(3):487-491.
- [9] 周国华, 贺艳华. 长沙城市土地扩张特征及影响因素[J]. 地理学报, 2006, 61(11):1171-1180.
- [10] 陈本清, 徐涵秋. 城市扩展及其驱动力遥感分析——以厦门市为例[J]. 经济地理, 2005, 25(1):79-83.
- [11] Berry J.L. Internal structure of the city. In: Larry S Bourne. Internal Structure of the City. New York: Oxford University Press, 1971.
- [12] Simmons J.W. Descriptive models for urban land use. In: Larry S Bourns. Internal Structure of the City. New York: Oxford University Press, 1971.
- [13] Roberto C, Maria C.G., Paolo R. Urban mobility and urban form: The social and environmental costs of different patterns of urban expansion. Ecological Economics, 2002, 40(2):199-216.
- [14] Benfield F.K., TerrisJ, Vorsanger. Solving sprawl models of smart growth in communities across America. Natural Resources Defense Council, 2001:137-138.
- [15] Leonardo B. History of Modern Architecture. (Cambridge, Mass.): M.I.T.Press, 1971.
- [16] MorrisA.E.J. 城市形态史——工业革命以前[M]. 北京:商务出版社, 2011.
- [17] 冯越强. 跨河城市研究兼论上海浦东新区开发[D]. 上海同济大学硕士学位论文, 1987:13-15.
- [18] 杨春侠. 城市跨江河形态与设计[M]. 南京:东南大学出版社, 2006:11-12.
- [19] 王兴平. 我国滨江大城市的跨江扩展[J]. 城市规划学刊, 2006, 162(4):91-95.
- [20] 李俊峰, 焦华富. 上海城市跨江发展过程及驱动机制研究[J]. 经济地理, 2010, 30(10):1625-1630.
- [21] 夏非. 南京城市全面跨江发展初探[J]. 长江流域资源与环境, 2001, 20(2):129-136.
- [22] 绍波, 李王明. 国内外跨江河城市发展比较研究——杭州市城市跨江发展经验分析[J]. 经济地理, 1993, 13(4):29-33.
- [23] 杜昌铭. 跨河城市发展研究[D]. 清华大学硕士学位论文, 1997.
- [24] 徐勤政, 吕斌, 刘津玉. 我国大城市跨江河发展的特征及门槛分析——以济南为例[J]. 经济地理, 2011,

30(5):766-772.

[25]李树田. 中国东北通史[M]. 吉林:吉林人民出版社, 1992:255.

[26]田子馥. 地名——地域文化的品牌. 吉林日报, 2007. 9. 6.

[27]李顶伟. 松原市创新创业人才培育模式及政策研究[D]. 吉林大学硕士学位论文, 2013.

[28]赵燕菁. 探索新的范型:概念规划的理论与方法[J]. 城市规划, 2001, 25(3):38-52.

草原から現代都市へ—中国吉林省松原市の成立

秋山元秀（滋賀大学名誉教授）

1. 松原の位置と自然環境¹⁾

吉林省松原市は、省の中西部、市域は省都長春市の西北に接する。鉄道ならば長春駅から長白鉄路（長春～白城）で松原駅まで約 150 km、快速列車で 2 時間の距離である。高速道路では長春から琿鳥高速が通り、やはり 2 時間程度で両都市を結ぶ。この高速をそのまま西北に進めば白城を経て内蒙古の烏蘭浩特に至る。また琿鳥高速は松原で大広高速と交差し、これを東北に転ずれば黒竜江の大慶を経て哈爾濱や齊齊哈爾へ、反対に西南に向かえば北京、河南、湖北、江西を経て広州へ至る。このように松原は東北平原の交通の要衝に位置する。

松原の市域は東北北部の代表的な河川である松花江と嫩江が合流して吉林から黒竜江にかけて広がる松嫩平原に約 2.2 万 km^2 の面積をもつ。松嫩平原は、西南方向に沈積しつつある凹陷構造をもっており、その地体構造にあわせて表面の沖積平野も波状の起伏をもつものの、全体としては海拔 130m～260m 位の間にある平坦な地形をもっている。松原市域の西部、松花江と嫩江の合流地点から西はとりわけ低湿で、查干湖をはじめとした大小の沼沢と塩鹹地が広範に分布し、農用地には適さないが、市域の東部および南部、とくに松花江（いわゆる西流松花江あるいは第二松花江）の右岸は安定した農地になっており、吉林における豊かな農業生産の基地となっている。

気候は年平均気温が 4.5°C 、特に冬季は最低気温が -36.1°C と寒冷であるが、夏季には最高気温が 36.9°C にまで上がり、日照時間も約 2800 時間で農産物の成長に十分な量がある。降水量は年間 400mm 余だが、6 月～8 月に 3 分 2 が集中して降る。冬季にはほとんど降水量はない。

現在は解放後に開発された石油・天然ガスの地下資源に関連する工業をはじめ、産業において第二次産業が中心的な役割を果たしているが、解放前においてはあくまで農業と牧畜が主要な産業であった。現在でも農地の大部分は畑が占め、トウモロコシ、大豆、高粱などが栽培されている。なかでもトウモロコシは糧食生産の 8 割を占める。灌漑が可能な一部の農地は水田になっており、水稻はトウモロコシに次ぐ重要な産品である。一方、西部の草原や塩鹹地では伝統的な放牧も行われているが、近年では食肉用の牛や豚の飼育が増えている。羊毛採取用の羊も多数飼育されている。

2. 伯都訥

松原市は、松花江を挟んで江北、江南と二分される。江北には扶余市と寧江区²⁾があり、江南には前郭爾羅斯蒙古族自治県、乾安県、長嶺県がある。江北は面積では松原市の 28% を占め



1) 以下の記述は主として蘇赫巴魯主編『古今松原』龍門書局 1996 所収の論文による。

2) 厳密には現在の寧江区は、当初前郭爾羅斯蒙古族自治県に属していた江南のいくつかの街道を含んでいる。これは 1992 年に松原市が成立したとき、中心市街地を扶余区とし、それを 1995 年に寧江区と改めたことによる。

るにすぎないが、人口では 47%を占める。現在の扶余市³⁾は長春から哈爾濱に至る東北の幹線鉄道上の三岔河鎮に扶余駅をもち、松原市管轄の行政区としては最も多い人口をもつ。扶余という名は、中国東北の歴史において漢から唐にかけて活躍した民族および国家の名称として知られており、その後も地域の名称として使われた。また寧江という地名も 11 世紀、遼がこの土地を統治するために置いた寧江州が古名である。ここは後に女真族の完顔阿骨打（金の太祖）が遼を打ち破ったところで、後に金朝の第 5 代世宗が、その戦勝を記念して建てた大金得勝陀頌碑が扶余市北部に残っている。江北にはこのような東北の歴史で活躍した諸民族の足跡が残っている。

その中で、現代にもつながり、この地域の特性をよく現わしている地名は伯都納であろう。現在も寧江區に伯都納大街という街路があり、それが新城東路と交差する地点に伯都納公園という公園がある。伯都納とはもとモンゴル語とも満洲語ともいわれるが⁴⁾、隋唐まで遡るこの地域の古名であり、ここに松原の歴史の原点があるといえる。

伯都納という地名が史書に登場するのは明も万曆代に入り、東北平原で女真族、とくに建州女真の勢力が強大となり、その指導者ヌルハチが後金を立国してからになる。後金は松嫩平原の蒙古族の統治のために、松嫩平原の中心、すなわち松花江と嫩江が合流する地点に、軍事拠点築く。それは以前、渤海が夫余城を置き、遼が寧江州を置いた場所で、これを伯都納站と呼んだ。その場所は現在でも伯都納站として集落があり



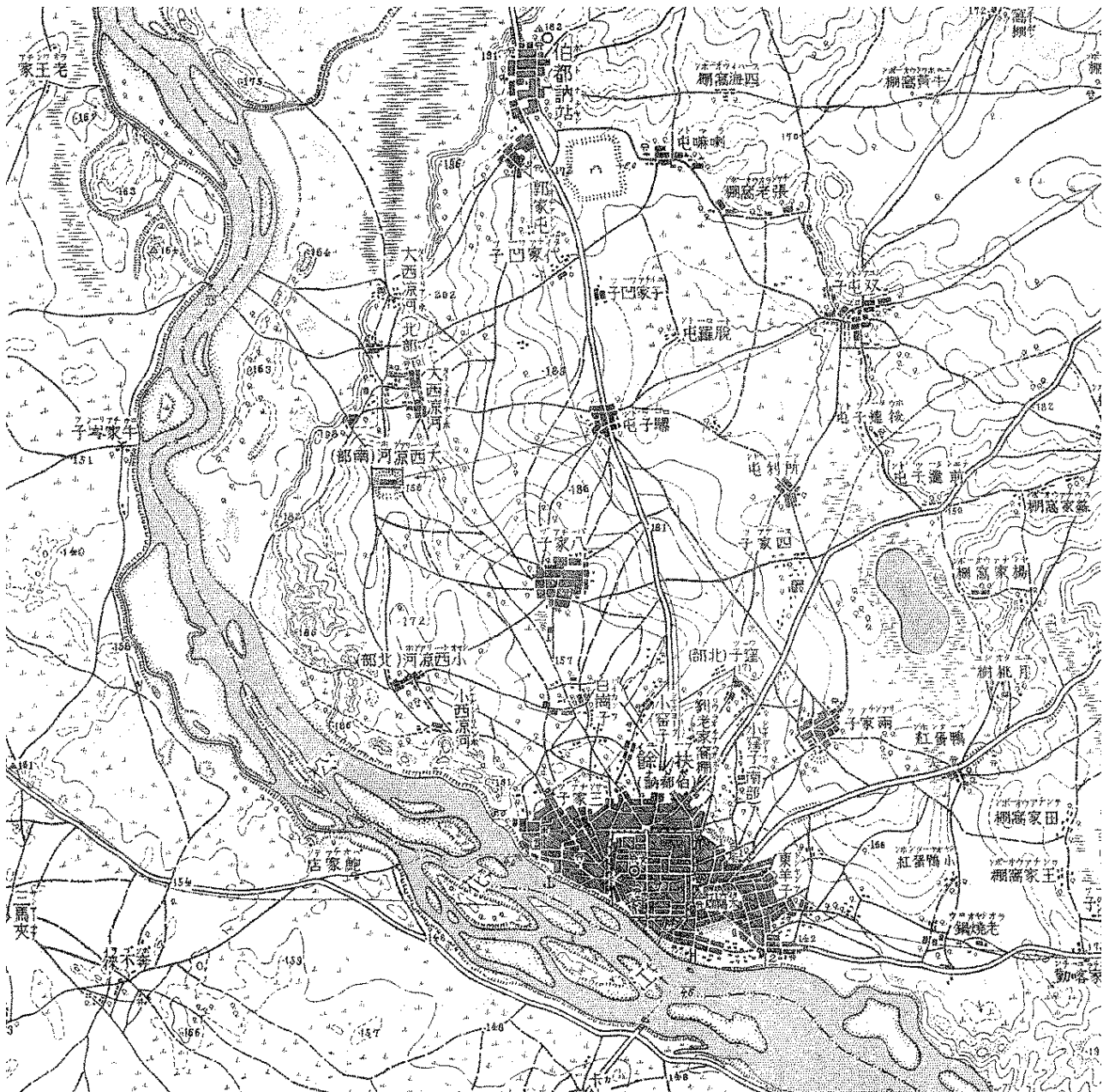
（伯都郷とされている）、その東南に方形の土塁に囲まれた遺跡がある。衛星写真（Google Earth の画像 2014 年）にみるように、正方形の遺構が非常に明瞭である。現在の寧江區の市街地の地点に康熙年間、新城がつくられる前はここに軍屯が置かれ、最盛時には 2 千人の兵が吉林副都統のもとに駐屯していたという⁵⁾。この場所は、次ページに掲載の地形図（昭和 8 年製版 10 万分 1 図）にみるように、松花江に臨む河岸段丘上にあり、河川交通を統括するのに非常によい位置にあった。

清朝は松嫩平原を、嫩江、松花江（第二松花江）で区切って統治することとし、右岸の伯都納站管理の地域は清朝の直轄領とし、欧李という特別な果物の栽培地とするなど、八旗兵を派遣して管理した。そのため元明期にこの地に移住したモンゴル人は、松花江の左岸に移し、こちらは郭爾羅斯前旗（現在の前郭爾羅斯）、後旗（現在の黒竜江）の牧民として位置づけた。

3) 近代になって扶余の古名を復活させて地域名として使われたのは、民国 3 年(1914)であった。この付近を広く統治するために清朝に設立されていた伯都納副都統の管轄範囲に、中華民国になって置かれていた新城府を扶余県と名付けた。1987 年には県級市の扶余市となったが、1992 年に松原市が成立したとき扶余市を扶余区と改めたが、1995 年に市街地を寧江區とし、それ以外を扶余県として県政府は三岔河鎮に置いた。2013 年に県級市の扶余市となった。

4) 伯都納は、モンゴル語で鶉のことだという。（前掲『古今松原』所収の関士桀「伯都納史話」）また歴史記述については阿汝汗主編『松原文化述略』時代文化出版社 2009 参照。

5) 扶余県地名委員会弁公室『吉林省扶余県地名志』1984、上掲『松原文化述略』

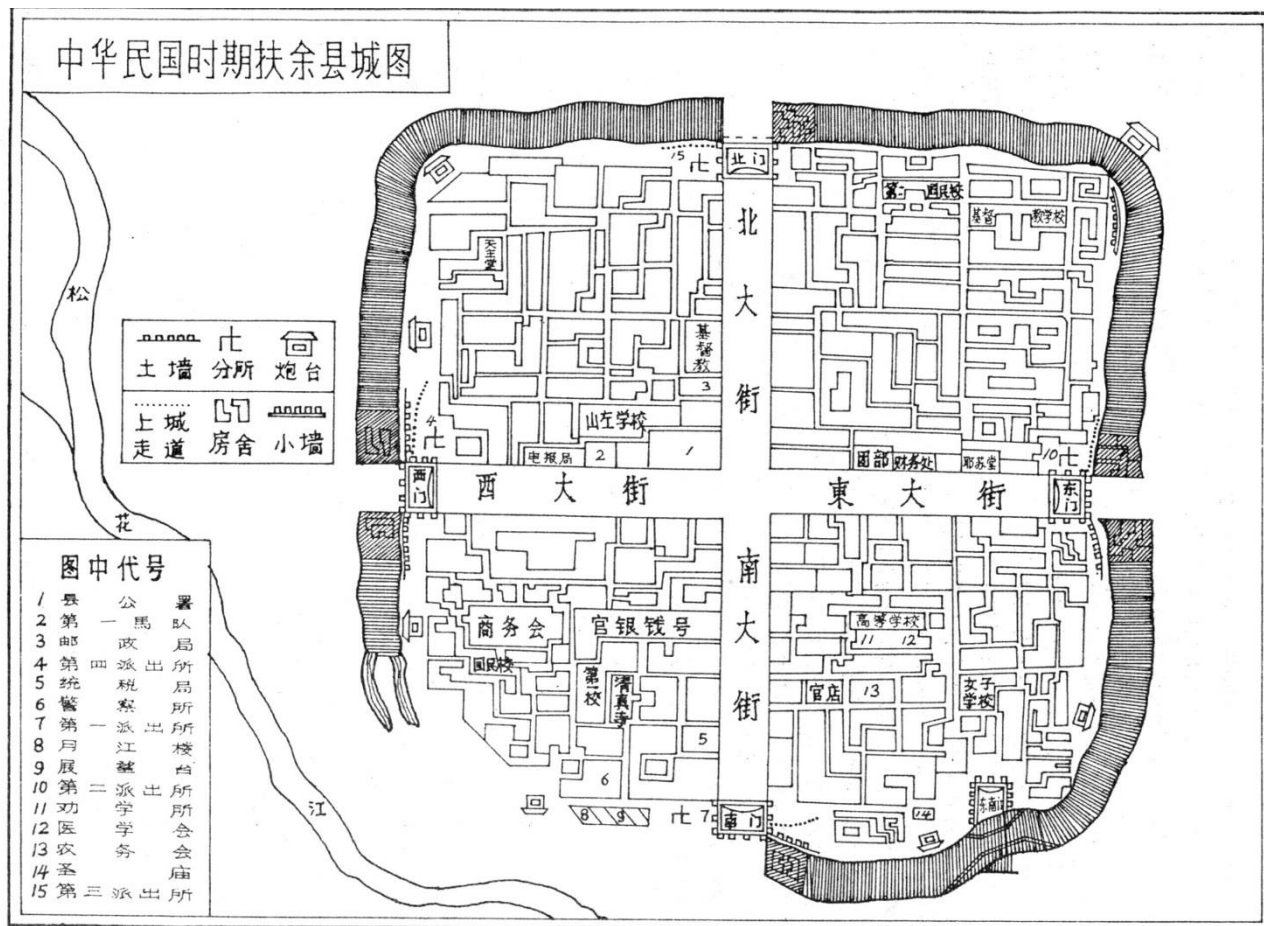


しかし伯都訥城は多くの軍兵が駐屯するには狭く場所的にも松花江からやや離れ、水陸の交通に不便になってきたので、原地点よりやや上流の、現在の江北の市街地の位置に新しい城郭を築くことになった。伯都訥城に対してこれを新城と呼んだ。現在でも、市街地を東西走る幹線道を新城東路、新城中路、新城西路と呼んでいるが、その名残である。新城は面積にして旧城の1.5倍、東西が1.3km、南北が1kmという稍東西に長い長方形で、周囲は4.5km、高さが約4mの土塁で囲まれていた。東西南北の四方に城門があり、城門を結んで大街が走っていた。

『扶余県志』⁶⁾には「中華民国時期扶余県城図」という地図が収められているが、民国時代初期にも清朝の時代とほとんど変わらない城郭内の構造がよくわかる。東西南北の大街の幅員は民国時代に拡張されて14m～17mになり、それ以外の小路は胡同と呼ばれていた。大街の両側には1m位の幅の歩行者のための木板路が設けられ、街燈もあったらしい。中央の十字路には牌楼もあり、伝統的な中国都市としての景観を備えていたといえるだろう。民国12年(1923)に、洪水や豪雨などで城壁も痛みが激しく、まとまった修理を行なったが、その時に城壁の周囲に堀を設けている。本図はそれを加

6) 松原市扶余区史志工作委员会『扶余県志』吉林人民出版社1993

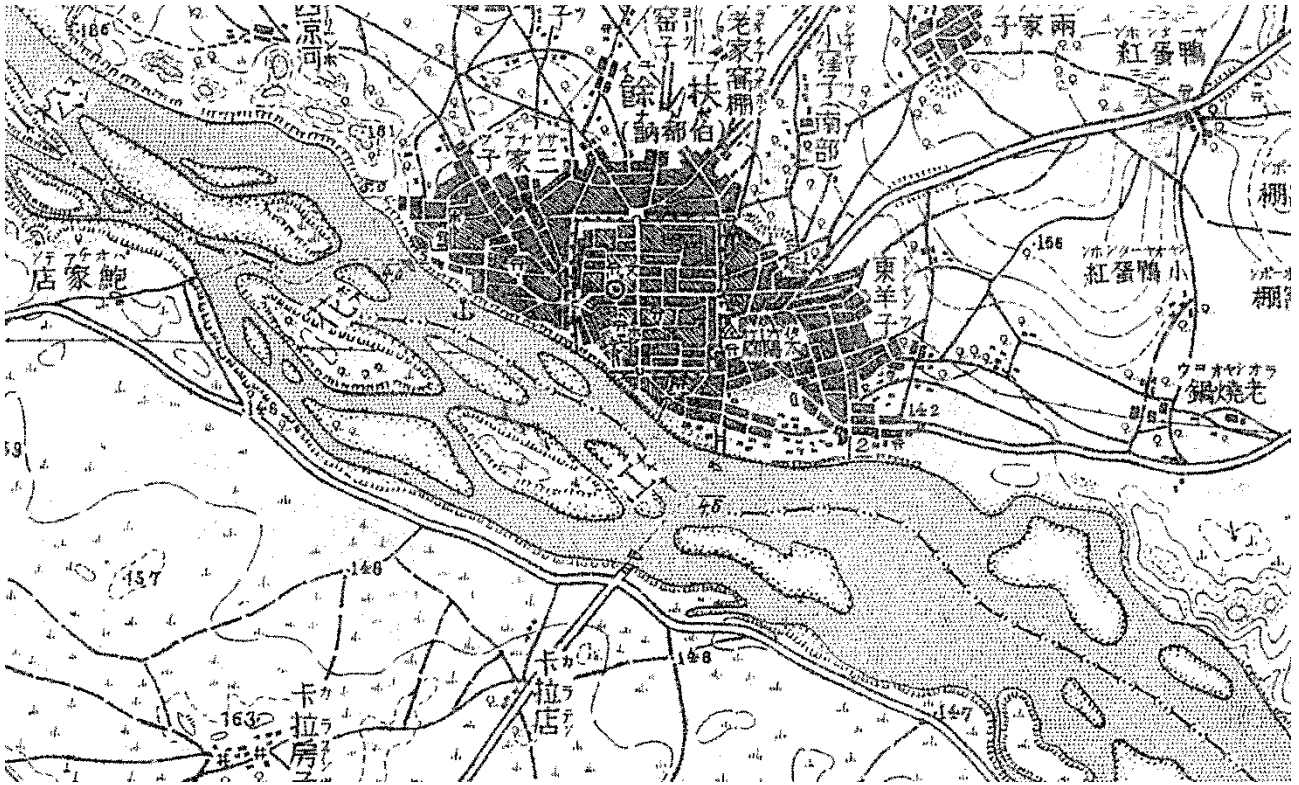
えたものである。堀は総延長 3.8 km、内側には一部に土塁が残っているが、多くはすでに失われているようである。西南の角は城壁も堀も缺けているが、これは松花江の洪水で流されたものである。現在はこの城壁としての土塁も堀も痕跡はわからなくなっている。



東西南北の大街以外の街路としては、民国時代には通貫するものは少ない。その頃に使われていた道路名は、解放後に大幅に改名され現在に至っている。比較的幅員の広いものは「〇〇街」と呼ばれ、それから派生する小道を「胡同」と呼んでいる。胡同の名称には一定の規則があり、派生するもとの街路の名称の頭の一字をつける。例えば文化街から派生する胡同は、文興胡同、文新胡同、文程胡同、文芸胡同、文繡胡同、文錦胡同などであり、民主街につながる胡同は、民楽胡同、民中胡同、民生胡同、民安胡同、民強胡同、民興胡同などというごとくである。このような規則性が他の都市でもあるのかどうか寡聞にして知らないが、街路名をわかりやすくする方法としては一理あるのではなかろうか。扶余県城の中で、胡同とよばれる街路は数え方にもよるが、130 余あるという。

そもそも胡同というのは、北京、天津など、北方の都市に特有の街路名であるが、この扶余においては城壁をもち、東西南北の大街が交差してその間に、小規模な街路と胡同が縦横に走るという、小規模ながらも伝統的城壁都市と同じような構造をもつことは、清朝の東北における都市建設の性格を物語っているのではないかと。後述する前郭爾羅斯の都市空間のありかたとその点では大きく異なる。

現在は、新城中路の一部が歩行街になるなど、街路の改造も進み、旧城内の外には、広い幅員をもつ道路が郊外の拡大とともに新しく建設されている。最初に取り上げた伯都納大街などは、その一例である。また昔は胡同の街衢であった市街地も、旧城改造によって平屋の民家がなくなり、集合住宅群が出現しているが、それでも胡同の名称だけは残されている。江北の寧江区は、いくら改造が進んでも、江南の新市街地に比べれば、どこことなく古いおもむきがある。性格の違う都市の核を、松花江を挟んで二つもつという点で、松原は興味深い都市になっている。次に市街地の様子を示す地図と衛星写真をあげておく。地図は前掲の日本作成の地形図（昭和 6 年）。写真は 2010 年のもの。

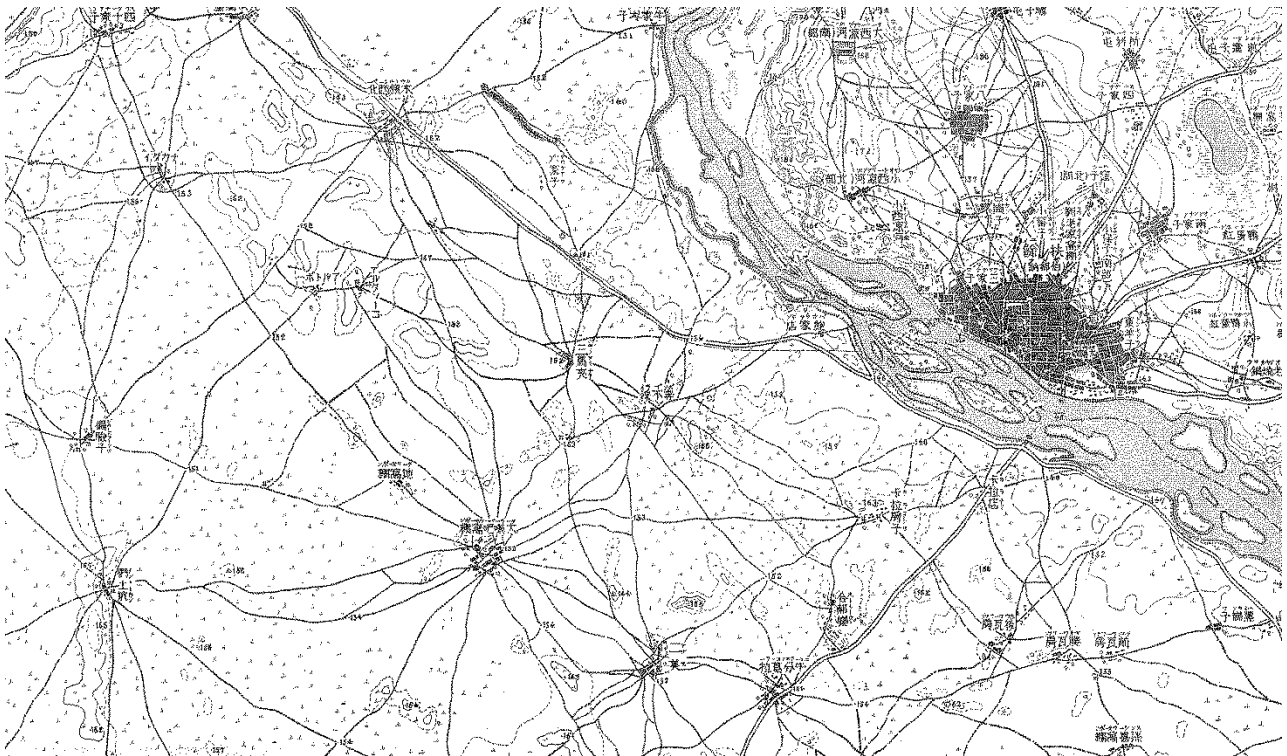


3. 郭爾羅斯

松原市の江南に前郭爾羅斯蒙古族自治县という自治県がある。松花江南の平原は古くは穢貊などと呼ばれた狩猟遊牧を生業とした民族の居住区域であったが、元代にモンゴル族の統治する牧地となって郭爾羅斯部と呼ばれるようになった。郭爾羅斯とはモンゴル語でゴル＝河とロス（ウス）＝水を合わせた語で、河水すなわち松花江を意味するという。前と後はモンゴル語では南北と同じで、郭爾羅斯を南北二分して郭爾羅斯前旗(南)と郭爾羅斯後旗(北)と名付けたものである。

郭爾羅斯は成吉思汗の弟に由来をもつ由緒ある部族の名称でもあり、清代には郭爾羅斯前旗は王族である輔国公固穆、郭爾羅斯後旗は鎮国公布木巴によって統治された。前旗は現在の松原市の前郭爾羅斯自治県以外の乾安县や長嶺県、また隣接する長春市の一部もその範囲にしていた。しかし上級への所属としては、吉林省ではなく哲理木盟（現在の通遼市）に属しており、その点でも松花江の右岸の伯都納（扶余県）とは異なる空間であった。

清代乾隆年間には、この牧地に流民を移住させて開墾に務めることを許し、これによって牧地が次第に農地になるとともに、モンゴル族による旗から、県が設置され、郭爾羅斯前旗の領域は縮小し、現在のような行政領域の基礎がつくられた。しかし民国になっても哲理木盟に属することは変わらず、吉林に所属することになったのは満洲国が成立してその中に含まれてからである。



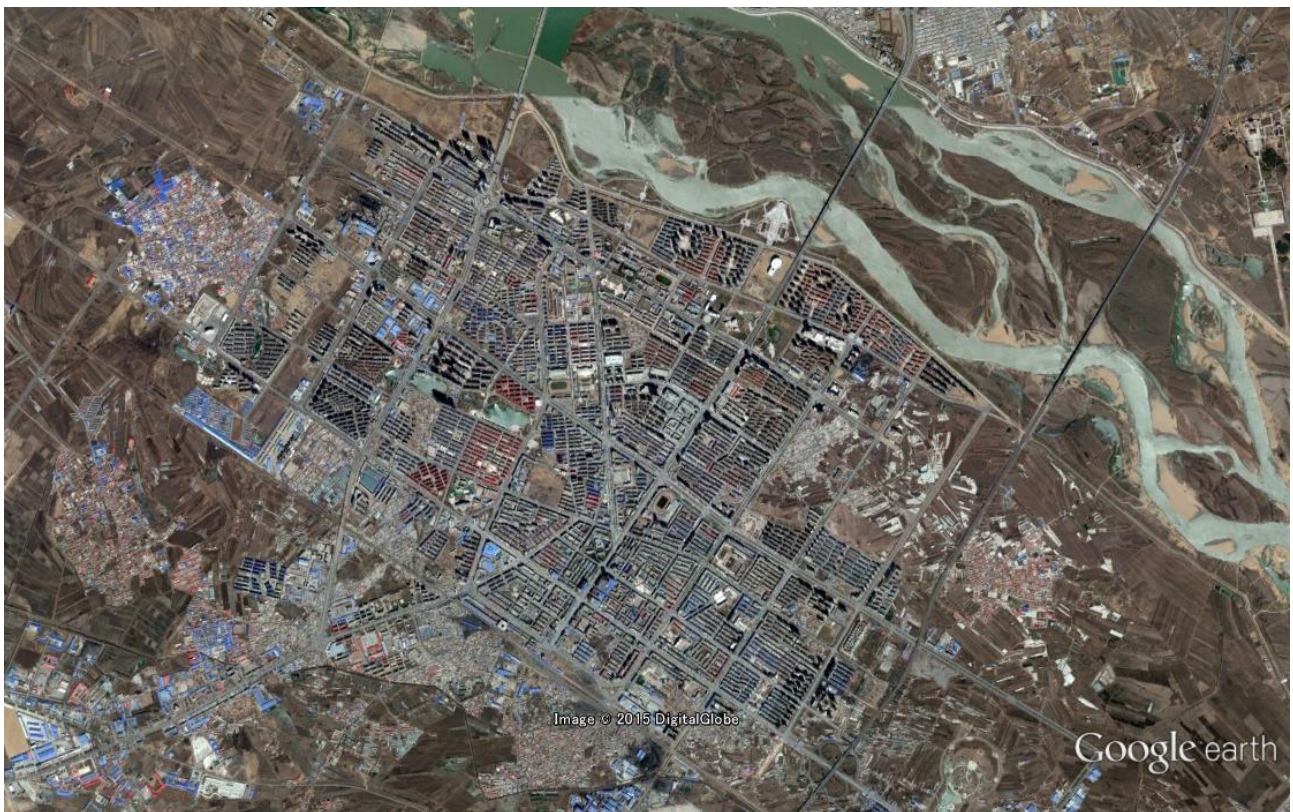
ただ江北に新城がつくられて中心都市として成長していった段階でも、地形図に見るように、この地域には小規模な集落があるだけで、都市的な中心集落はなかった。しかし1935年、満洲国のもと中東鉄道の支線として京白鉄道（新京～白城）が開通して⁷⁾、前郭鎮に前郭旗站が設けられると、駅の周辺に交通関連の施設や小規模な中心集落が生まれ、中東鉄道の三岔河駅（現在の扶余駅）よりも近い位置にあるこの駅を、江北の扶余県からも利用するようになり、江北と江南の間前郭鎮に前郭旗站が設けられるに至り、渡船も設置され、江南と江北と一体になった領域として松原市が生まれる基盤となる。

7) 現在長白線と呼ばれているこの鉄道は、満洲国時代に開通したものであるが、大連～新京間の本線のように満鉄が会社として直接運営する（それを社線といった）のではなく、満洲国から委託されて運営するという形をとったいわゆる国線である。本鉄道は1946年、国共内戦の中で廃止され、この前郭県の領域の中の鉄道はすべて廃線とされる。解放後、再度開通をみるのは1971年である。

1945 年、満洲国がなくなっても郭爾羅斯前旗は行政域としては郭前旗という名称になるが、上級の所属は不安定であった。1949 年解放とともに吉林省に所属することが決まり、1955 年にはこれまでの旗制を撤廃し、前郭爾羅斯蒙古族自治县という新しい形で出発することが決まり、翌年正式に自治県が成立した。

1992 年、松原市が設置されると、江南の前郭鎮に属していた街道のかなりの部分が扶余区（後に寧江区）に移され、江南では蒙古族自治县ではない新しい市街地が、松原市の中心市街地として発展してゆく⁸⁾。下の衛星写真で見るように、江南の市街地は江北と鉄道を結ぶ斜めの幹道以外は、整然と区画された新興都市としての様相が明確である。ここに見える市街地の左半分と松花江沿岸の一角は寧江区、中央より右半分、松花江沿岸を除いた部分が前郭爾羅斯自治県である。現在の市政府・市委、図書館等、市の現代的な施設は、江北の旧市街地ではなく、江南の新市街地に設置されているし、松原の鉱工業の基盤である石油開発関係の施設も江北・江南の寧江区に設置されている。

前郭爾羅斯蒙古族自治县にとってみれば、松原市となったことは、広い大きな枠組みの中で発展の可能性を得たということであるかもしれないが、市街地空間の構造という点から見れば、最も都市らしい部分を取って失ってしまったという見方もできる。



8) この時移された街道は以下の通り。団結街、繁榮街、建設街、源江街、松江街、鉄西街、民主街の街道弁事処、勝利街の勝安など 5 居民委員会、育才街の民景、民建の 2 居民委員会、毛都站鎮、その他いくつかの郷村。最初にあげた街道は、駅前からこれによって前郭県の面積は 240k m²減少した。

松原市城区游憩绿地景观格局研究

张 柏（中国科学院东北地理与农业生态研究所）

前言

1990 年代以来，随着中国城市经济快速发展和城市建设规模日益扩大，城市生态环境问题逐渐突显，城市绿地建设作为解决城市生态问题的有效方法日趋成为城市规划建设的重要内容，目前、许多城市虽然在绿地建设方面加大投入，城市中绿地逐渐丰富，但对于改善城市生态环境、与城市居民生活密切相关、为居民提供游憩环境的高水平游憩绿地系统却仍显不足，缺少系统性的连接和更为宏观的合理城市绿地布局 and 结构，影响到城市绿地生态和游憩等综合功能的发挥，只有通过游憩绿地景观格局和动态的分析，才能为进一步合理有效规划提供依据，从而使城市游憩绿地空间结构不断完善，松原市作为 1990 年代中国东北地区的新兴城市，其游憩绿地景观格局和动态分析研究对本区域城市化进程中生态建设可以提供借鉴。

1. 作为游憩绿地景观生成背景的自然与人文环境概况

松原市位于吉林省中西部的松花江畔，地处哈尔滨、长春、白城三角地带，北部隔松花江与黑龙江省相望。辖宁江区、扶余市、乾安县、长岭县和前郭尔罗斯蒙古族自治县。

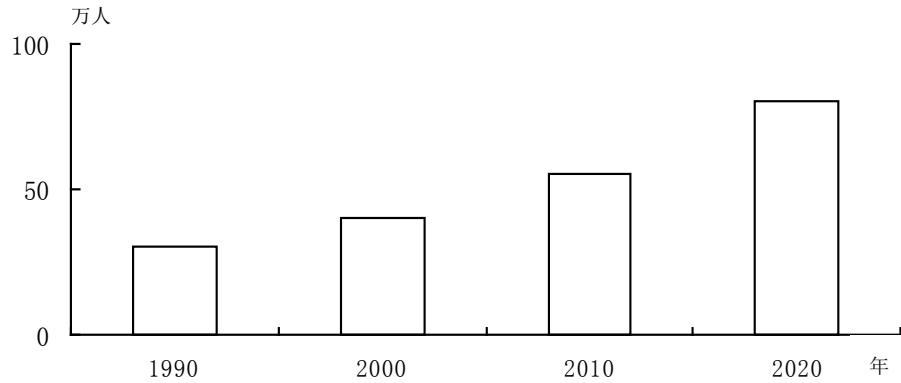
松原市地处松嫩平原南部，地势平坦开阔，起伏和缓。主要由松嫩冲积平原、松辽分水岭台地平原组成，平均海拔高度为 130—266 米之间。南部长岭县一带地面起伏较大，为微隆起地带，是松花江、辽河分水岭的一段，但地势低缓，地面高出西侧平原不过十几米。北部和东北部为第二松花江、拉林河及嫩江冲积而成的平原。扶余县和宁江区三面环水，受新构造运动影响和周围江河水流下蚀切割，形成高出河床 20~30 米的河间台地。这一地域地势总的特征是东、南高，西、北低，由东南向西北、由四周向中间倾斜，地形坡降 0.0005~0.001。西部地面平缓，呈微波起伏状；中部低地为地表水汇流中心；东南部地区地面波状起伏；沿江河谷平原上游向下游倾斜，东北部松花江与拉林河汇流处成为这一地域的最低点，也是全市的最低点。松原城区位于松花江、嫩江冲积湖积低平原地带，海拔在 130m-160m 之间。地势平坦开阔、东高西低。地貌由漫滩和阶地平原组成，漫滩占约 10%、阶地平原占近 90%。良好的低平地貌类型为城市建设提供充分发展空间。



第 1 图 吉林省地貌图中的松原市地貌状况

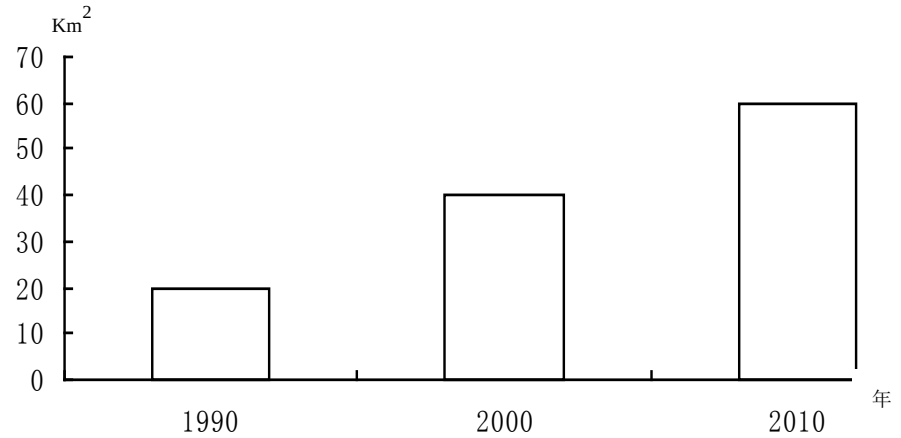
松原市属中温带大陆性气候，亦称亚湿润季风气候。这里气候的主要特点是大陆性明显，四季分明。春季冷暖气团活跃，天气多变，干燥多大风；夏季受海洋季风影响，天气温热，雨水集中；秋季极地大陆冷气团逐渐侵入，秋高气爽，晴日较多，温差大；冬季受极地大陆气团控制，江河结冰，寒冷而漫长，因此，游憩绿地功能受到季节条件的一定影响。

城市发展采取沿江开发战略，以松花江疏浚整形、下游壅水坝建设和沿江两岸综合开发为重点，建设沿江生态风景区。形成“一江两岸、浑然一体”的纵向连线、横向相接城市格局。1992 年松原市总人口为 245 万人，到 2002 年人口总数达到 278 万人，2010 年人口 290 万。其中市区（包含前郭县前郭尔罗斯镇）人口 2002 年 44 万人。2010 年 55 万，预计 2020 年为 80 万（参见松原市城市规划）。



第 2 图 松原市城区人口变化（1990-2020）

松原市城区面积 60 平方公里，由宁江区和前郭县城组成。1993-2005 年增长 1.7 平方公里，2005-2010 年增长 2.1 平方公里（参见松原市城市规划）。



第 3 图 松原市城区面积变化（1990-2010）

2. 游憩绿地景观格局

（1）城区原有游憩绿地建设基础薄弱

1949 年至 1992 年设立松原市，江北为扶余县（1987 年改为扶余市），江南的郭尔罗斯前旗于 1956 年改为前郭尔罗斯蒙古族自治县。在扶余、前郭两座县城基础上建立的松原市，由于原有县镇规模较小，均约 10 平方公里，县镇游憩功能不足，县镇中心靠近农牧绿地，仅有少量小型广场绿地，游憩绿

地建设基础薄弱。



第 4 图 1990 年代松原市城区

（2）游憩绿地分布南北均衡不足

1992 年撤销扶余市设立松原市扶余区，城市职能由县镇变为地级行政中心城市。1995 年扶余区更名为宁江区，宁江区是松原市的唯一城区。前郭尔罗斯蒙古族自治县隶属于吉林省松原市，县城与松原市共处一城。吉林石油集团有限责任公司是中国石油天然气集团公司的全资子公司，油气勘探开发横跨长春、松原、白城 3 个地区。公司机关设在松原市。游憩绿地的增长与城市建设用地的增长存在不协调现象，城市建设用地快速增长，而游憩绿地不但增长较慢，而且占城市建设用地比重下降，分布不均。松原市江南城区游憩绿地面积约为江北城区游憩绿地面积的 2-3 倍。

（3）游憩绿地纵向连接廊道缺乏

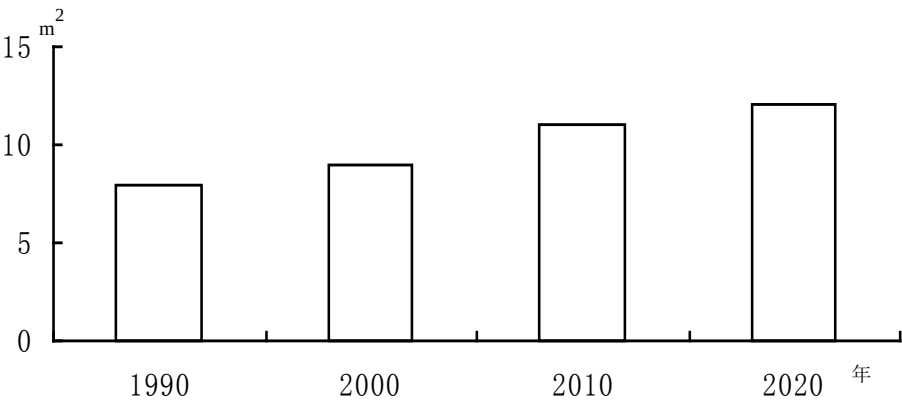
松原城区受松花江的分割作用，沿江漫滩地比较发育，形成土质肥沃，水分条件良好的横向条带状绿地。在城市土地开发过程中，南北向沟谷绿地没有得到有效保护利用，形成横连纵断的游憩绿地景观格局。

3. 游憩绿地建设目标

（1）形成“一心两链、一环多带”的游憩绿地格局

沿江开发战略是松原城市建设的核心战略。实施沿江开发战略，就是要彰显滨江特色，建设滨江新城。以松花江疏浚整形、下游壅水坝建设和沿江两岸综合开发为重点，全力打造沿江生态风景区，加快松原大桥建设，规划松原三桥，形成纵向连线、横向相接、一江两岸浑然一体的城市发展格局。规划目标为形成“一心两链、一环多带”的游憩绿地格局。“一心”是松花江江心岛公园，“两链”

是沿江两岸的带状绿地；“一环”是沿两条高速公路、两条国道布置的宽度 50~200 米左右的环城绿化带，“多带”是沿多条城市主干路和圈儿河两侧形成的带状绿地。城市游憩绿地将在城市空间中占据合理的绿色空间权重，形成游憩绿地建设总量控制，2020 年人均绿地面积达到 12 m²（参见松原市城市规划）。



第 5 图 松原市城区人均绿地变化（1990-2020）

（2）建设多级配套的游憩绿地结构

规划游憩绿地主要布置在滨江（松花江）、滨河（圈儿河）地带。其中：规划市级公园 8 个，分别是江北城区的滨江公园、森林公园、沿江带状公园，江南城区的中山广场、科技公园、青年公园、镜湖公园，以及江心岛公园。每处占地面积一般应在 20 公顷以上。规划专类公园 2 个，分别为植物园（森林公园）和儿童公园（江滨公园）。规划片区级公园 5 个，结合片区中心布置，每处占地面积在 3~5 公顷左右。规划 9 处居住区级公园，每处占地 1~2 公顷。同时鼓励建设小型的街头绿地。形成南北均衡，市级游憩绿地、专类游憩绿地、区级游憩绿地和街头绿地多级配套的游憩绿地结构。

（3）城市中心景观带与城郊绿地协同建设

城市游憩绿地尤其是中心城区游憩绿地的土地成本较高，也是城区游憩绿地建设的限制因素之一。同时，市民对游憩绿地的需求也是多层次的，社区、城区以及郊区的游憩性绿地可以满足人们在不同时间、不同程度的对游憩绿地的需求。因此，在城市绿地的建设方面，要注意满足人们不同空间层次的需求，合理规划、科学布局，在城市游憩绿地建设上宜采取点、线、面多层拓展方法，达到总量提高的目的，大力发展公益性绿地，对改善城市人居环境、提高城市整体形象都有着极大的裨益。适当发展游憩绿地，实现绿地产业化，将对城市绿地建设的持续发展，丰富城市绿地的种类，提高绿地的品位和使用价值起到积极的作用。如环城经济生态林、果林；花卉苗木基地；市民林等等都是一种产业化绿地的有效方式。从而最终通过发展林游合一、牧游合一、农游合一等项目来发展松原城市游憩绿地的产业化建设。

松原城区河流两岸为游憩绿地建设提供了有利的自然条件和社会经济条件，将河流两岸建设成为城区游憩绿带，已经有许多成功的案例。城市景观带有滨江景观带和滨河景观带，滨江景观带为临松花江的江南、江北城区的绿化景观带。重视绿化环境，创造丰富的休闲亲水空间，形成丰富的天际轮廓线。滨河景观带通过圈儿河、镜湖水体整治，设置多处滨水公园，形成串联居住区的滨水休闲游憩空间。同时重视城郊绿地建设及其对城市内部绿地重要的补充作用，充分体现和发挥这一部分绿地的游憩价值。游憩绿地体系构建应延展至包括城市建设区以外的哈达山、查干湖等风景区以及建设区内具有可开发游憩价值的附属绿地（参见松原市前郭县旅游规划）。



第 6 图 松原市前郭县旅游规划

(4) 通过生态城市建设加强游憩绿地重点工程

松原市生态市建设规划中提出的与游憩绿地相关重点及建设工程如下：

江心岛景区建设工程。以生态开发为主建设江上生态公园。公园建设要突出兰（江水）、绿（森林）、白（冰雪）色，使其充分体现生态性和自然性。主要建设内容：船码头、岸边至岛上桥梁或索道、景区游览步道、广场、亭、台、阁和绿化、美化、硬化等基础设施；森林浴场、森林步道绿色健身休闲活动场所；游泳场、水上滑梯、激流勇进、滑雪场、滑冰场等以水本资源和冰雪资源为背景的水上、冰雪上娱乐项目。在岛上建一处旅游村标志物——摩天观景塔，供游人观赏松花江两岸风光和市容、市貌。

森林公园建设工程。森林公园位于市区内，第二松花江右岸，是 50 年代人工营造的防风固沙林和护岸林，经四十年的经营和发展，现已蔚然成林，有 20 多种树乔木和百种草本植物，形成了独特的人工林景观，是水域森林型国家级森林公园。要在坚持可持续发展原则和开发保护相结合原则前提下，继续加大开发建设力度。着重对松花江水体景观资源、自然野趣和保健等多种功能和基础设施进行开发建设，并与民俗风情、宗教文化相结合，把森林公园建设成为集观光、娱乐、游览、休闲、度假为一体的多功能生态旅游区。

查干湖生态保护区建设工程。1996 年吉林省政府批准查干湖为吉林省西部生态保护区，是重点湿地保护单位。经几年建设，生态旅游业的发展已初具规模。在规划期内，要突出休闲度假、水上观光娱乐和民俗风情等项目的开发。在查干湖附近的天然牧场，建设一处集畜牧养殖、饮食住宿、生活习俗体验、历史回顾、骑马射猎、垂钓、民族歌舞表演等综合功能于一体的大型民俗景区。建设民俗博物馆、游乐园、妙因寺、仿古商业街等旅游景点。

以王爷府、塔虎城、库里儿碑、大金得胜陀颂碑等人文景观为依托，建成以查干湖、水上公园、森林公园、西部生态草原等人文、自然景观为一体的生态旅游线路（参见松原市生态市建设规划）。

4. 结语

随着城市经济实力的增强和居民生活水平的提高，市民对具有良好品质的生活环境的渴望日益显现，城市绿地建设受到广泛关注。但是，在市场经济条件下迅猛发展的城市建设中，城市游憩绿地从观念上被重视到建设实施之间尚有相当大的距离。尤其是在老城区难度更大。老城区一般也是城市的中心城区。在漫长的发展过程中，这一地区既是城市文化特色和景观风貌的留存区，同时也存在着住

房、交通、基础设施等建设严重滞后于城市发展的问題。而在城市发展的各个阶段中,各种城市功能又在不断地向这一地区叠加,导致这一地区一直都在超负荷运转。这种超负荷运转所取得的效益产出往往是以牺牲环境为代价的。其结果是住房危旧、交通拥挤、设施不全、污染严重、绿地奇缺就成为老城区所面对的共性问题。

松原市成立 20 年来,松原市城市发展初具规模,游憩绿地格局基本形成,但在城区快速扩展过程中应进一步加大游憩绿地建设力度,注重遵循均衡布置各项游憩绿地的原则,建设各种公园、广场、林荫道,结合其它绿地、绿带在城市中形成一个多层次、多功能、开放式的完整游憩绿地系统。在游憩绿地建设过程中注重多样化的提高和民族化的保持,使松原市城市游憩绿地形成互相协调并具有特色的景观格局,提高城市的景观协调度和自然度,促进城市居民与自然生物的和谐共生,创造良好的城区宜居环境。

参考文献

- 蔡春菊 彭镇华 王 成:扬州城市绿地景观格局分析,《城市环境与城市生态》,2009,22(5)
- 高峻 杨名静 陶康华:上海城市绿地景观格局的分析研究,中国园林,2000.(1)
- 郭杰:居住区周边公共绿地景观设计研究——以南新小区休闲中心绿地景观设计为例,中外建筑 2012(7)
- 金春早:上海城乡交错带绿地景观格局研究——以上海市奉贤区为例,《上海农业学报》2010.(3)
- 马 严 徐宝根:城市绿地的破碎化分析,湖州师范学院学报 2002, 24 (3) :
- 王宏伟:论城市绿地系统的生态游憩-生态与游憩的关系(www.china-designer.com/home)
- 王庆伟:长春郊区游憩景观空间结构研究,东北师范大学硕士学位论文 2004
- 王云才:论都市郊区游憩景观规划与景观生态保护——以北京市郊区游憩景观规划为例,地理研究 2003, 22(3)
- 徐 波 郭竹梅 王 鹏:大城市老城区绿地规划方法的探讨-以郑州市老城区居民游憩绿地体系规划为例,《城市规划》2004(4)
- 俞晟:城市游憩绿地建设研究,《现代城市研究》2002(2)

吉林省松原市の都市公園・広場にみるレジャー空間の特性

石田 曜（京都大学・院 人間・環境学研究科）

1. はじめに

中国では、その急激な経済発展の中で、人々の生活水準が向上している。そのため、平行して自由に使える時間も飛躍的に延びている。1995年5月に週5日制を開始して、1999年には五一、十一、春節などの長期の休日を制定し、現在は年間114日の休日を楽しむようになった¹⁾。このように増大した自由時間において、人々のレジャーも多様化している。

このような中国におけるレジャーの実態とその特徴を把握するために、2014年8月9日～21日の期間において、公園・広場を事例に、利用者のレジャー行動とその意識に関連する調査を行った。本報告では、上記の調査によって得たデータを使用し、松原市における人々のレジャーと、その彼らが利用する空間の特徴について考察を行う。

対象地とした松原市は吉林省の中西部、松嫩平原の南部、第二松花江の湖畔に位置している。1992年国務院により、扶余市を松原市に改称し、松花江畔、嫩江平原に崛起する新興都市として注目された。行政単位としては地級市であり、3県1市1区を管轄している²⁾。市内は寧江区と前郭爾羅斯蒙古族自治県にて構成されている³⁾。対象とする行政区画の寧江区は1995年に扶余区を改称したものであり、区内には松花江が流れている。当地の人々は松花江の左岸（北部地域）を「江北」（以後、江北地域）、右岸（南部地域）を「江南」（以後、江南地域）とそれぞれ呼称している。寧江区として両地域が統括されて以来、20年が経過したが、現在では生活水準の向上や、それに伴う社会や文化の多様化が進む中で、人々のレジャーはどのように展開されているのであろうか。

2. 調査地域の概要

本研究では、松原市寧江区内の公園及び広場（以下、公園と広場の両者を指す場合は公園・広場とする。）を対象に調査を行った。寧江区内には公園が12箇所、広場が16箇所（筆者が数えたものを含む）に立地しているが、そのうち鏡湖公園、児童公園、伯都訥（ボドナ）文化広場の3地点を選定した。各公園は第1図のように、鏡湖公園は江北地域、児童公園と伯都訥文化広場は江南地域に位置している。住民の各公園へ移動する際の交通機関は、徒歩やバス、タクシーを利用している⁴⁾。

調査対象としている公園・広場は、次のような地理的特徴がみられる。まず、鏡湖公園は江南地域の中心に位置しており、国有企業である吉林油田によって管理されている公園であり、官民共同による管理運営体制を構築している。周囲には吉林油田に関連する小中学校や、老人倶楽部などの施設が立地している。次に、児童公園は松花江の岸に位置し、多種の遊具が設置されている。様々なアトラクション、動物が鑑賞できるなど、娯楽性が強い公園である。調査中は松花江の洪水被害のためか、公園内の至る所が水没していた。また、伯都訥文化広場も江北地域に立地している。両者は市政府によって管理されている。西部と東部に離れて位置していることは意図的な空間配慮といえ、江北地域に位置するレジャー空間として、この公園・広場を切り離して考えることはできない。聞き取り調査では、児童公園・伯都訥文化広場にて、他の公園や広場には行かないのかといった質問の中で、相互に両公園及び広場の名前が挙げられた。以下では、上記の3つの公園・広場について、より具体的に詳述したい。

(1) 鏡湖公園

鏡湖公園は市内で最も大きい親水公園のひとつである。吉林油田砒区に位置するため、周囲には吉林油田に関連した施設が多い。元々、ため池として機能していたが、市政府と吉林油田公司により7950万元が投資され、2008年に公園として竣工した。この公園は、総面積は21ha、うち水域面積が7.45ha

を占めており⁵⁾、休閑娛樂区、入口広場区、停車場区、生態景觀区、湖景区の五箇所によって構成される⁶⁾。園内には24時間体制で保安員が巡回している。

鏡湖公園は公園の東部域を指しており、青年大街寄りの西部域は天鵝湖公園と呼称されている。現在、天鵝湖公園では周囲の開発が進んでおり、10階建てほどの高層マンションの建設がみられる。写真1はまさに、工事が進んでいるマンションの広告である。この広告からは緑豊かな自然を有する公園とそこにおけるレジャーが居住環境に関連する宣伝に利用されていることが窺える。

また、鏡湖公園の周辺には白南、望湖、鏡湖といった小区が配置されており、そこには長年、吉林油田で働いた定年退職者に、無料で住居を提供される。一方で、天鵝湖公園周辺は開発が進んでおり、新規の居住者を募集している。鏡湖公園の全景を示すように地図や案内板は無く、公園管理处において、唯一閲覧できた案内図が写真2である。案内図には示されていないが、現在はより拡張が進み、青年大街を挟んだ西部の湿地帯も公園化が進んでいる⁷⁾。このように、公園とその周辺居住区の関わりが深いことが一つの特徴である。



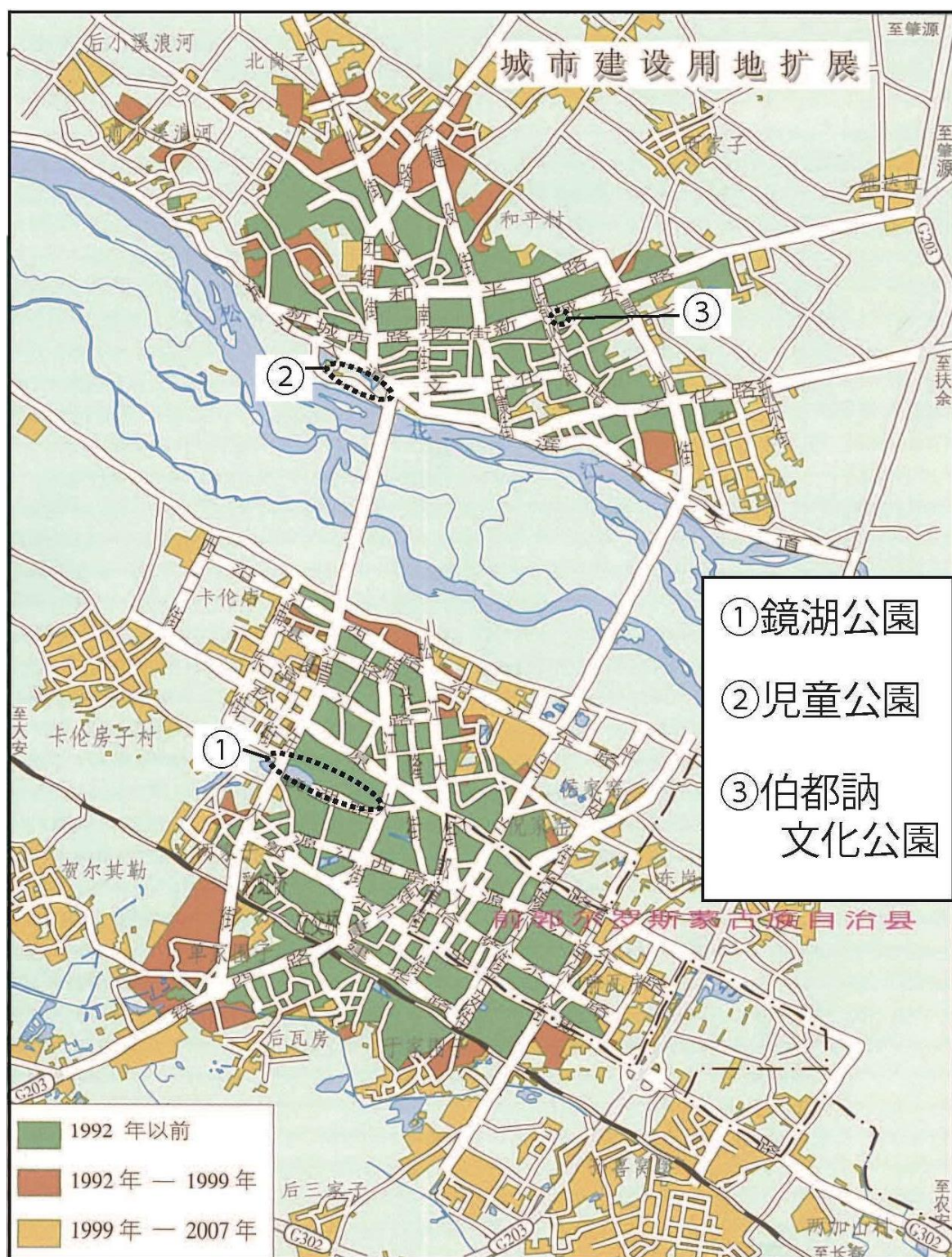
写真1 公園周辺のマンションの広告



写真2 鏡湖公園の案内図

(2) 児童公園

寧江区の江北地域に位置する公園であり、旧称は江濱公園である。これより以前には扶余公園と呼ばれていた⁸⁾。2012年に市政府の決定によって改称し、現在は松原市園林管理中心によって管理されている。公園の総面積は19ha、うち緑地面積は13.48haである⁹⁾。全体のほとんどは緑に覆われている。公園内部は児童娛樂区、健身運動区、動物鑑賞区、綜合服務区、水上遊樂区、休閑活動区の六箇所に大別されている¹⁰⁾。松原市における6つの主題公園（テーマパーク）の一つであり、多くの遊戯施設が園内に点在している（写真3）。それぞれの区域の名称から、金銭の消費性を伴うレジャーと、周辺住民が日常生活内でのレジャーを行う場としての両側面を持っている。公園の全景を示す絵図（写真4）は公園入口に配置されているが、位置関係上、駐車場の後背部にあるため、人々の目に留まることはほとんど無い。筆者が公園を訪れた時期は、河川の増水がみられ、東部の公園はほとんどが水没し、西部の主題公園がある部分にも、水が溜まっている状態であった。



第 1 図 調査対象とした各公園・広場の位置

(《吉林小地图集》編纂委員会『吉林省地图集』中国地图出版社, 2009, 248 頁より一部加筆。)

児童公園は松花江と接しているため、利用者の行き来が頻繁に見られるが、公園管理处の所長の話では、管轄範囲について、松花江と接する部分は入っておらず、あくまで公園内部のみとのことであった。

内部における管理体制としては、保安が巡回していることが挙げられる。写真3をみてわかるように、公園内では一定の街路幅があり、ここを保安員が車両によって巡回する光景がみられた。また、筆者が日中の調査の合間に入口付近にて休憩をしていたとき、似顔絵描きと思われる老人がやってきて、キャンバスを立てようとしていた。そのとき、ちょうど通りかかった保安員がキャンバスを掴み、老人が公園で座っているだけだと主張しながらキャンバスを取り返そうとしていた光景が印象的であった。



写真3 公園内のアトラクション（右）



写真4 児童公園の案内図

(3) 伯都訥文化広場

伯都訥（満語“虎”の意味）文化広場は寧江区の江北地域に位置する広場であり、広場としては同地区最大の面積を持ち、総面積は1.8ha、うち水域面積は0.2haである（写真5）。以前は運動場が立地しており、後に1080万元が投資され、広場として改修が行われた¹¹⁾。この広場は、市民のレジャーなどの活動や催事を行う場所としてよく利用される。広場と銘打ってはいるが、健康遊具や水域や緑地があり、親水的な機能も持っている。その設備内容には、水域は600㎡、秧歌広場は¹²⁾2000㎡が確保されている。また、広場の中央より少し奥への築山は周囲が45m、公園を取り囲むウォーキングコース（文化長廊）は77mであり、公園や広場で可能なレジャーに関する設備が設置されている。全景に関する地図は確認できていないが、入口部分に建てられている記念碑には市委委員会書記によって、その歴史や文化から、設計や科学的意義まで語られている。この広場が竣工されると直ぐに、寧江区は「伯都訥文化活動周」を行い、全区内の82の行政村、52の社区における1100人の農民と市民が合同で劇などを公演し、都市と農村の互助的な性格を示した。この催しには6万人が来場したとされる¹³⁾。

周囲の環境について、東部は2013年現在マンションの建設中である。聞き取りから、当地域は以前は平屋が軒を連ねていたことが分っており、郊外区の開発が活発に行われていることを示している（写真6）。西部はその開発を見下ろすかのように3棟の巨大な不動産ビルが立地する。その後方には、中海文化康城といった小区など、高級な不動産が並列している。一方で、広場の南部は数年前に建設が完了し、現在は多くの人々が居住しているマンションが林立している。また北部には松原市中等专业学校が立地し、これらの中心部に広場は位置している。調査期間中も、日中は周囲の店が新規開店時に打ち上げる花火が続けざまに上がったりしていた。このような状況から、広場の周辺は都市開発が著しい地域といえる。



写真 5 伯都訥文化広場の入口部



写真 6 伯都訥文化広場東部の開発区

3. 松原市における公園・広場の変遷

『松原市志』¹⁴⁾ や『松原市寧江区志』¹⁵⁾ によると、新中国成立後、特に松原市誕生の 80 年代以降、各県城は緑化・美化プロジェクトの実施を始め、「国家レベル園林緑化都市」の建設が強化されていった。1994 年には松原市園林管理处が設置され、市区の広場、街路、公共緑地、企業単位と住民の庭園におけるまで、その緑化と管理を促進してきた。2002 年末までに植栽した樹木は 115 万株であり、建設された緑地や緑島などは 16 箇所、延べ 53,500 平方メートルに及ぶ。これによって既市街の緑化面積は 842.85ha、公共緑地は 161.77ha となった。市内の緑化面積の割合は市の成立前の 19.73%より 26.31%まで上昇し、一人当たり 5.09 m²となった。

本報告で扱う寧江区における各公園、広場について、『松原市寧江区志』の第九編、「城建 環境」には次のように記述している。

公園については、2003 年までに寧江区が管理している公園は江濱公園と森林公園の 2 ヲ所のみであった。前者は松原市で最も早くに建設された公園であり、1986 年に松花江北岸の大橋の西部に整備された。これは後述する本報告の対象地のひとつである児童公園の前身である。森林公園は北岸の東部に形成された。1992 年に建設され、面積は 7,526ha に上り、その広大さで人気を集めた。2003 年までに 4 千万円が投資され、龍華寺、鯉魚圈満族風情度假区、森林旅遊度假区などの風景区や施設を建設しており、観光客の誘致を目指している。

広場について、解放前は寧江区の市区内に広場は存在せず、牌楼などがあるだけであった。1935 年に松原駅（元の郭前旗火車站）が建設された際に、駅前広場ができ、1995 年には拡張された。なお、駅前広場は筆者が訪れた時期には、駅とその周辺の工事が行われていた。1998 年に江南市区に面積 5.08 万 m²の市政広場が建設された。これを除くと、寧江区では 7 つの大型の広場があり、そのうち江南地域には単家広場（5,040 m²）、駅前広場（19,800 m²）、石油大厦広場（4,500 m²）や和星広場（5,820 m²）などが代表例である。また、江北地域には橋頭広場（7,850 m²）、工農広場（5,024 m²）、電影院広場（4,800 m²）や人民商場広場（4,400 m²）があった。その後は道路の整備過程において、2002 年に中山広場が新たに建設されるなど、都市の拡大と平行して公園、広場の整備も行われている。

ただし、地方志から得られる情報は 2003 年までに限定されるため、課題として新聞資料などから背景を追う必要がある。

4. 都市公園・広場にみるレジャー空間の特徴

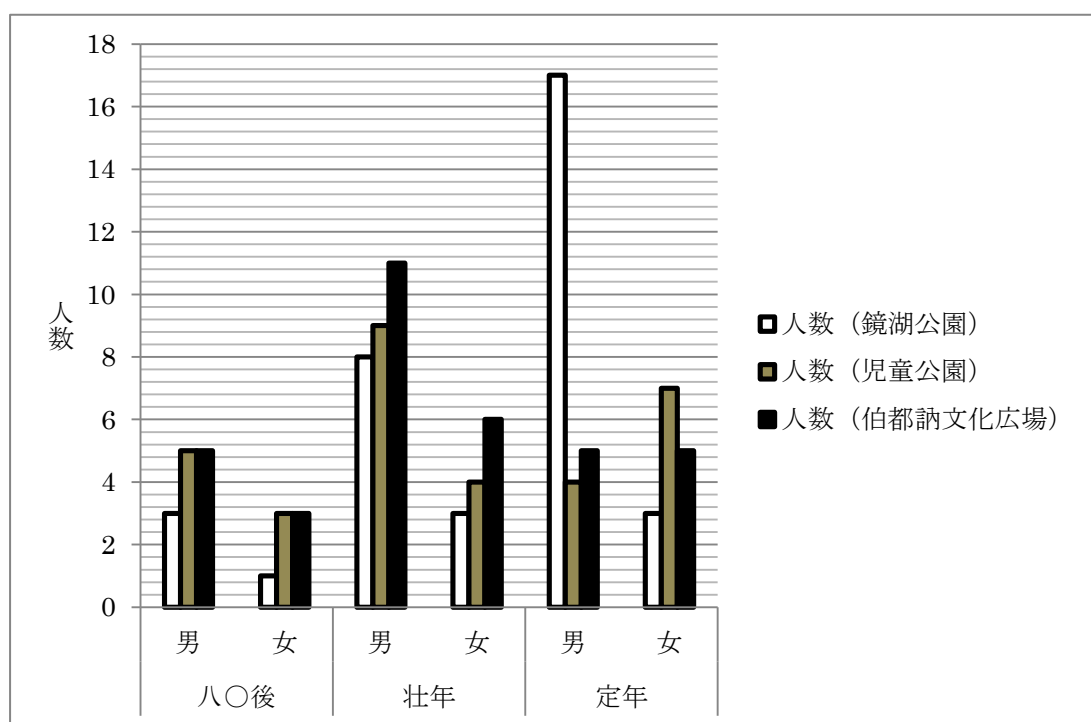
(1) 聞き取り調査の手法

既述の通り、本報告では鏡湖・児童公園の 2 ヲ所と伯都訥文化広場を合わせた 3 ヲ所を対象として、

来園者を中心にインタビュー調査及び観察を行った。調査では各公園・広場において、1日を通して可能な限り滞在した。具体的な調査項目について、性別と年齢の他に、①来園頻度、②自宅からの所要時間（「徒歩」、「車両」の2種に分類）、③来園目的、④各公園の滞在時間、⑤選定理由、⑥レジャーについて抱くイメージ、の6つに絞った質問を行い、回答を得た。また、試みとして居住している社区についても、鏡湖公園のみ聞き取りを行っている。項目⑥に関しては、フリーディスカッション形式を採用し、調査対象者から話題を提供することもあった。曜日による偏りのないように調査は平日、休日ともに行っている¹⁾。なお、本報告では紙幅の都合から、上記の聞き取り項目のうち、①、②、③、⑤を中心に考察を行う。

各公園の調査に関する基礎的な事項は第2図の通りである。鏡湖公園について、その調査人数は35人、うち20人が60代以上の定年層である。一方で、八〇後層は4人と調査年齢層に偏りがある。この理由については後述する。次に児童公園は、調査人数が32人であり、八〇後層8人、壮年層（34歳から男性60歳、女性55歳まで）13人、定年層（男性60歳以上、女性55歳以上）11人と分散して調査が行えた。最後に、伯都訥文化公園は調査人数36人のうち、八〇後層8人、壮年層18人、定年層12人と、若干壮年層には調査人数が多くなった。調査は偏りのないように意識して行ったが、上記のような調査人数の傾向があることを前提として分析を進めたい。

鏡湖公園における来園者調査の偏りには、その地域性が大きな原因と考えられる。前述のように、鏡湖公園は近年整備されたもので、吉林油田によって管理されているだけでなく、周囲の社区には吉林油田を中心に住宅地が構成されており、住民の多くは吉林油田の定年退職者とその家族である。実際に調査を行った35人の居住区としては、公園北部の鏡湖社区が13人、白南社区が5人、望湖社区が1人と来園者の半数以上が吉林油田の管理する社区居住者である。これは、鏡湖公園を特徴付ける要素のひとつといえる。筆者の印象としても、一日を通して、利用者は老人が多かった。



第2図 各公園・広場の調査人数と年齢層

(2) 調査の結果

(a) 利用者の属性

ここでは、特に来園頻度と移動時間をみてみたい。拙稿¹⁶⁾の分類と同様に、来園頻度は「初回」、「毎日」、「週1回」、「週2-5回」、「月数回」、「その他」と分類した。また、移動時間は主に10分単位で区切り、その手段は「徒歩」と「車両」の2種類に分類している。

最初に来園頻度の実態を確認してみたい。第1表は鏡湖公園における年齢層別の来園頻度を示した表である。表からは定年層のうち20人全員が週に数回以上来園しており、うち18人は「毎日」来園していることがわかる。この数値を壮年期層と合わせると、「毎日」項目は35人中26人に及ぶ。

次に、児童公園は様々なアトラクションや動物などが公園内に含まれており、特に、八〇後層はデートや友達との遊びで利用している。また、壮年期層の多くは子連れである。最も来園頻度が多いのは「毎日」項目の13人である。彼らの多くは公園を太極拳などの鍛錬の場所として利用している。そして、伯都訥文化広場は調査対象者のうち、35人中21人が「毎日」あるいは「週2-5」に当てはまり、週に2回以上来園する人が多くを占める。また、八〇後層の8人中、6人が週2回以上広場を利用している。このことから、伯都訥文化広場と児童公園における八〇後層のレジャー活動は性格が異なると考えられる。以上から、来園頻度からみた特徴として、「毎日」あるいは「週2-5」を目処に公園を利用する人々が多いことが挙げられる。

では、このうち一週間に2回以上来園する人々の移動時間はどの程度なのであろうか。そこで、ここでは「毎日」と「週2-5」に該当する人々を対象に、彼らの移動時間との関連性を分析する。このことから頻繁に公園・広場を利用する人々の居住範囲を考察できる。

第1、2、3表は、「毎日」と「週2-5」に該当する人々を各年齢層毎に抽出し、移動時間とのクロス分析を行ったものである。この表から、全体的に「車両」を移動手段としてる人は少数であり、大多数が「徒歩」によって来園していることがわかる。また、「徒歩」の中でも、鏡湖公園と伯都訥文化広場の来園者は10分以内の距離に居住している人が多い。一方で、児童公園は10分以内に限らず、10～30分かけて来園する人も同様に見られる。さらに壮年期層と定年層が隔てなく来園していることが特徴といえる。

鏡湖公園と伯都訥文化広場の移動時間に注目すると、最も回答数が多い10分以内の距離に居住する人の中でも、前者は定年層が多く、後者は壮年期層が多いことがわかる。鏡湖公園における4人の八〇後層のうち、未成年の男性（17歳）を除いた3人は、仕事や子育てが忙しくてレジャーの時間は無いと答えており、さらに周辺小区の住民でもない。このため、この来園者の多くは吉林油田の小区に居住する壮年期以上の人が多いと考えられる。一方で、伯都訥文化広場は新興の開発地区に立地する広場であることから、新たに松原市へ居を構える人やその家族が多い。先ほどと同様に、八〇後層を見てみると、特に夕食後、公園の賑わいに誘われて広場を訪れる人が多い。

第1表 鏡湖公園の各年齢層にみる来園頻度

頻度 \ 年齢層	八〇後		壮年		定年		無回答		合計人数
	男	女	男	女	男	女	男	女	
初回			2						2
毎日	1		6	2	16	2			27
週1		1							1
週2-5				1	1	1			3
月数回									0
その他	2								2
合計	3	1	8	3	17	3	0	0	35

第2表 児童公園の各年齢層にみる来園頻度

頻度 \ 年齢層	八〇後		壮年		定年		無回答		合計人数
	男	女	男	女	男	女	男	女	
初回	2		3			1			6
毎日	1		3	1	3	5			13
週1	1	1							2
週2-5			3	1	1	1			6
月数回		2							2
その他	1			2					3
合計	5	3	9	4	4	7	0	0	32

第3表 伯都訥文化広場の各年齢層にみる来園頻度

頻度 \ 年齢層	八〇後		壮年		定年		無回答		合計人数
	男	女	男	女	男	女	男	女	
初回		1		1					2
毎日	2		6	5	3	3		1	19
週1			1						1
週2-5	2	2	4		2	2			12
月数回									0
その他	1								1
合計	5	3	11	6	5	5	0	1	35

(b) レジャー空間とその選択の特徴

公園・広場でのレジャー活動とその空間の選択について、来園目的と選定理由から考察する。ここでは来園目的を、公園・広場におけるレジャー活動と解釈して分析を進める。

3つの公園・広場に共通する最多の回答は「運動」である。鏡湖公園では回答の6割が「運動」を目的とし、その多くが「散歩」を行っている。児童公園も同様に「運動」が半数近くを占めている。しかし、「鍛錬」が中心であり、鏡湖公園と比較して「散歩」を目的とした人が少ない。一方で、「遊び」と「付添」を目的とした人が多い。これは児童公園がアトラクションなどの娯楽性及び消費性を重視したレジャーの性格が強いといえる。ただし、既述のように、このような娯楽・消費性のレジャー空間は園内の一部分に過ぎず、太極拳やバスケットボールで遊ぶ人々も多くみられた。

伯都訥文化広場は、上述の2公園と同様に「運動」が半数を占める。一方で、「遊び」と「休憩」についても一定数の回答が得られた。広場は狭い面積でありながらバスケットボールコートや親水施設が設置されており、多様なレジャー活動がみられる。

以上から、各公園・広場の共通点は、「運動」を目的とした公園利用が多いことである。特に「運動」の中でも、「散歩」「鍛錬」「健身」といった回答が多いことから、人々はアクティブレジャーを主な目的としていることが特徴である。ただし、その相違点に着目すると、「遊び」と「休憩」を目的とする人々の差異や、児童公園には「付添い」項目が多いように、公園・広場毎の地域との関連性についても考慮しなければならない。

では、彼らが自身のレジャー活動の場として公園・広場を選定する理由とは何なのであろうか。また、人々を惹きつける公園・広場にはどのような特徴があるのであろうか。その選定理由について年齢層別の分類から確認を行う。

第4、5、6表をみると、「風景・環境の良さ」が最多の理由として挙がっている。これは公園・広場を緑豊かな空間として利用しており、その環境的要素を選択しているといえる。次に回答数が多いのは「近い」であり、自宅からの近接性が重要視されている。これらの選択要素に着目すると、それぞ

れ選択理由について、特徴をみてとれる。鏡湖公園は上記の2項目が大多数を占めており、周囲の人々は環境的要素と近接性を重視している。この傾向は、鏡湖公園に強いと考えられる。一方で、児童公園と伯都訥文化広場については、「広い・他にない」という要素についても注視する必要がある。「広い・他にない」項目は、回答者の居住地の周囲において、利用できる特定の公園、広場が限定されていること、つまり活動できる空間という場所性を重要視していることを示す。児童公園は「近い」と同数の回答が得られ、伯都訥文化広場も回答数が多い。さらに年齢層別に比較してみると、回答数が分散している。

興味深いのは、伯都訥文化広場では八〇後層と壮年期層は「風景・環境の良さ」が最多の回答でないことである。これは広場という緑の少ない性格のほか、何か別の要因があると考えられる。この傾向は他の質問項目からみても、その来園頻度、目的、選定理由は様々であり、一貫性は見出せない。ただ、「広い・他にない」と答えた7人のうち、3人は車両を使用しており、娯楽性の低い広場にわざわざ足を運んでいる。これはが多様であると考えられる。例えば、「広い・他にない」と述べた男性（20歳）は「他の場所へは仕事が忙しくていけない。」と述べている。また、男性（70歳）は「江北にはレジャーができる場所はない。室内では活動ができないので、屋外に出るしかない。」と述べる¹⁷⁾。

各公園・広場の来園目的や選定理由の特性について、まず、人々は緑の豊かさや、その賑わいを求めて、自宅から最も近い公園を選択している。特に鏡湖公園においてその傾向は強い。次に、児童公園と伯都訥文化広場では、上記の2つの要素に加え、人々は活動ができる広い空間を志向しているがそれに適応する空間は限定される。

第4表 鏡湖公園の選定理由と年齢層

要素	八〇後	壮年	定年	合計回答 数
	回答数	回答数	回答数	
風景・環境の良さ	1	5	9	15
近い	-	5	8	13
広い・他にない	-	-	2	2
活動・休憩	-	-	2	2
無料	-	-	-	0
安全	-	-	3	3
施設がある	-	-	-	0
人が多い	-	-	1	1
評判を聞いて	-	-	-	0
無回答	1	1	1	3
その他	1	3	1	5
合計	3	14	27	44

第5表 児童公園の選定理由と年齢層

要素	八〇後	壮年	定年	合計回答 数
	回答数	回答数	回答数	
風景・環境の良さ	2	9	7	18
近い	1	4	3	8
広い・他にない	2	2	4	8
活動・休憩	1	1	2	4
無料	-	-	-	0
安全	-	-	-	0
施設がある	1	1	1	3
人が多い	-	-	2	2
評判を聞いて	1	-	-	1
無回答	-	-	-	0
その他	2	3	-	5
合計	10	20	19	49

第6表 伯都訥公園の選定理由と年齢層

要素	八〇後	壮年	定年	合計回答 数
	回答数	回答数	回答数	
風景・環境の良さ	3	4	5	12
近い	2	7	3	12
広い・他にない	3	4	1	8
活動・休憩	1	2	-	3
無料	-	-	-	0
安全	-	-	-	0
施設がある	-	1	-	1
人が多い	2	2	1	5
評判を聞いて	-	-	-	0
無回答	-	-	1	1
その他	1	2	2	5
合計	12	22	13	47

5. 今後の課題

本報告では、松原市の3つの公園・広場を取り上げて、人々の利用行動と、レジャーからみた空間の特徴に焦点をあてた。そこでは、レジャー活動からみた利用実態は、来園者の大多数は10～30分の徒歩圏に居住している。また、週2回以上の来園が最も多いことがわかった。そして、来園者の多くは散歩や鍛錬などの運動を目的とし、その場所として環境のいい公園・広場が選ばれている。これらの公園・広場は人々が日常的に出入りするレジャー空間として利用されている。

課題として、調査を行った各公園・広場はこのように画一的な様相が読み取れるが、一方で、それぞれ歴史的、地域的影響を考慮しなければならない。例えば、児童公園は松原市で最も古い公園であるといった歴史性を無視することはできない。また、地域的にみると、調査当時、江北地域に2つしか存在しない大きな公園・広場は、人々のレジャーやその利用、そしてその場所性を規定する大きな要因となりうる。吉林油田や、ここでは触れていないが前郭県内に立地する公園・広場はその社会的・経済的側面も含めた地域性から考察する必要がある。

謝辞

本稿のフィールドワークにおいては、東北師範大学の先生方、特に劉威傑先生にお世話になりました。記して感謝いたします。

注

- 1) 張景安・馬恵娣『中国公衆休閒状況調査』中国経済出版社、2004、4頁。
- 2) 松原市ホームページ, <http://www.jlsy.gov.cn/mlsy/> (2014年7月21日閲覧。) なお、3県は前郭爾羅斯蒙古族自治州、長嶺県、乾安県であり、1市は扶余市、1区は寧江区である。その他にも、1つの国家級開發区(經濟技術開發区)、4つの省級開發区(農業高新技術開發区、查干湖旅遊經濟開發区、石油化学工業循環經濟園區、前郭經濟開發区)などの開發区を管轄している。
- 3) 報告者は調査中に、地元のタクシー運転手に寧江区と前郭爾羅斯蒙古族自治県の居住者にどのような相違点があるのか尋ねた。運転手は実際に両行政区の境界域に居住しており、看板やファサードにモンゴル語が記載されている以外は、日常生活や習慣などはまったく一緒であると回答していた。
- 4) 江北地域から江南地域、あるいはその逆の移動については、タクシーまたはバスが主な移動手段である。
- 5) 阿汝汗『松原文化述略』時代文芸出版社、2009、458-465頁。
- 6) 前掲注5) 同頁。
- 7) 地区としては經濟開發区に属すると考えられる。
- 8) 前掲注5) 同頁。
- 9) 前掲注5) 320-321頁。
- 10) 本文中の写真4の絵図に記載されている。
- 11) 前掲注5) 同頁。
- 12) 『岩波現代中国辞典』によると、「陝西、甘肅など西北部農村に伝えられた農民の歌舞。杜歌、田楽ともいう。抗日戦争中、中国共産党は延安で文芸整風の一環として秧歌を發展、普及させた。内容も革命的、軍事的なものとなった。通常は赤い襷をかけ、太鼓などに合わせて歌いながら行列を作って踊る。建国後も祝賀行事などで行われていたが、1990年以降は健康法として都市市民の間でも同好会が組織されている。」とあり、政治的、文化的な側面を含んだレジャーといえる。(天兒慧・石原享一・朱建榮・辻康吾・菱田雅晴・村田雄二郎編『岩波現代中国辞典』岩波書店、1999、1225頁。)
- 13) 前掲注5) 同頁。
- 14) 松原市地方志編纂委員会『松原市志』吉林省人民出版社、2006、357-376頁。
- 15) 寧江区地方志編纂委員会『松原市寧江区志(1995~2003)』吉林大学出版社、207-216頁。
- 16) 石田曜「長春市南湖公園におけるレジャー空間の特性」(小島泰雄編『中国東北における地域構造変化の地理学的研究—長春調査報告—』京都大学人間・環境学研究科地域空間論分野、2013) 16-24頁。
- 17) インフォーマントの語りについて、その翻訳は全て筆者が行った。

吉林省松原市中心部における小学校通学区域の変化と学校間格差

柴田陽一（京都大学人文科学研究所・産官学連携研究員）

1. はじめに

本稿は、農村部を扱った前稿¹⁾とは異なり、都市部における小学校の位置の変化に注目し、中国における教育サービス供給の地域的差異について検討するものである。さらに、都市部の小学校に顕著にみられる学校間格差とそれに伴う越境通学（「択校」）の問題についても若干の検討を加えることにしたい。

中国の義務教育（小学校6年と初級中学3年）は、地区（直轄市・省・自治区）間・都市－農村部間・学校間における教育格差や、農村部における学校統廃合（分布調整）をはじめとして、多くの問題を抱えている²⁾。1986年の「中華人民共和国義務教育法」³⁾の制定後、中国政府は義務教育の普及を急ピッチで進めてきた。その結果、2010年の小学校入学率は99.7%、初級中学への進学率は98.7%に達している⁴⁾。しかし、義務教育完成率をみると、上海や北京などの高い地区と、チベットや貴州などの低い地区との差がかなり大きい⁵⁾。また、義務教育の中退率も都市部と農村部で大きな違いがみられる⁶⁾。そのため、教育の機会均等（公平性）はまだ保証されたとはいえない状況にある。

こうしたなか前稿では、中国の義務教育が抱えるさまざまな問題のうち、特に農村部で進行している学校統廃合（分布調整）の問題を扱った。『中国教育統計年鑑』⁷⁾によると、1990～2010年間における農村部の小学校減少率は都市部38.3%の約2倍の67.4%であり、同期間における農村部の児童減少率25.5%を大きく上回るものであった。中国政府は1980年代半ばより農村部における小学校統廃合に着手したが、とりわけ2001年以降の急激な分布調整政策は「徹点併校」と呼ばれている。この政策は、教育の質向上、教育の機会均等（公平性）、教育の地域間・学校間格差の是正を目指して実施されたはずであった。ところが、結果として、大規模校への児童の集中による施設利用・教員配分・事務管理上の問題、通学距離の増大に伴う通学時間・費用の負担や安全面での問題、通学できない児童のための寄宿舎に関する諸問題などを引き起こしたのである⁸⁾。そこで前稿では、長春近郊農村を事例として、小学校の位置の変化に注目することにより、農村部における通学区域（通学圏）の変化の一端を明らかにした。

それに対し、本稿では、都市部の小学校の位置の変化に注目し、都市部における通学区域はどのように変化したのか、通学距離は適正な範囲に保たれているのか、といった教育サービス供給の具体的な問題を検討する。さらに、都市部に顕著にみられる学校間格差にも注目し、実際に学校間でどのような違いがあり、それがどのような点に現れているのかという問題についても検討することにした。

このように、本稿が都市部に注目する理由は、次のとおりである。すなわち、『中国教育統計年鑑』⁹⁾

1) 柴田陽一「中国を対象とする教育地理学的研究に向けて—長春近郊農村調査を起点として—」（小島泰雄編『中国東北における地域構造変化の地理学的研究—長春調査報告—』京都大学人間・環境学研究科地域空間論分野、2013）56-67頁。

2) (1)新保敦子「教育による不平等の形成—改革開放期の中国西北部農村をめぐって—」中国25、2010、18-36頁。(2)園田茂人・新保敦子『教育は不平等を克服できるか（叢書中国の問題群8）』岩波書店、2010。

3) 石川啓二「中国の新しい義務教育法 全文」季刊教育法67、1987、144-146頁。

4) 中華人民共和国教育部発展規劃司編『中国教育統計年鑑 2010』人民教育出版社、15頁。

5) 仲田陽一「中国農村教育改革と教育格差問題—「改革開放」後の農村義務教育財政制度改革に即して—」熊本大学教育実践研究27、2010、46-47頁。

6) 南亮進・牧野文夫・羅欽鎮『中国の教育と経済発展』東洋経済新報社、2008、116-119頁。

7) (1)中華人民共和国国家教育委員会計劃建設司編『中国教育統計年鑑 1990』人民教育出版社、1991、236-253頁。(2)前掲注4、518-533頁。

8) 蘇于君「中国における農村教育の発展とその課題」鶴山論叢11、2011、13-15頁。

9) (1)前掲注4、518-533頁。(2)前掲注7(1)、236-253頁。

によると、1990～2010 年間ににおける都市部の小学校減少率は 38.3%にとどまるものの、実は同期間に都市部の児童数が 1.36 倍に増加している。そのため、都市部における 1 校当たりの児童数は、504.8 人から 1110.1 人へと 2.2 倍に増加した。農村部でも 147.4 人から 336.9 人へと 2.3 倍に増加したものの、都市部における 1 校当たりの児童数は農村部の 3.3 倍にもなる。参考までに 2010 年の日本における 1 校当たりの児童数を示すと、全国平均で 317.9 人である。都道府県別にみると、神奈川県が 545.4 人と最も多く、高知県が 143.9 人と最も少ない¹⁰⁾。ここからも、中国の都市部における 1 校当たりの児童数が際立って多いことが分かるだろう。要するに、中国の都市部における小学校では、児童数の増加と学校数の減少によって 1 校に児童が過剰に集中し、さまざまな問題が生じていることが予想されるのである。このことが、本稿が都市部に注目する理由である。

2. フィールド調査における制約と教育班の調査内容

本稿の事例地は、吉林省北西部に位置する松原市である。2013 年 8 月 15 日から 28 日までの全調査期間のうち、筆者らが松原市に滞在したのは、17 日午後から 26 日早朝までの実質 9 日間のみであった。しかも、外国人が訪れることの少ない町であるためか、松原市规划局では都市計画などに関する説明を受け、質問をする機会が与えられたものの、松原市教育局と前郭爾羅斯蒙古族自治県教育局への訪問は許可を得ることができなかった。加えて、松原市図書館は移転オープンしたばかりで郷土資料（地方志・文史資料・統計など）の一部しか閲覧できず、前郭爾羅斯蒙古族自治県図書館での資料閲覧は途中からなぜか全面禁止となった。ただし、現地の図書館で十分に閲覧できなかった郷土資料は、中国科学院東北地理与農業生態研究所の張柏氏をリーダーとする中国人調査パートナーに協力により、インターネットを通じて各地の古書店から取り寄せ、日本へ郵送してもらうことができた。そのため、資料的制約は後に少しは改善されることになった。

とはいえ、松原市におけるフィールド調査はやはり制約の多いものだったといわざるを得ないが、筆者個人としては、2012 年 8 月の長春での調査と大きく異なる点がある。それは、長春での調査が小島泰雄班長の率いる農村班に同行する形で行ったのに対し、松原での調査は筆者が教育班の班長となり、自らが設定した目的に沿って調査を進めることができたことである。とほいうものの、教育班の構成員は齊齊哈爾大学の王治良氏と筆者の二人のみであり、状況に応じて民族班（班長は高橋健太郎氏）と活動をともしることもあった。8 月 21 日と 22 日に松原市教育局と前郭爾羅斯蒙古族自治県教育局への訪問を試みたことや、22 日の蒙古族中学、蒙古族実験小学、蒙古族幼稚園への訪問が、それに該当する。

では、教育班が単独で行った調査内容はどのようなものだったのか。それは次の 4 点にまとめられる。第一に、2013 年 8 月現在の松原市中心部における小学校の位置と数を、1 校ずつ訪問して確認することである。なぜなら、現地で入手した複数の市街地図¹¹⁾の間にも、インターネット（百度・Google の地図、各教育局のホームページ）から得られた情報の間にも、小学校の名称・位置・数について相違がみられたためである。そこで、小学校の名称・位置・数を確定することが、班としては何よりも重要であった。

第二に、訪問した小学校の関係者（校長、一般教員、用務員）と周辺住民に対して、小学校の規模（児童数、教員数、学級数）、レベルの高低、通学区域、位置や名称の変化、スクールバスの有無などについて聞き取りを行うことである。こうした情報を各教育局および各学校のホームページから入手することも可能である。ただし、古い情報であったり、部分的な情報であったりすることが一般的である。また、地方志など郷土資料から得られる情報も、筆者らが必要とする年次の情報が得られるわけではないという難点がある。そのため、なるべく現地でこうした情報を得るように努めたが、結局のところ、小学校の規模については多くをホームページに頼らざるを得なかった。

第三に、小学校とその周辺地域の景観観察をすることである。具体的には、小学校の校舎はどのよう

10) 総務省統計研修所編『日本の統計 2012』日本統計協会、2012。

(<http://www.stat.go.jp/data/nihon/back12/index.htm>)

11) (1) 吉林省基礎地理信息中心編『新版 松原（吉林省城市地図系列）』哈爾濱地図出版社、2011。(2) 西安地図出版社編『松原市城区図』同左、2012。

なつくりなのか、運動場は整備されているのか、周辺地域にはどのような業種の店舗がどれくらい並んでいるのか、といったことを観察するのである。こうした観察は、学校間格差の問題を考える上で重要となる。

以上3点が現地で行ったフィールド調査の内容である。それに対し、4点目は帰国後に行った文献調査である。中国人調査パートナーが送ってくれた郷土資料（地方志や文史資料など）や、日本の図書館に所蔵されている統計資料を用いた。文献調査の目的は、フィールド調査で得られたデータを補完したり、違う角度から眺めたりすることにある。

3. 事例地松原市の概要

本章では、事例地である松原市の基本的なデータを確認しておきたい。地級市である松原市は、吉林省西北部に位置し、東は吉林省長春市、南は吉林省長春市・四平市、西は内モンゴル自治区通遼市と吉林省白城市、北は黒龍江省ハ爾濱市・大慶市と境を接する。2010年の人口は290.05万人、面積は20159平方km（京都府の約4.4倍）であり、5つの行政区を管轄している（第1図）。

市の中央部に位置する寧江区（市轄区）の人口は58.79万人（2010年時点、以下同様）、面積は1576平方kmである。その東に位置する扶余市（県級市、旧扶余県）の人口は76.94万人、面積は4189平方kmである。中央部から西に広がる前郭爾羅斯蒙古族自治県（以下、前郭県と記す）の人口は59.34万人¹²⁾、面積は5085平方kmである。その西に位置する乾安県の人口は31.01万人、面積は3522平方km、南西に位置する長嶺県の人口は63.97万人、面積は5787平方kmである。



第1図 松原市の行政区画と市中心部（調査地）

『吉林地図冊（中国分省系列地図冊）』星球地圖出版社、2013年、38-39頁をもとに筆者作成。

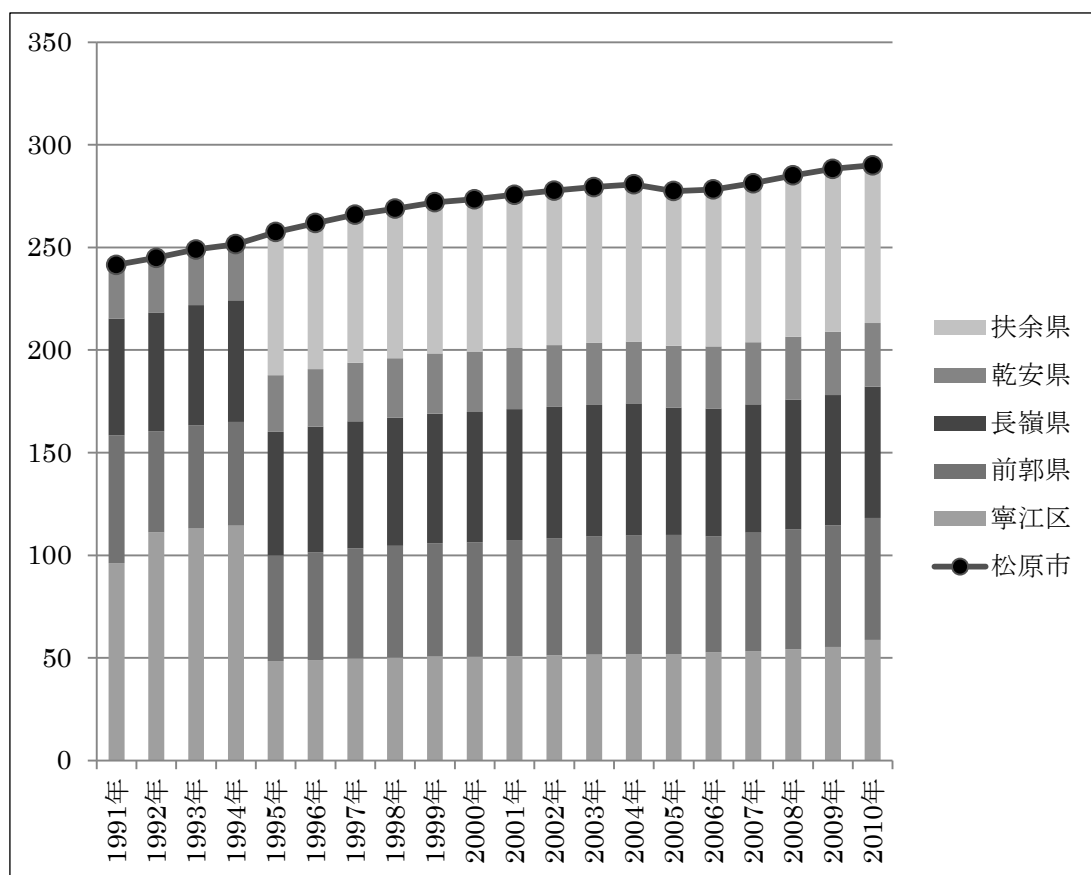
松原市は松嫩平原の南部に位置し、松花江が南東部から中央部を貫くように北流し、北部で嫩江と合流した後は東へ向きを変えている。いうまでもなく、松花江は吉林市・ハ爾濱市・佳木斯市などを通っ

12) 統計によると、前郭県の総人口の約10%を少数民族（モンゴル族ほか）が占めている。この割合は1995年～2005年の間ほとんど変わっていない。吉林省統計局編『吉林省統計年鑑』中国統計出版社、1996-2006。

て黒龍江（アムール川）へと合流する一大河川である。それゆえ、松原市中心部の扶余の県城（旧名新城、現在の寧江区）は松花江水運の拠点として栄えていた。

その扶余を中心として松原市が誕生したのは、1992年6月である。それまで白城地区の一部であった扶余市（現在の寧江区と扶余市を合わせたもの）・長嶺県・乾安県・前郭県が合併され、地級市へと昇格したのである。当時の松原市は人口 244.99 万人であり、扶余区（旧扶余市、現在の寧江区と扶余市を合わせたもの）と長嶺県・乾安県・前郭県を管轄していた。松原市誕生とともに市中心部に位置する前郭県の大半（後述する江南地区）が扶余区に編入されたため、同県の人口が大幅に減少したことが注目される。その後、1995年7月に扶余区の東部が分立して扶余県（現在の扶余市）が誕生した。それに伴い、扶余区は寧江区に改称された。2013年1月には扶余県が市制を施行し、扶余市となった。新旧の扶余市、扶余区、扶余県の区別がややこしいのだが、主な行政区画の変遷は以上のとおりである。

第2図に示した人口の変遷をみると、松原市が誕生した1992年に244.99万人であったのが、2005年を除いて増加を続け、2010年には290.05万人に達した。増加率は約1.2倍であり、同期間における長春市のそれとほとんど同じである。このように、人口の変遷からみても、松原市は国有企業の吉林油田を中心として発展しつつある都市とみることができよう。なお、行政区間の人口のバランスは、1992年は扶余区45.4%、前郭県20.1%、長嶺県23.6%、乾安県10.9%であったが、1995年に旧扶余区が寧江区と扶余県に分かれた後は、寧江区18.8%、前郭県20%、長嶺県23.3%、乾安県10.7%、扶余県27.1%となった。このバランスは2010年でもほとんど変わっていない（順に20.2、20.4、22、10.7、26.5%）。



第2図 松原市の人口（1991～2010年） 単位：万人

資料：吉林省統計局編『吉林省統計年鑑』中国統計出版社、1992-2011。

こうした特徴を持つ松原市のなかで、都市部の小学校に注目する本稿の調査地は、いうまでもなく市中心部（第1図の点線で囲んだ範囲）である。中心部は松花江を挟んだ南北2つの地区から形成されている。江北地区（北部）は、松花江の水運で栄えた扶余の県城があったところで、かつては旧扶余市の

中心であった。松原市誕生後は扶余区を経て、現在は寧江区に属している。一方、江南地区（南部）は、松原市誕生前はすべて前郭県に属していたが、誕生後は都市部の大半が寧江区に編入された。そのため、現在は寧江区と前郭県に属している。

また、市中心部では、1992 年以後、江北・江南地区ともに都市化の進展が著しい。都市建設用地の拡大を示した第 3 図をみると、1992 年以前には市街地とは独立した集落であった郊外村のすぐそば、もしくはそのなかに新しい直線道路が整備されている様子を確認することができる。こうした行政区画の変化および都市化の進展が、小学校通学区域にも影響を与えていると予想される。

4. 松原市中心部における小学校通学区域の変化と学校間格差

本章では、教育班の調査結果を示していきたい。第一に、2013 年 8 月現在の松原市中心部には、計 27 校の小学校が存在していることが確認できた¹³⁾。その名称と数は第 1 表（①～⑨、⑪～⑬、⑮～⑲、⑳～㉔、㉖～㉚）、位置は第 3 図のとおりである。1 校ずつ訪問してみても痛感したのは、小学校の名称・位置・数はやはり現地で確認しなければならないということである。市街地図やインターネット地図に示されていても実際には存在しなかったり、名称が変わっていたりする例がいくつもみられた。

第 1 表 松原市中心部の小学校一覧

No.	1990 年校名	2013 年校名	創立年	教職員数	学級数	児童数	1 学級当たりの児童数	備考
①	○市新城	○区新城郷中心	1976	51	6	156	26	バス 4 台を所有 2003 年当時、10 の村小を管轄
②	●吉林油田測井		1978 ?	63	18	728	40.4	
③	●吉林油田実験		1973	105	36	2000 多	約 55～65	
④	○市長寧	○区长寧	1986	84	14	不明	不明	
⑤	○市両家子	○区両家子	不明	不明	不明	不明	不明	
⑥	○市松江	○区第二実験	1946	不明	不明	不明	不明	バスを所有
⑦	○市回族	○区回族	1908	126	27	2472	91.6	
⑧	○市民主	○区民主	1911	144	20	965	48.3	
⑨	○市実験	○区実験	1906	180	44	3866	87.9	
⑩	○市晨光	統合？廃止？	1911					
⑪	○市建設	○区建設	1947	165	33	3280	99.4	
⑫	○市臨江	○区臨江	1984	63	14	558	39.9	
⑬	㉔から移転	○松原経済開発区中心	1959	169	不明	不明	不明	バス 2 台を所有 2008 頃移転
⑭	□県卡倫房子	⑬に統合	不明					
⑮	●吉林油田松江		不明	97	36	2886	80.2	
⑯		○市逸夫	1995	83	24	1615	67.3	
⑰	●吉林油田鑽井		不明	92	31	2216	71.5	
⑱	□県第六	○区第六	1981	78	不明	447	不明	
⑲	●吉林油田供応		不明	90	不明	不明	不明	
⑳	□興原郷中心／鎮郊郷中心／県第四	⑬へ移転	1959					1989 年当時、11 の村小を管轄
㉑	□県賀爾其勒	㉔に統合	不明					

13) 地方志によると、創新小学校という私立小学校が 1999 年に江北地区に開校した。所在地は寧江区江北東大街閥門廠（バルブ工場）内であり、2003 年時点で教員数 30、学級数 8、児童数 177 であるという。ただ、私立小学校であることと、調査時に存在を認知していなかったため本稿の検討からは除外する。寧江区地方志編纂委員会編『松原市寧江区志 1995～2003（吉林省地方志叢書 55）』吉林大学出版社、2008、445-446 頁。

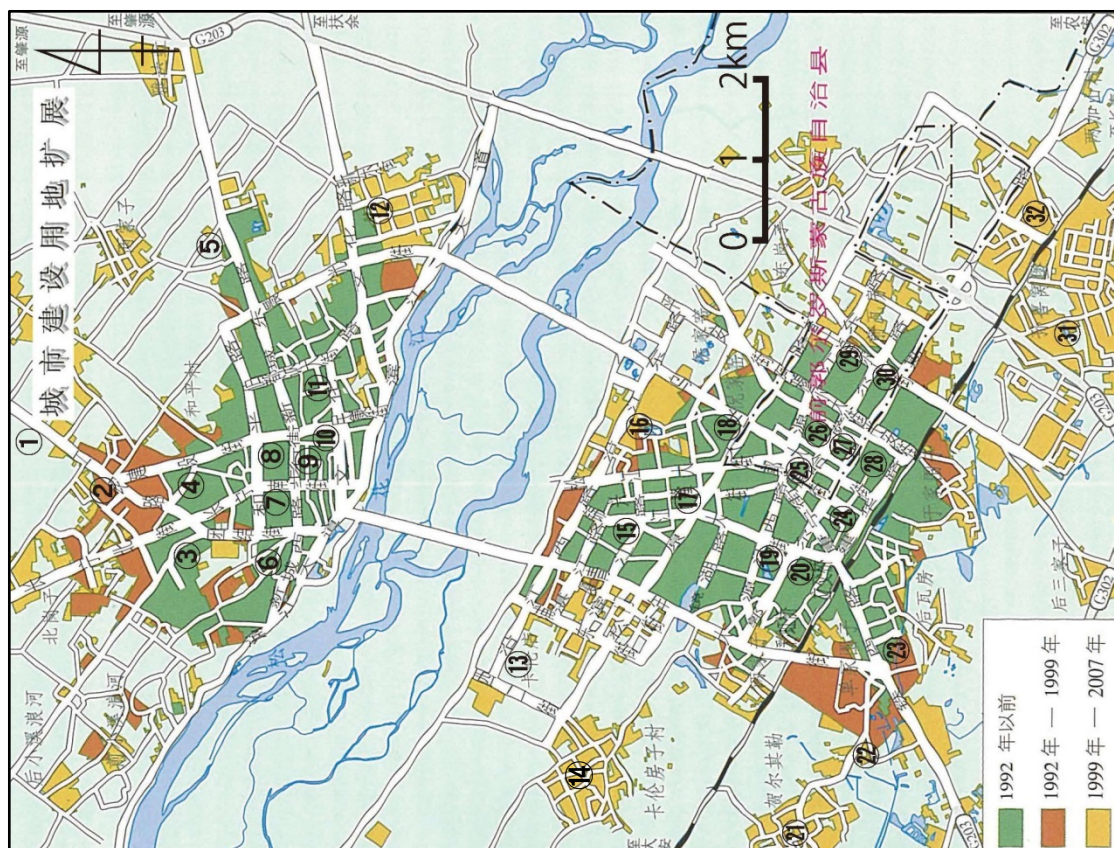
②	□県単家	○区単家	1983 頃	不明	6	約 100	約 16.7	三度場所を移転 ②を統合 ⑬の分校
③	●吉林油田運輸		1976	53	17	921	54.2	
④	□県第七	○区第七	1957	65	11	不明	不明	
⑤	□県実験／ 第二	②⑨に移転	1949					
⑥	□県蒙古族実験		1987	82	15	947	63.1	一部の学級はす べてモンゴル語 で教育を実施
⑦	□県第五	□県哈薩爾路	1960	136	36	2900	80.6	2005 年に改称
⑧	□県第一	○区第一	1935	90	不明	1158	不明	
⑨	⑤から移転	□県実験	1949	109	29	2510	86.6	2003 (05) 年移転 バスを所有
⑩	□県第三	□県前郭鎮中 心	1956	140	25	1416	56.6	バスを所有、鮮 豊朝鮮族学校を 併合
⑪	□県孫喜	○区孫喜	1950 年代	15	7	約 140	約 20	⑬の分校
⑫	●（吉林油田）前郭煉油廠		1971	64	15	715	44.7	

注：No. は第 3 図と対応している。また、校名欄の「市」（○）は扶余市（1990 年）と松原市（2013 年）、「区」（○）は寧江区、「県」（□）は前郭県、「吉林油田」（●）は吉林油田が、それぞれ学校の管理主体であることを指す。記号は第 4・5・6 図と対応している。

資料：校名と創立年については、松原教育情報ホームページと各校ホームページに加えて、次の資料を参照した。(1) 前郭爾羅斯蒙古族自治県地名委員会編『前郭爾羅斯蒙古族自治県地名志』内部資料、1989、651-654 頁。(2) 中国人民政治協商會議吉林省前郭爾羅斯蒙古族自治県委員会文史資料委員会編『駿馬奔馳 前郭文史資料第 9 輯 前郭爾羅斯蒙古族自治県成立 35 周年專輯』内部資料、1991、235-262 頁。(3) 前郭爾羅斯蒙古族自治県地方志編纂委員会編『前郭爾羅斯蒙古族自治県志』遼寧民族出版社、1993、821-833、844-846 頁。(4) 松原市扶余区史志工作委員会編『扶余県志』吉林人民出版社、1993、635-640 頁。(5) 中国人民政治協商會議吉林省前郭爾羅斯蒙古族自治県委員会文史資料委員会編『郭爾羅斯文史第 18 輯 城区校史專輯』内部資料、2000、17-111 頁。(6) 松原市地方志編纂委員会編『松原市志（吉林省地方志叢書 54）』吉林人民出版社、2006、797-802 頁。(7) 寧江区地方志編纂委員会編『松原市寧江区志 1995～2003（吉林省地方志叢書 55）』吉林大学出版社、2008、442-447 頁。教職員数・学級数・児童数については、結局のところ、聞き取りからは漠然とした数字しか得られず、上記のホームページを参照した。ただし、掲載されていても 2008 年時点のデータにすぎない。そのなかで③と⑫のデータは、調査時にそれぞれ校門脇掲示板と校内掲示板から得た 2013 年時点のものである。

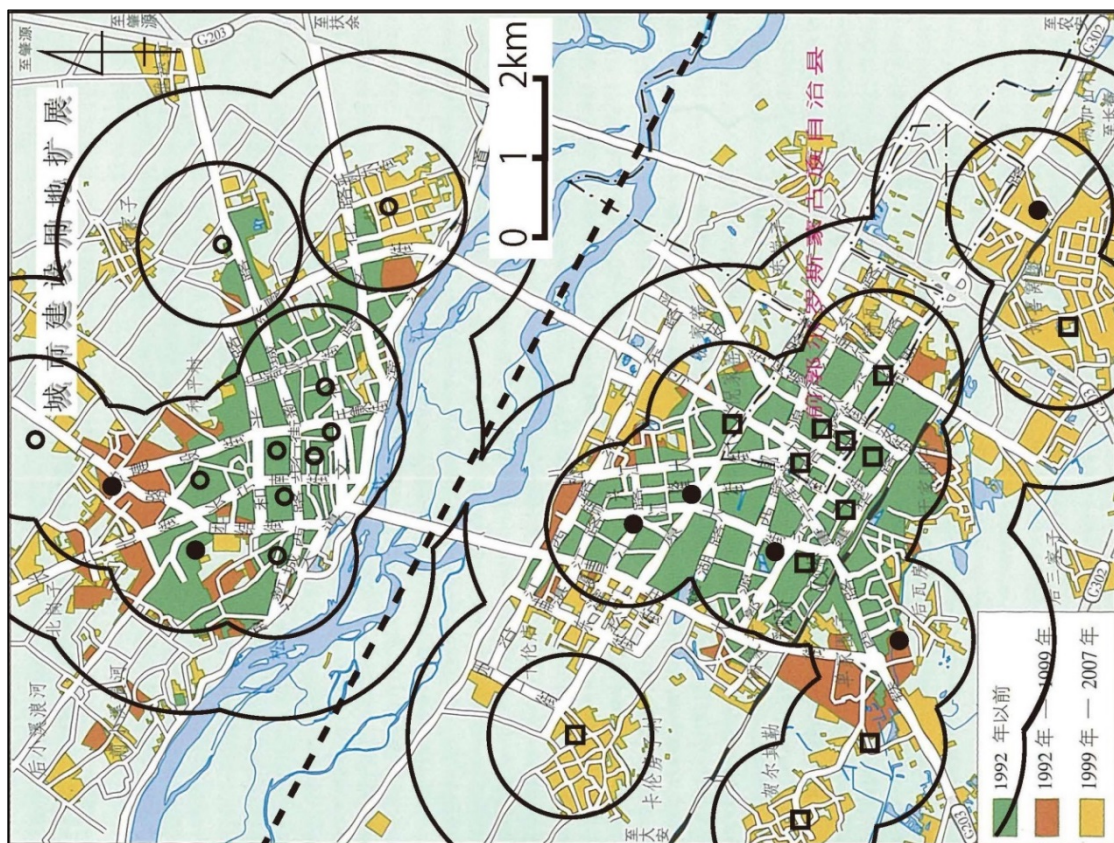
第二に、27 校の小学校は松原市教育局、寧江区教育局、前郭県教育局、油区教育処という 4 つの管理主体の下に置かれていることが判明した。松原市教育局が管理するのは、1995 年に江南地区に新設された逸夫小学（⑩）のみである。同校ホームページによると、学歴が高く優秀な教員によってレベルの高い教育が行われているようだ。児童数は 1615 人、1 学級当たりの児童数は 67.3 人と多い。

寧江区教育局が管理するのは 15 校である。江北地区に 9 校（①④⑤⑥⑦⑧⑨⑪⑫）、江南地区に 6 校（⑬⑭⑮⑯⑰⑱）ある。周辺住民の話によると、江北地区で最もレベルが高いのは区実験小学（⑨、写真 1）、二番目は区回族小学（⑦）だという。両校とも 20 世紀初めに設立された伝統校である。児童数は順に 3866 人、2472 人ときわめて多く、1 学級当たりの児童数も順に 87.9 人、91.6 人と一般的な学級の規模を大きく凌駕している。同様に、区建設小学も児童数 3280 人、1 学級当たりの児童数 99.4 人である。このようなレベルの高い学校の周辺には、美術・音楽・英語・パソコンなどの塾が所狭しと立ち並んでいる（写真 2）。そのため、学校周辺を観察すれば、おおそ学校のレベルは推し量れるのである。なお、⑦はもともと回族（中国ムスリム）の子どもが通う学校であったが、現在は名称をとどめるだけ



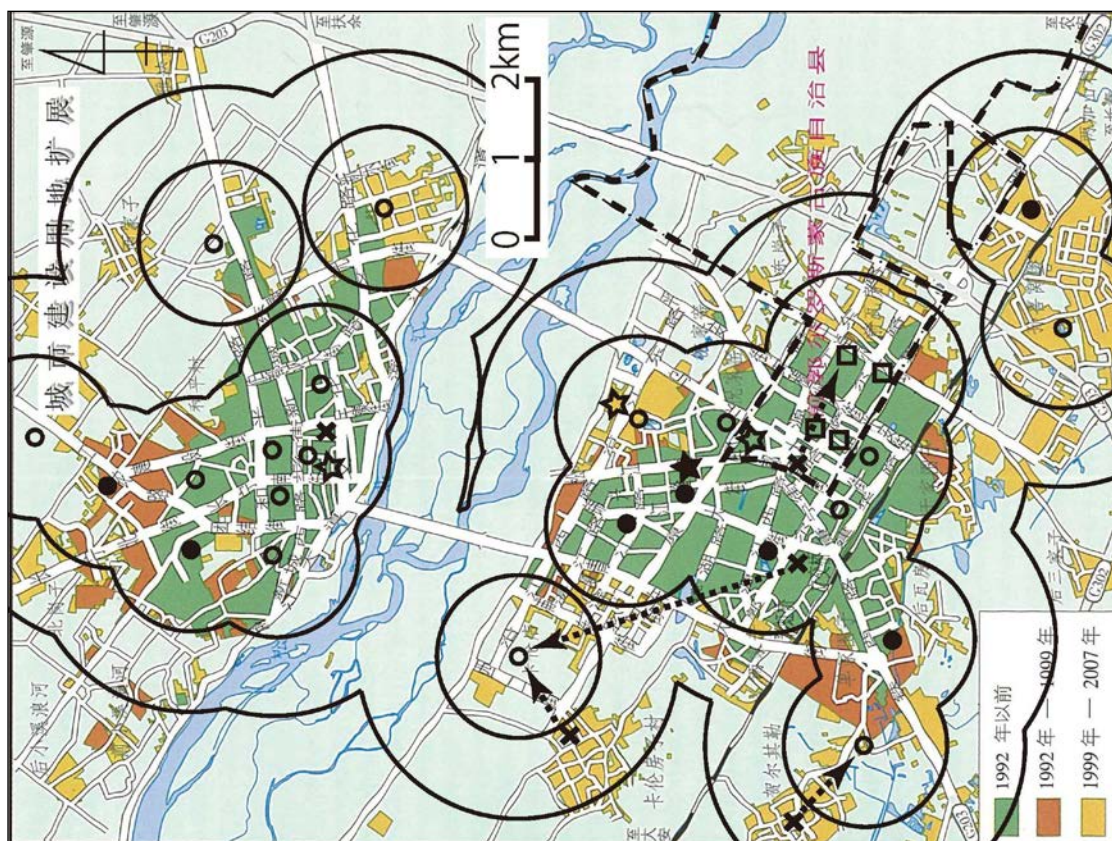
第3図 都市建設用地の拡大と小中学校の位置

吉林省地図図集編纂委員会編『吉林省地図図集』中国地図出版社、2009、248頁を元に筆者作成。



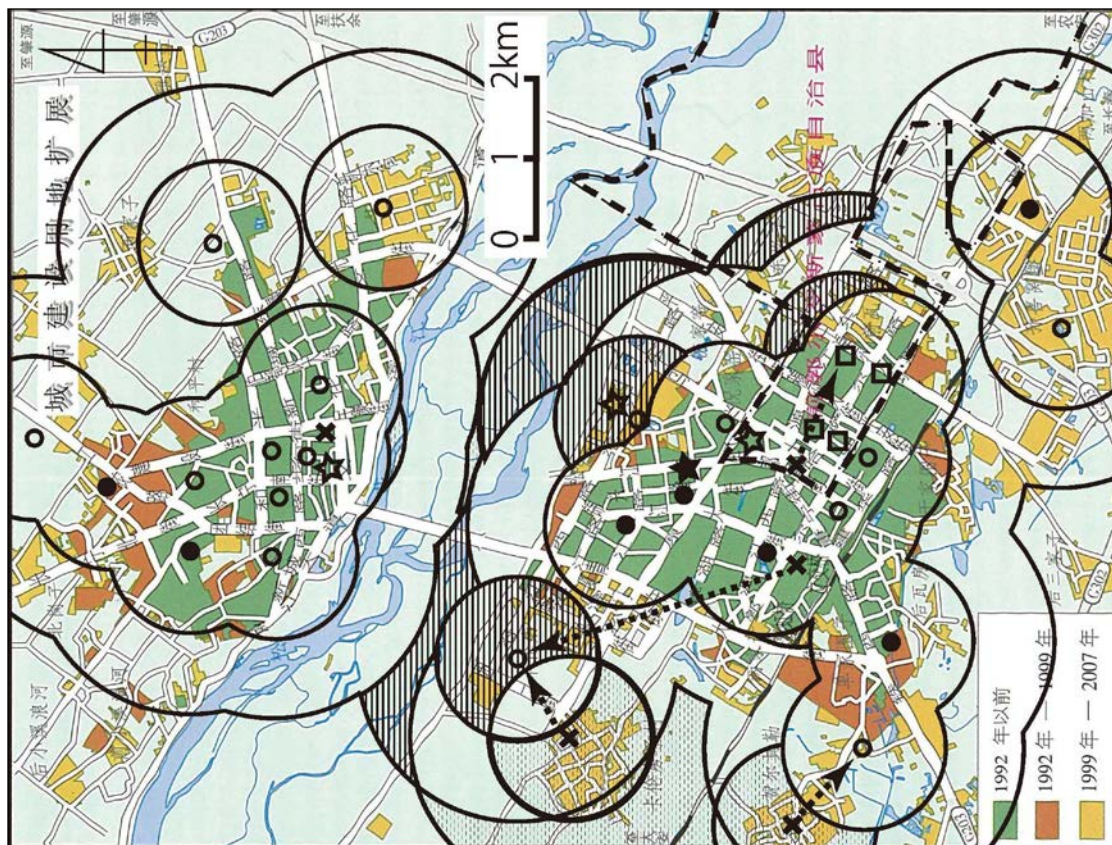
第4図 1990年の1km・2km圏

第3図と同じ資料を元に筆者作成。○は扶余市、●は吉林油田、□は前郭県が管理する学校。点線は市と県の行政界。



第5図 2013年の1km・2km圏

第3図と同じ資料を元に筆者作成。○は松原市・寧江区、●は吉林油田、□は前郭県が管理する学校。☆は市・区・県の教育局、★は油区教育処。点線は区と県の行政界。



第6図 1990年～2013年に拡大・縮小したエリア

第3図と同じ資料を元に筆者作成。濃い横線は拡大したエリア、薄い横線は縮小したエリアを指す。

一方、郊外村に位置する区単家小学（㉔、写真 3）と区孫喜小学（㉕、写真 4）は、児童数 100 人余り、学級数 6～7、1 学級当たり 16～20 人ときわめて小規模である。両校とも校舎はきわめて質素なつくりで、運動場には草が生え放題であった。この点は、両校の本校に当たる松原経済開発区中心校（㉖、写真 5）が真新しく立派な校舎を有していたのと非常に対称的であった。㉔の校長先生の話によると、たとえ学校付近に居住していても、送迎手段（自動車やバイクなど）を有する親たちは子どもをより中心部の学校に通学させるのだという。そのため、「この学校の児童数は減るばかりだ」、と不満を漏らしていた。

前郭県教育局が管理するのは4校(26・27・29・30)である。一部の学級ではすべての教育をモンゴル語で行っている県蒙古族実験小学(26)は、自治県ならではのユニークな教育機関である。卒業後、県蒙古族中学(日本の中学校・高校に相当)に進めば、高校卒業まですべての教育をモンゴル語で受けることも可能である。ただし、同小学校においてもモンゴル族の児童はあくまで一部にすぎず、大半は漢族の児童で占められている。一般の学習内容に加えて、モンゴル語・モンゴル文化についても勉強できるというのが、この学校の実態のようである。周辺住民の話によると、レベルが高いのは県実験小学(29)と県哈薩爾路小学(27)あるという。両校はいずれも児童数が2000人を超え、1学級の規模も約80人とかなり大きい。県実験小学(29)と前郭鎮中心小学(30)はスクールバスを所有している(写真7)。29は第3図の縮尺を示したあたりの郊外エリアを通学区域に含むものと考えられる。一方、30は学校のそばを通る郭爾羅斯大路(国道302号線)で結ばれている、第3図の右下枠外(南東部)の郊外エリアを通学区域としている。現在、同校内に併設されている鮮豊朝鮮族学校が、もともと郭爾羅斯大路を6km余り南東へ進んだ鮮豊村に存在していたものであることも、その証拠となるであろう。

第三に、郷土資料や聞き取りで得られた情報を総合すると、松原市誕生前の 1990 年の同範囲には、少なくとも計 29 校の小学校が存在していたと推定できる。その名称と数は第 1 表、位置は第 3 図のとおりである。管理主体別にみると、当時は江北地区のみを行政区としていた扶余市が 10 校（①④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫）、江南地区全体を行政区としていた前郭県が 12 校（⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿）、吉林油田が 7 校（㉡㉢㉣㉤㉥㉦㉧）である。吉林油田の学校は 2013 年と全く同じであるが、松原市誕生とともに行政区画が変更された扶余市（後の寧江区）と前郭県の管理する学校数に大きな違いがみられる。ただし、全体の学校数は、1990 年の 29 校から 2013 年の 27 校へ 2 校減少したのみである。なぜなら、1990 年に存在した 29 校のうち 3 校（㉩㉪㉫、写真 10）が統廃合されて消滅したもの、1995 年に 1 校（㉬）が新設されたためである。また、1990 年と 2013 年の間に移転した学校が江南地区に 2 校ある（㉭→㉮、㉯→㉰）。

55

した「学区地図」があるというのだが、それを入手することはできなかった。そこで、ここまで述べてきた小学校の位置と数の変化から、この問題にアプローチしてみたい。

第4図は1990年の各小学校から1km圏・2km圏を示したものである。第5図は2013年の各小学校から1km圏・2km圏を示したものである。そして、第6図は1990年から2013年の間に拡大・縮小したエリアを示したものである。小学生の歩くスピードを時速3～4kmと想定すると、通学距離が1kmなら15～20分、2kmなら30～40分かかる。そこで、日本では小学校の通学距離は4km以内、およそ1時間以内と定められている。こうしたことを参考にして、1km圏・2km圏を図示することにした。

これらの図から読み取れるのは、(1)1990年・2013年ともに図の右中央、右上、左上、下中央のエリアが2km圏に含まれていないこと、(2)2013年では図の左中央のエリアが2km圏から外れるようになったこと、(3)図中央の松花江岸のエリアと右中央のエリアで新たに2km圏に含まれるようになったところがみられることである。(2)は郊外村にあった小学校(⑭⑰)が統廃合されたこと、(3)は⑳が㉑に、㉕が㉑に移転したことで㉑が新設されたことが理由である。要するに、一部該当しないエリアがあるとはいえ、松原市中心部の大部分はおよそ2km圏内に含まれている。

また、松原市中心部に限ったデータではないが、松原市全体および各行政区における小学校の平均通学距離(半径)を算出した第2表をみると、寧江区の平均通学距離は各行政区のなかで最も短く、2km余りに抑えられていることが分かる。一方、前郭県は近年3km余りとやや長い距離になっている。全体としては、1998年から2010年の間に平均通学距離が次第に長くなっていることが気にかかるが、それでも2010年の市全体の平均通学距離は約3kmほどである。ただ、この数値はあくまで行政区全体の面積で計算したものであり、人が居住していないエリア(アネクメーネ)を含んでいることに注意する必要があるだろう。

第2表 松原市全体および各行政区における小学校の平均通学距離(半径) 単位: km

	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
松原市	2.29	2.30	2.32	2.34	2.48	2.57	2.61	2.65	2.74	2.83	2.90	2.95	2.97
寧江区	2.62	2.60	2.40	2.40	2.40	2.39	2.17	2.18	2.19	2.29	2.47	2.36	2.36
前郭県	2.35	2.35	2.42	2.47	2.58	2.65	2.84	2.88	3.10	3.25	3.21	3.35	3.38
長嶺県	2.61	2.62	2.65	2.61	2.65	2.72	2.72	2.75	2.77	2.79	2.81	2.81	2.80
乾安県	2.44	2.45	2.48	2.59	3.65	4.09	4.09	4.19	4.25	4.36	4.29	4.25	4.29
扶余県	1.84	1.84	1.86	1.88	1.91	2.00	2.05	2.10	2.19	2.29	2.41	2.54	2.58

注: 行政区の面積を学校数で割って1校がカバーする面積を求め、そこから各校の平均通学距離(半径)を算出したものである。前年に比べて距離が減少した場合は欄を灰色にした。

資料: 吉林省統計局編『吉林省統計年鑑』中国統計出版社、1999-2011。

以上のように、松原市中心部の小学校は、大半のエリアが2km圏内に含まれていること、また、上述したように市街地と郊外の境に位置し、通学区域が広がっていると想定される学校(①⑥⑬⑲⑳)がスクールバスを所有していることから、児童の通学距離を考慮した概ね適切な配置がなされていると判断できよう。

ただし、行政区よりせまい各エリアにどれだけの人口が居住しているかというデータは、筆者が閲覧した統計資料からは得ることができなかった。そのため、通学距離としては概ね適切でも、各エリアの人口規模に即した小学校の配置がなされているかは、また別の問題である。そこで、各校の児童数に大きな差があることを示す第1表に立ち返ってみよう。児童数2000人を超える8校(③⑦⑨⑪⑮⑰⑲⑳)は、いずれも市中心部のなかでも人口密度が高いと考えられるエリアに位置している(第3図)。しかしながら、これらの学校とそれ以外の学校の児童数の差は、はたしてエリアごとの人口密度によってのみ説明できるものなのだろうか。

筆者はそうではないと考えている。現在の中国では、小学校ごとに通学区域の定めがあり、「就近入学」が建前となつてはいる。これはかつて実施していた重点学校制度を廃止し、教育の機会均等（公平性）を打ち出した以上、当然のことである。しかし、よほどの事情がないと認められない日本と違って、中国では越境通学（「択校」）が頻繁に行われている。そこで、すでに紹介した郊外村の校長の話からも分かるように、市中心部のよりレベルの高い学校に児童が殺到し、一部の学校のみ児童数が 2000 人を超えるという事態を引き起こしているのである。この点に、都市部における学校間格差が顕著に現れているといえよう。

5. むすびにかえて

本稿では、松原市中心部における小学校の位置と数の変化に注目し、都市部の小学校通学区域がどのように変化したのか、通学距離は適正な範囲に保たれているのか、といった教育サービス供給の具体的問題を検討してきた。また、都市部の小学校にみられる学校間格差の問題についても若干の検討を加えた。

今後の課題としては、各エリアの人口や各小学校通学区域をしっかりと把握できるような事例地において、小学校の配置に関するより詳細な分析を行うこと、あるいは、ある小学校通学区域を対象を絞り、住民に対するインテンシブな聞き取り調査から、中国において通学区域が持つ社会的意味を明らかにすることなどが挙げられる。

最後に、「孟母三遷」という故事成語がある。はじめ墓場のそばに住んでいた孟母が、孟子の教育に良い環境を求めて、市場そして学校のそばへ転居するという内容である。子どもは周りの影響を受けやすいため、その教育には環境を選ぶことが大切であるという教えとして、広く知られるところであろう。子どもを少しでも良い学校に通わせてやりたいという親の願望は、昔から現在に至るまで普遍的なものなのかもしれない。とはいえ、教育の機会均等（公平性）という視点にからみた場合、こうした親の願望こそが現在の中国社会に大きな混乱をもたらしているといわざるを得ない。義務教育施設の配置や通学区域の問題に注目し、今後も中国を対象とする教育地理学的研究を行っていきたい。

謝辞

調査パートナーを務めて下さった齊齊哈爾大学の王治良氏、および日本地理学会春季学術大会（2014 年 3 月）・京都大学人文科学研究所共同研究班「現代中国文化の深層構造」（同年 6 月）における口頭発表の際にコメントをいただいた先生方に謝意を表したい。



写真1 寧江区実験小学



写真4 郊外の寧江区孫喜小学



写真2 寧江区実験小学のそばの美術・音楽・英語・パソコン塾



写真5 松原經濟開發中心校



写真3 郊外の寧江区单家小学



写真6 寧江区新城中心校に集められたスクールバス



写真7 前郭県のスクールバス



写真10 旧前郭県卡倫房子小学
現在は市の建設工程有限公司が使用されている。



写真8 吉林油田鑽井小学



写真11 寧江区第二実験小学の校門脇の揭示
板に貼られた「招生範囲」



写真9 吉林油田鑽井小学のそばの本屋・
パソコン店・メガネ店



写真12 学区を尋ねている百度知道の画面

前郭灌区の水田開発

小島 泰雄（京都大学 人間・環境学研究所）

1. 前郭灌区の概況

前ゴルロス（郭爾羅斯）モンゴル族自治県（以下、前郭県）の県城である前郭鎮の南には、整備された水田がひろがっている（写真1）。



写真1 前郭灌区の水田景観（鮮豊村）

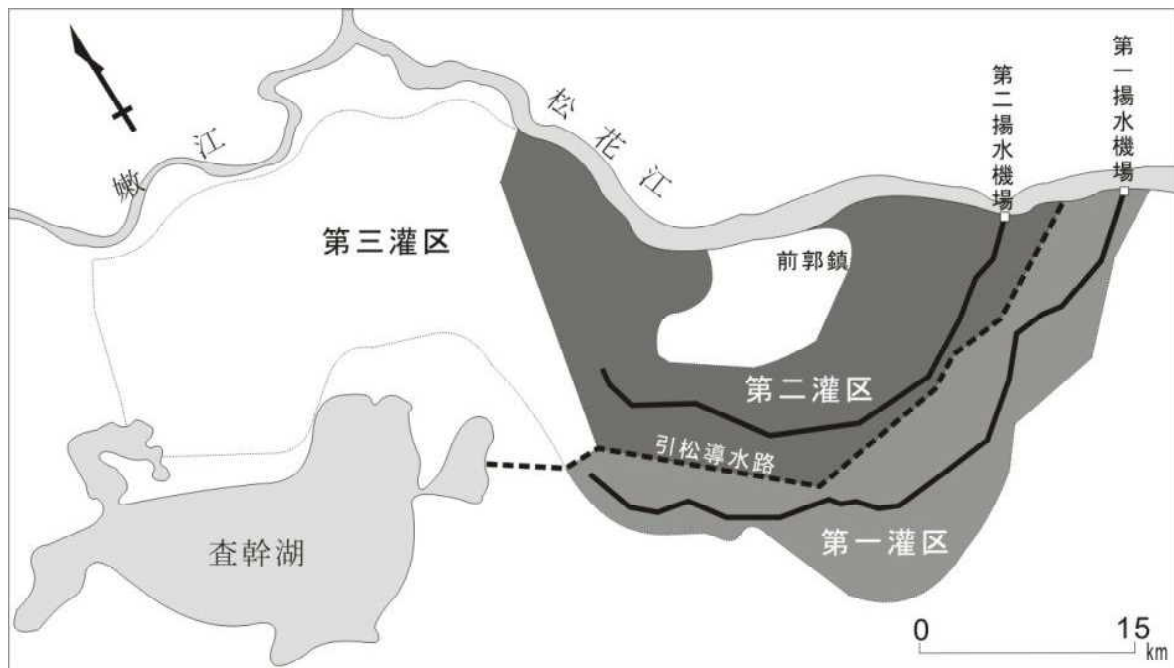
この水田地域では松花江の水を利用する灌漑が行われており、「前郭灌区」と呼ばれる。2005年の水田面積は、321,774畝（21,414ha）であり、郷鎮レベルでは、前郭鎮に13,372畝、吉拉吐郷43,255畝、白依拉嘎郷75,762畝、紅光農場40,544畝、紅旗農場19,493畝、蓮花泡農場14,717畝、達里巴郷46,965畝、蒙古艾里郷23,267畝、套浩太郷26,225畝など9の郷鎮・国営農場に分布している¹⁾。前郭灌区はなお開発途上にあり、2005年時点で開発される予定の面積は、179,725畝（11,981ha）にのぼっている²⁾。また前郭灌区は灌漑体系に応じて3分されており、第一（哈達山）揚水機場の用水範囲である第一灌区、第二（錫伯屯）揚水機場の用水範囲である第二灌区、これらの余水と他の用水を用いる第三灌区からなる（第1図）。吉林省の水田は主に東部の長白山山脈の山間部に分布しており、省の水稲播種面積（2005年）は65.4万haであるが、前郭灌区はその3.2%にあたり、省西部の主要な水田地域となっている。

前郭灌区の自然環境を特徴づけるのは、寒冷な平原に位置することに加えて、年降水量が450mmほどの、畑作から放牧への移行地帯にあるとみなされることである。したがって当地での水稲作には灌

1) 張徳臣編《前郭爾羅斯水田開発史》遼寧民族出版社，2008年，pp.113-114。なお、これら9行政体以外にも、毛都站鎮などに26,469畝の水田が分布する。

2) 前郭県全体の水田面積（2005年）は65万畝（4.3万ha）、開発予定面積は41万畝（2.7万ha）である。また前郭灌区管理局のホームページ（2012年公表）では、灌区の総面積192万畝、設計灌漑面積は57万畝、現有灌漑面積45万畝とされている。<http://www.qianguoguanqu.com/mh/qggqgggljjj/662.jhtml>。

溉が必要となることから、地域の外から流れてくる松花江の水は、水田化の必須の要件とみなされる。また夏季が温暖湿潤であるものの、冬季は極めて寒冷で長いことから、水稻作の適期は短い。地形についてみると、一部に松花江や嫩江の氾濫原が含まれるが、多くは段丘となっており、松花江の水を用いるためには揚水が必要となる¹⁾。また、土壌は草原に由来する黒土が多く、肥沃であるが、乾燥によってアルカリ化した土壌も分布している。



第1図 前郭灌区の概況図

『吉林省前郭地区第二灌漑区施設整備計画調査』（最終報告書，1994年）
所載の「前郭地区現況平面区分図」により作成。

このように前郭灌区は自然地理的には水稻作の適地とは言えず、揚水灌漑と寒冷地栽培技術の組合せによって水稻作が可能になる。その開発は20世紀半ばから進んだ歴史を持つ。小論は、この前郭灌区における水田開発の経緯をたどることで、美田を生み出した地域の歴史地理を明らかにしてゆきたい。

2. 水田開発の概観

第1表は前郭灌区の水稲生産の1951年から2005年までの変遷を示している²⁾。最も低いのは1953年の播種面積1,365ha、生産量2,764tであり、最も高いのは2005年の22,083ha、221,178tである。すなわち人民共和国になってからの半世紀あまりで、播種面積で16倍、生産量で80倍に前郭灌区の水稲作は拡大してきたことになる³⁾。

1) 2010年に基本施設が完成した哈達山水利樞紐工程は、松花江を堰き止めて水位をあげることで、灌漑のための揚水を不要とした。

2) 1985年までは《前郭爾羅斯蒙古族自治県志》（編纂委員会編1993年，遼寧民族出版社）により、1986年以降は《前郭爾羅斯水田開発史》による。後者は年度表示のため年表示に読み替えた。数値の明らかな誤記は関連数値の比較により最低限の修正をした。

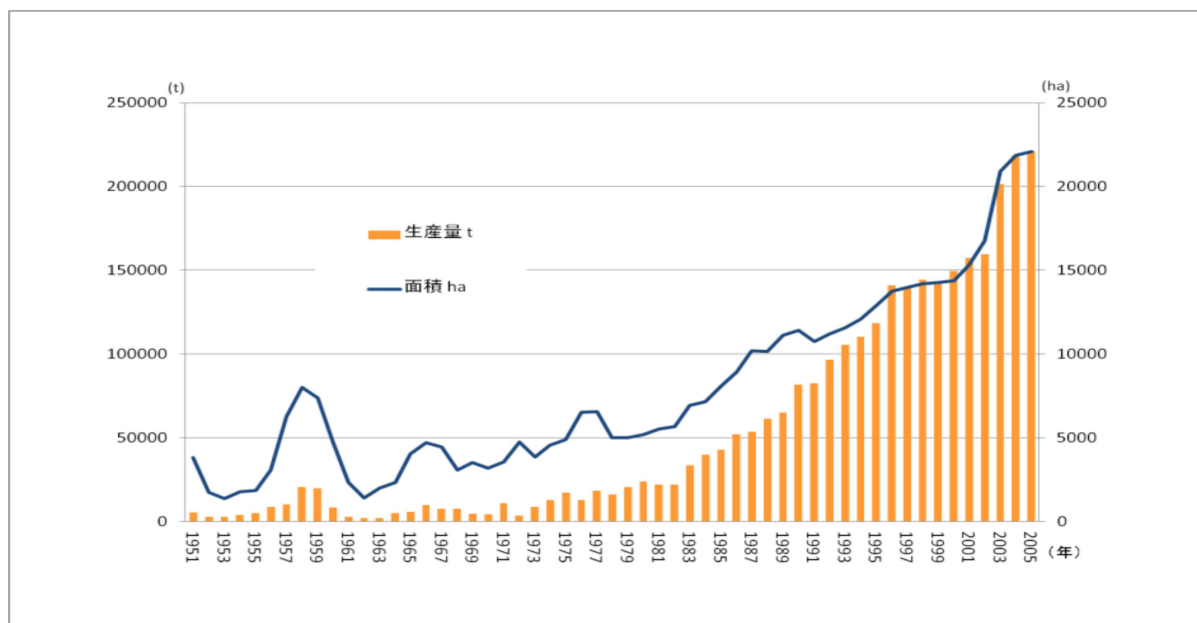
3) 中国東北における水稻生産の進展については、元木靖『中国変容論—食の基盤と環境』海青社、2013年。

第1表 前郭灌区の水稲生産の変遷（1951-2005）

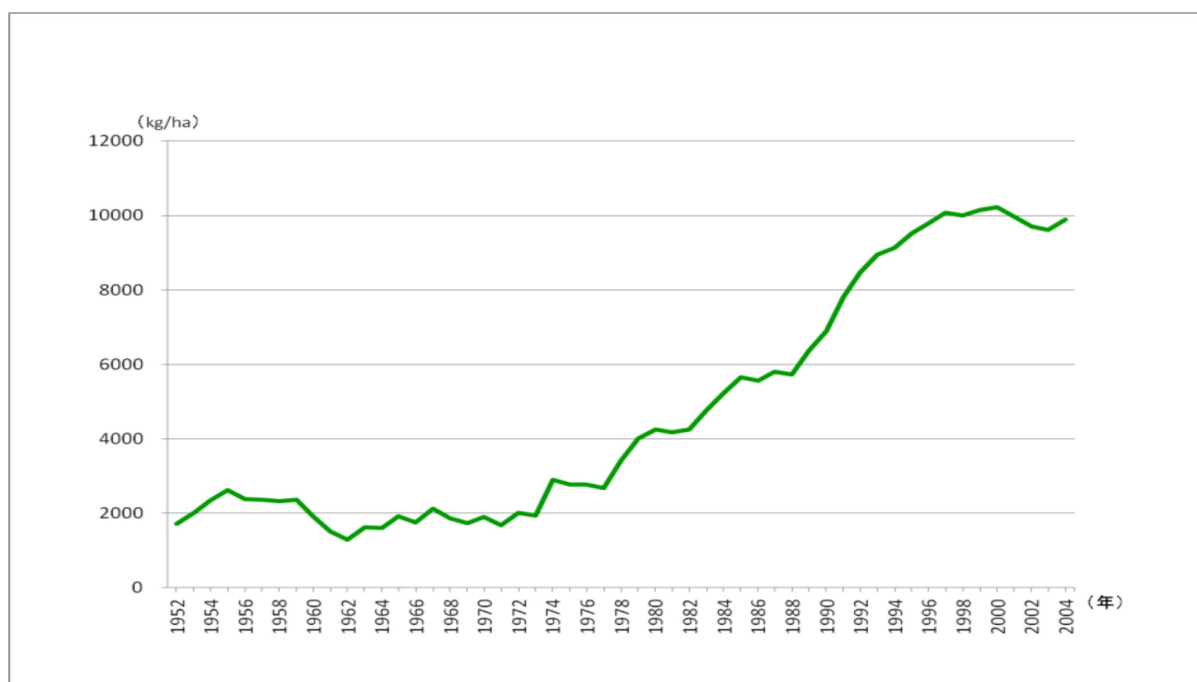
年	面積 ha	収量 kg/ha	生産量 t	年	面積 ha	収量 kg/ha	生産量 t
1951	3,814	1,417	5,406	1979	5,013	4,155	20,829
1952	1,742	1,687	2,940	1980	5,214	4,613	24,052
1953	1,365	2,025	2,764	1981	5,530	4,005	22,148
1954	1,777	2,347	4,172	1982	5,668	3,915	22,190
1955	1,879	2,647	4,975	1983	6,943	4,838	33,590
1956	3,084	2,865	8,836	1984	7,178	5,550	39,837
1957	6,267	1,650	10,341	1985	8,094	5,325	43,101
1958	8,007	2,587	20,718	1986	8,953	6,075	52,028
1959	7,373	2,730	20,128	1987	10,188	5,265	53,666
1960	4,799	1,800	8,638	1988	10,179	6,090	61,511
1961	2,336	1,252	2,926	1989	11,114	5,850	65,060
1962	1,410	1,492	2,104	1990	11,416	7,185	82,000
1963	2,004	1,132	2,270	1991	10,758	7,668	82,498
1964	2,336	2,227	5,203	1992	11,217	8,613	96,625
1965	4,043	1,440	5,822	1993	11,568	9,118	105,489
1966	4,716	2,070	9,762	1994	12,082	9,117	110,165
1967	4,450	1,732	7,710	1995	12,900	9,178	118,408
1968	3,090	2,557	7,903	1996	13,770	10,245	141,073
1969	3,536	1,313	4,643	1997	13,982	9,966	139,343
1970	3,199	1,335	4,271	1998	14,201	10,012	144,308
1971	3,562	3,075	10,953	1999	14,276	10,008	142,876
1972	4,761	637	3,635	2000	14,371	10,410	149,610
1973	3,864	2,325	8,984	2001	15,321	10,269	157,325
1974	4,568	2,865	13,087	2002	16,756	9,196	159,634
1975	4,904	3,518	17,252	2003	20,905	9,645	201,622
1976	6,542	1,950	12,757	2004	21,853	10,000	218,530
1977	6,578	2,820	18,550	2005	22,083	10,016	221,178
1978	5,018	3,255	16,334				

『前郭県志』p.187, 『前郭爾羅斯水田開発史』pp.210-211により作成

前郭灌区における水稲生産の半世紀にわたる拡大は、けっして一様に進んだわけではない。水稲の栽培面積と生産量の変遷を示した第2図からは、大きく2つの時期を指摘することができる。前半は、1950年代末の小さなピークを一つのエピソードとしながら、1950年代と1960年代には栽培面積で3000～4000ha、生産量で4000～5000tを徘徊している。それに対して後半は、1970年代半ばに栽培面積と生産量がともに上昇に転じ、1980年代から2000年代までは連続する急増期となる。



第2図 前郭灌区の水稲の栽培面積と生産量の変遷（1951-2005）



第3図 前郭灌区の水稲収量の変遷（1952-2004）

また、単位面積あたり収穫量の変遷を示す第3図からは、1960年代の低迷がより明確に現れると同時に、1970年代半ばを転機として収量が上昇に転じ、1990年代半ばまでの20年間にわたって一貫して上昇していることがわかる。

これら2つのグラフを対照することで、前郭灌区における水稲生産の変遷は次のように整理されよう。集団化期において停滞していた水稲生産は、1970年代半ばから収量の上昇局面に入り、さらに生産請負制の下で栽培面積の増大が加わり、この両者の相乗効果による急増が1990年代半ばまで続いている。そして2000年代になって栽培面積の増大による生産拡大が再び現れている。

3. 水田開発の展開

前郭灌区では水田開発をベースとしながら、収量の増大が連動して、水稻生産の拡大が続いてきた。以下では、フィールド調査における聞き取りと¹⁾、文献資料を組み合わせで²⁾、この水田開発の展開を時期別に考えてゆきたい。

(1) 前史

1937年に生まれた包氏は、前郭灌区の北東、吉拉吐郷錫伯屯村に住むモンゴル族の農民である。祖父の代から当地に暮らしてきた彼は、満洲国が崩壊して間もなく、9才から豚の放牧を始めている。包家はモンゴル族ではあるが、遼寧から越してきたために、土地改革まで農地は所有せず、母方の姻族である地主を手伝って暮らしていた。当時、このあたりは荒涼としており、草原を開墾しては、高粱やトウモロコシ、大豆などを生産していた。生産は半農半牧であり、馬をはじめ、羊や牛、豚を放牧していた。

清朝においてモンゴル王公の領地であった当地は、「蒙地」として封禁の対象とされており、おもに遊牧が行われていた。清末に東北への漢族移民が開放されるようになって、モンゴル族地主による開墾も始まった。民国になってもモンゴル王公の支配は続き、土地の所有権はモンゴル族に限られていたが、次第に地域経済においては農業の比重が増大していった。漢族の移住農民は農業労働力として、そして農耕技術を伝播する媒介者として、この開発を推進している。1920年代末になって外地の農民の定住が許され、多民族の雑居がひろがってゆく。漢族農民の定着により農業技術は向上し、収量も上がり始めた。満洲国が成立して、農地の売買をモンゴル族に限っていた制約はなくなったが、農家の構成をみると、モンゴル族の自作農が15%、漢族主体の小作農が72%を占めていた。満洲国期に農地の開拓が進むとともに、農作物はアワ（4.0万ha、1943年以下同）とトウモロコシ（4.5万ha）、高粱（3.1万ha）がほぼ三大作物で、大豆（1.3万ha）はやや少なく、水稻（600ha）はわずかであった。このうちアワとトウモロコシが増大している³⁾。

(2) 満洲国末期の水田開発

1920年代末には、移住してきた朝鮮族が湧水や沼沢を利用した水田を400haほど請け負っていたとされる。また1935年には満洲国政府によって間島省からの朝鮮族農民の移住が進められている。1944年の時点で388haの水田が、分散的に泉水灌漑により行われていた。しかし、当地では寒冷で乾燥した自然条件のために水稻作は適さないことから、現在に連続する大規模な水稻栽培が行われるきっかけとなったのは、満洲国末期の水田開発であった。

第二次大戦末期に食糧事情が逼迫した日本に米などを送るために「満洲国緊急農地造成計画」が策定され、1944年と1945年の2年間で、松花江と東遼河の2地区をはじめとした18万haの農地開発が進めることとなった。事業は日本の出資により行われ、満洲農地開発公社が実施した⁴⁾。このうち松花江の農地開発として5万haの水田開発が目指されたのが、現在の前郭灌区にあたる。1943年に満洲国政府は前郭旗の14万垧（1垧（shang）は約1ha）の農地を買い上げた⁵⁾（第2表）。

1) フィールド調査は2013年8月14-26日に松原市で行われた。聞き取りは吉拉吐郷の錫伯屯村と鮮豊屯村で行い、王徳宣先生に同行いただいた。記して謝意を表します。

2) 前掲《前郭爾羅斯水田開発史》《前郭爾羅斯蒙古族自治県志》に加えて、《前郭爾羅斯蒙古族自治県農業志》（同編纂委員会編2006年、吉林人民出版社）を用いる。

3) 前掲《前郭爾羅斯蒙古族自治県農業志》p.57。

4) 経済部大陸課「昭和二十年 農地開発公社関係 参考資料」アジア歴史資料センター、レファレンスコード：B06050480700。

5) 前掲《前郭爾羅斯水田開発史》，pp.14-15。

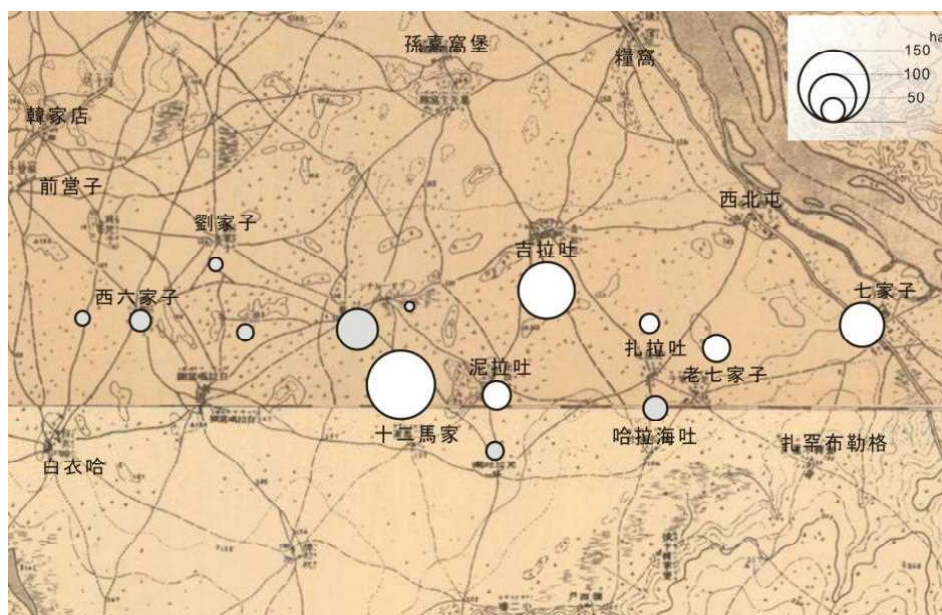
具体的な工事は、揚水機場の建設と灌漑と排水の水路網の建設であった。吉林・濱江・四平3省から10万人を越える農民が徴用され工事は進められた。1日あたり労働力は1943年が4.8万人、1944年6.8万人、1945年8万人にのぼり、149の灌漑・排水路の総延長は662km、2184万立方m（第一灌区1464万、第二灌区600万）の土方量という大規模な工事であった。1945年には哈達山揚水機場を利用する第一灌区の工事は、7台の揚水機と1台の変圧器が設置され、145kmの送電網と、28.4kmの総灌漑水路が完成し、計画の9割が実現していた。1945年には吉拉吐、扎拉吐、十二馬架、六家子の908haの水田において水稻作が行われた¹⁾（第4図）。この事業は、当初は日本の開拓団を受け入れる予定であったが、1945年の段階では水稻栽培技術をもった朝鮮族の農民627世帯を黒龍江省と間島省から移住させて水稻作にあたらせている。

第2表 満洲国期の灌区開発計画における土地利用の変化

単位: 垧

		開発後の土地利用					
		水田	畑	牧場	林地	その他	合計
開発前の土地利用	水田	390					390
	畑	20,000	62,300		1,000	1,500	84,800
	林地				130		130
	放棄地	2,400	500	200	100	150	3,350
	原野	27,600	23,000	10,000	14,900	12,500	88,000
	その他					3,330	3,330
	合計	50,390	85,800	10,200	16,130	17,480	180,000

出典：仲奇1987「日偽時期前郭灌区開発概述」『前郭文史資料』第6輯，pp.45-51。



第4図 満洲国期の水田化

基図は満洲十万分一地形図（1933），白城子五号「伯都訥」，奉化一号「查幹吐莫」。集落位置の確認できななかつたものは、上位地名の付近に暗く表示した。

1) 同上書，pp.20-24。

この水田開発は、生産された米が自給部分を除くと、日本に送られることになっていたのが端的に示すように、まったく日本の植民地経営の枠組において行われた事業である。計画から施工に至るまで満洲国が主体となっていたが、そのことは日本の敗戦にともなう満洲国の崩壊によって、この開発自体が頓挫することに帰結した。完成に近づいていた工事が中断されただけでなく、揚水施設が破壊されたことによって、すでに始まっていた灌漑もできなくなったのである。

(3) 社会主義建設期における展開

満洲国の崩壊により中断した水田開発は、政情の安定により新たな開発段階に入ってゆくこととなった。老農民の聞き取りを行った錫伯屯村は第二灌区に属しており、満洲国末期にはまだ水田化が行われておらず、水稻栽培が始まったのは1950年代半ばであったことが語られる。前郭灌区の人民共和国期における展開を、主に《前郭爾羅斯水田開発史》によりつつ整理してゆく¹⁾。

人民共和国期の水田開発が、満洲国期に用排水路などが9割ちかく完成していた第一灌区の復旧から着手されることとなったのは、当然と言えよう。1950年2月には省水利局の測量隊20名余りがひと月にわたって現地測量を行い、施工準備を行った。満洲国期の資料が散逸したために、復旧工事の基本的な資料となる大縮尺地図の作成が必要となったためである。地図作成については、このほかに翌1951年には九台農校の教師・学生や、灌区工程処の測量隊が測量にあたり、前郭灌区の5千分の1地形図を完成している。復旧工事は段階的に進められ、水田開発もそれに応じて進んでいった。まず第一（哈達山）揚水機場の再建が着手された。長春から電線を架線し、1950年末には7台の揚水機の修理と設置が終わり、翌1951年5月から揚水灌漑が始められた。揚水機場の再建と並行して用水路と排水路の整備が進められた。まず既存の用排水路の改修から行われ、さらに初年度の通水により浮かび上がった排水不良の問題を解決するために、1951年10月には第一排水路の整備が始められた。また、現在の紅旗農場の前身である国営農場が1951年に作られ、各地から集められた農場労働者1800人によって、水利建設と水田開発、農業生産が担われた。

この時期の灌漑施設の復旧には、留用されていた日本人技術者が動員されている。測量・採寸・施工に高橋文男、設計に若月照州、製図に下元三都子があたったことが記載されている。ここにも満洲国末期の開発との連続性を見出すことができる。

一方、満洲国期には建設途上であった第二灌区については、第一灌区の経験に基づいて、前郭灌区の管理处が主体となって整備が進められた。1956年に設計と施工が着手され、1957年5月に第二（錫伯屯）揚水機場が完成し、灌漑が始まっている。冒頭の錫伯屯に暮らす老農民の語りが示す水田化がここに始まった。

2つの灌区の排水問題を解決するために、北に延びる第五排水路について流路変更をとまなう改造が1956年に行われた。さらに排水不良の抜本的な解決もその目的の一つとして、1976年に“引松工程”が着手された。このプロジェクトは、前郭灌区の北西にある查幹湖が上流のダム建設により湖面減少と塩湖化が進み、生態的な危機を迎えたことから、松花江の水を導水することになったものである。錫伯屯村の南から松花江の水を引き入れ、查幹湖までの50kmあまりにわたる長大な水路が建設された。この工事は1976年に始まったが、第2期工事が完成したのは1986年となる難工事であった。1950年代の水利建設が徴用された労働者と労働改造受刑者により進められたのに対して、1960年代、1970年代の水利建設には集団化された農民の動員が大きな役割を果たしている。

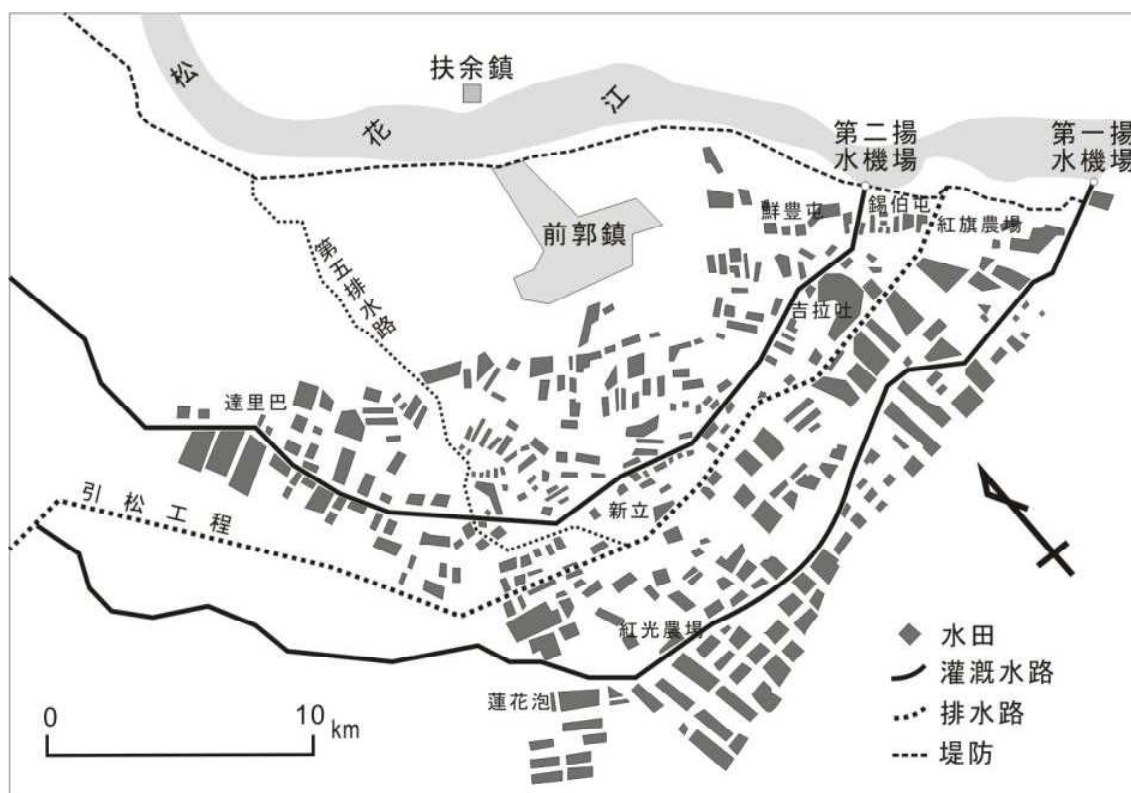
こうした灌漑システムの復旧と整備は、そのまま水稻栽培の全面展開につながったわけではない。第1表に見たように1960年代までは水稻の栽培面積と生産量は年変動が大きかった。吉拉吐郷では、1950年代には排水がうまくいかず、農民の栽培技術も低く、水田の収益が低かったことから、水田を

1) 同上書、第三章「社会主義建設時期的水田開発（1949～1978年）」、pp.28-96。

畑に変えることも多かったとされる。

このように前郭灌区の水田化はいくつかの障害を乗り越える必要があった。排水の問題はすでに言及したが、いくつかの理由が複合的に水稻生産の低迷を生み出していた。排水とともに自然的要因としては、塩類集積がある。乾燥した当地ではアルカリ化した土壌がひろく分布し、水稻栽培には土壌の改良が課題となってきた。また経済的要因としては、収量を増大させる近代的な投入としては化学肥料や農薬の使用があるが、その本格化は1970年代以降にずれこんだ。そして水稻栽培をめぐる文化的な要因も見逃せない。当地の農民は水稻栽培の経験が農民に無く、当初は積極的に水稻栽培に取り組んだものの、栽培技術が不足し、畜力も限られたことから、水稻の生産量は伸びなかった。収量が伸びない水稻栽培への積極性はすぐに失われた。聞き取りにおいても、漢族農民は当初は水田での農作業を忌避し、外来の朝鮮族農民が担っていた状況が浮かび上がってきた。

社会主義建設期の水田開発は、復旧から停滞と曲折を経験して前進したものであり、現在観察される一面の美田という現状とは異なるものである。水田と畑が交錯する状況が、1980年代はじめの水田分布（第5図）からも看取される。



第5図 1980年代前半の水田分布

《前郭爾羅斯水田開発史》所載の“前郭灌区現状図”により作成

(4) 改革開放期の水田開発

前郭灌区の70年にわたる水稻生産が、低迷の前期と急増の後期に分かれることはすでに指摘した。それが1978年を画期とする社会主義建設期と改革開放期にそれぞれ対応することは、容易に想定されるであろう。実際に、そこに暮らしてきた老農民も、改革開放政策を先導した生産請負制が、水田開発に大きな役割を果たしたことを強調している。すなわち制度変化が刺激した農民の農業への積極性が、水稻生産の拡大を推し進めていったことになる。

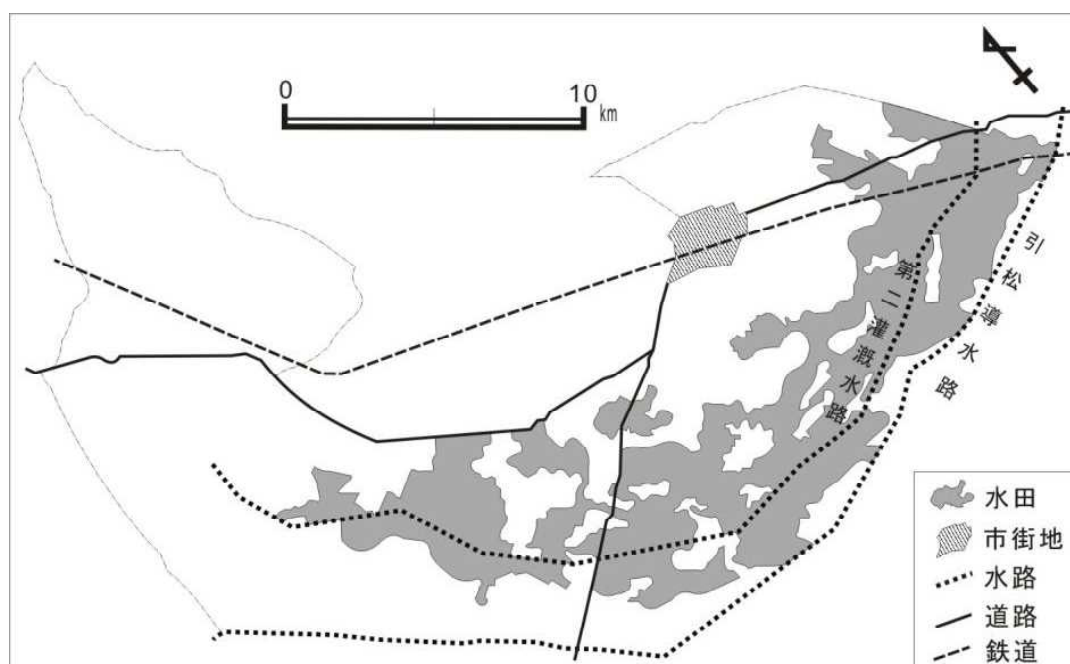
しかし、社会主義建設期の水稻栽培に対して、負の評価のみを付すことができないことも、前節の考察からは明らかであろう。試行錯誤的な水利施設の整備の進展は、前期の低迷を結果したのである

が、後期に水稻生産が急増することの前提条件ともなっている。さらに詳しく見れば、収量増大はこの画期に先行して1970年代前半から始まっており、それには化学肥料と農薬の使用という、制度と異なる次元における貢献があった。

本節では、改革開放期における前郭灌区の水稲生産の急増について、それを実現した過程について、水利や土地などの伝統的投入と、化学肥料や農業機械などの近代的投入の2つの側面から検討してゆくこととする。

水利と土地にかかわる投入としては、まず第一（哈達山）揚水機場の改修が挙げられる。1978年から1985年にかけて、四半世紀以上使われて、能力が低下した揚水機を更新することなどが行われている。第二（錫伯屯）揚水機場についても同様の改修がめざされた。それには日本のODAによるアセスメントも行われたが¹⁾、具体化は2000年代にずれこんでいる。排水問題の解決に重要な役割を果たした引松工程については、集団化期の農民の動員では対応できなかった、地下水位面より低い水路11 kmが建設機械を用いて開削され、1986年に完成した。改革開放期の水利建設を社会主義建設期のそれと比較すると、計画性とその実施過程がよりシステム化されていることがわかる。

こうした灌区スケールの水利建設による灌漑と排水の安定を背景として、この時期の水田開発には、末端の水路建設とそれと連動した水田一筆ごとの整備が大きな意味を持っていた。従来は田越し灌漑がほとんどで、水田の水位を管理することも難しかったが、末端まで水路が建設されたことにより、水田一筆ごとの用水管理が可能となり、低平化や乾田化などの農地整備があわせて行われたことで、水田としての機能が向上した。アルカリ土壌の改良もこの時期に進展している。こうした個別農地スケールの開発はいずれも、生産請負制の導入によって主体性を獲得した家族経営の要請と切り離すことはできないであろう。第6図は第二灌区の1990年代初期の土地利用を表しているが、1980年代前半の第5図と比べると、水田は外的拡大よりもむしろ内的充実が進んでいることがわかる。



第6図 第二灌区の土地利用

出典：『吉林省前郭地区第二灌漑区施設整備計画調査 最終報告書』1994年

1) このプロジェクトは、吉林省水利庁と国際協力事業団の間で締結されたもので、1992年から翌年にかけて調査が行われ、基本計画の見直しと実施可能性が検討された。最終報告書は『吉林省前郭地区第二灌漑区施設整備計画調査 最終報告書』（1994年）として刊行された。

第3表は、第二灌区に属する吉拉吐郷について、集落ごとの水田面積と水稻収量を4期にわけて示したものである¹⁾。まず水田面積の変遷に注目すると、人民公社期にあたる第二期から改革開放期前半にあたる第三期の間で、いずれの集落においても増加が顕著である。すなわち上述の生産請負制の導入と並行した水田開発の内的充実が、集落スケールで確認できる。一方、水稻収量の変遷については、4期を通じた上昇が観察されるが、次第に集落間の格差が縮小し、1haあたり10tという極めて高い水稻収量に収斂していることが注目される。この水稻の収量増大と平準化には、化学肥料・農薬の投入、品種の改良、栽培技術の革新が寄与している。また、開拓初期の低収量が示すのは、“広種薄収”と呼ばれる粗放的な稲作が行われていた状況であり、在来の地力に依存し施肥もほとんど行われなかったとされる。

第3表 吉拉吐郷の水田開発の変遷

面積:ha、収量:kg/ha								
	1949-1960		1961-1981		1982-1997		1998-2006	
	水田面積	水稻収量	水田面積	水稻収量	水田面積	水稻収量	水田面積	水稻収量
吉拉吐	60	150	240	4000	800	9000	1059	10500
錫伯屯			230	7000	350	9000	552	10000
七家子	15	150	150	7000	320	5000	418	10000
扎拉吐			130	600	420	5000	500	10000
上嘎					41	8000	41	9500
下嘎	45	250	60	4500	100	8000	150	10000
良種場			50	5000	175	8000	200	10000
扎布革					304	4250	358	10000

《前郭爾羅斯水田開発史》所載の表28（p.167）により作成

水稻品種は、開拓当初は朝鮮半島や北海道からもたらされた品種が用いられていたが、1950年代には農業科学院が育成した品種が使われるようになり、1980年代半ばからは1haあたり収量が8tにのぼる高収量の「吉粳60」などが選ばれるようになった²⁾。現在も農家ごとに選ばれた品種は多様であり、「秋田小町」のような収量は低いが生味のよいものも生産されるようになっている。

化学肥料の使用は、1970年代になって硫酸アンモニウムが使われるようになり、1970年代後半に県内に化学肥料工場がつくられ、そこで生産された尿素がひろく使われるようになった。そして1980年代からは混合肥料が多投されるようになっていった。

栽培技術の飛躍的な革新は、1980年代初めに日本から温室育苗技術が導入されたことに始まる³⁾。在来の育苗方法からの転換は、栽培適期の限られる寒冷地の水稻作にとって大きな発展契機となった。1981年に輸入された“大柵盤育苗機械挿秧”と呼ばれる温室育苗一機械田植えのシステムは、アルカ

1) 《前郭爾羅斯水田開発史》p.167、表28。

2) 《前郭爾羅斯蒙古自治州農業志》p.385。

3) 日本中国農業農民交流協会による技術協力の展開については、藤田泉「中国吉林省への日本稲作技術の移転記録」中国研究月報、58-10、2004年、26-35頁。

り土壌に起因する立枯病のために初年度こそ成功しなかったが、当地の農民と農業技術者による改良・土着化と、藤原長作に象徴される日本の寒冷地稲作技術の経験の伝播があって、数年で定着していた。

4. おわりに

清朝末期に始まった中国東北の開発はなお進行中である。その開発過程に日本は、「満洲国」13年間の深く直接的な関与だけでなく、さまざまな関係を有してきたことが、前郭灌区の水田開発にも観察された。

日本ではいまでも、中国東北の開発における日本の関与を過大に評価する言説がみられる。それは引き揚げ者の思い出に付加されたり、酒席での研究者の気楽な発言であったりする。植民地近代化論とは関わり合いのない文脈であるがゆえに、むしろ中国東北の地域像の根深い連続がそこに見出される。小論は、東北平原における水田開発の歴史地理を振り返ることで、そうした地域イメージの相対化を図る試みでもあった。

前郭灌区と呼ばれる水田の形成に、日本はさまざまな形で関与してきた。まず日本の国策としての水田開発が前郭灌区の出発点であり、戦後の復旧には留用された日本人技術者が貢献している。また、交流が制限された社会主義建設期においても、種子や化学肥料に日本との関係が認められる。そして寒冷地稲作農法の確立にも日本生まれの技術とそれを伝える日本人が関わっていた。しかし、これらをもって「中国東北の水稻生産は日本がもたらした」とするのは不適切である。

水稻農耕の経験のない漢族やモンゴル族は水田開発の初期に労働力たり得ず、移動してきた朝鮮族がそれを担ったこと。試行錯誤あるいは弥縫策的対応であったにしても、灌排水システムを自らの計画において実現してきた社会主義建設期。そして何よりも、制度変更により再び経営主体となった農家が、末端の水利と水田を整備し、現在の美田を生み出したこと。これらを想起すれば、日本の関与が部分的であることは明らかである。こうした認識に立ってはじめ、中国東北における日本の関与を考察することが可能になるであろう。

* 本論文は『地域と環境』第13号（「地域と環境」研究会、2014年12月）からの転載です。参照いただく場合は、そちらを利用いただければ幸いです。また転載にあたって、体裁と一部の図表・表現の更新が行われています。

吉林省松原市“前郭灌区”及哈达山水库

王德宣（中国科学院东北地理与农业生态研究所）

松原市位于吉林省中西部、松嫩平原南端。下辖扶余县、前郭尔罗斯蒙古族自治县、长岭县、乾安县和宁江区。面积约 22000 km²。著名的“前郭灌区”位于前郭尔罗斯蒙古族自治县境内。灌区内的用水原为通过泵站用电力抽提松花江水。在灌区哈达山抽水站上游 200 m 处，正在建设哈达山水库。水库建成后，将提高松花江的水位，使现有前郭灌区提水灌溉变为自流灌溉，估计每年节约电费约 1200 多万元。

1.1 前郭干灌区

前郭尔罗斯蒙古族自治县（简称前郭县）地处松辽平原的东端、松嫩沙地的边缘（124°10'E~125°02'E, 44°18'N~45°28'N），土地总面积 6029.4 km²。该县属半湿润半干旱的大陆性季风气候，≥10℃积温 2948℃，年平均降水量 400~600mm。在地质构造上处于第三纪东北陆台的中心部分，地表层以第四纪沉积物为主。第二松花江、嫩江分别流经本县的东部和北部。此外，还有大小泡沼近 200 处，集中分布于中北部地区。前郭县地貌类型复杂，包括沿江泛滥平原、冲积湖积平原、古河道洼地、阶地平原、高台地和沙垄与丘间洼地。该县地带性土壤为黑钙土，同时还分布有风沙土、水稻土、草甸土、盐碱土等土壤类型。地带性植被为草甸草原。

前郭县根据地质、地貌、气候、水文、土壤及植被等自然地理要素的地域组合差异，可以分为沿江泛滥平原冲积土~草甸土区、中北部冲积湖积平原盐碱土区、西部阶地平原淡黑钙土及风沙土区、南部台地黑钙土区四个自然地理单元区。著名的“前郭灌区”主要分布在沿江泛滥平原冲积土~草甸土区。

1.2 灌区概况

地形地貌：前郭灌区地处第二松花江下游左岸，北邻第二松花江主河道，南接松辽分水岭台地，地势平坦，地面高程131~141 m 左右，高差10 m 左右。灌区南部呈陡坎状与松辽分水岭台地相接，台坎之上高程在145~175m左右，台坎之下冲积平原地面高程在135m左右，形成高差10m左右的陡坎。灌区西部与松辽平原相接，接壤处，灌区高程在132~134 m左右，松辽平原高程在134~142 m 左右，亦形成2~8 m 坎状相接关系。区内成土母质为近代河流冲积物，上部为壤质~粘壤质，厚度不等，其下多见砂层。地下水埋深在1.5m左右。

气候：本区具有显著的大陆性气候特点，四季分明。春季干旱多风，夏季湿热多雨，秋季凉爽温差大，冬季漫长而寒冷，其水热条件可满足一年一熟农作物生长发育的需要。年平均温度4.6℃，≥10℃积温为2926℃。年平均降水量425~450 mm，降水量的70%左右集中于夏季的6~8月间，年平均蒸发量为1206 mm，是降水量的3倍左右。

植被：灌区自然植被除零星的山杏、杨、榆等木本植物外，多为草本植物。随地形与土壤水、盐状况的不同，可分为三种不同植被类型。即：草原植被类型、草甸耐盐植被类型、草甸好水植被类型。分布于沙丘上的草原植被类型的植物有：狗尾草、羊草、猪鬃草、黄蒿、扫帚花、野紫云英等；分布于盐化土壤上的草甸耐盐植被类型的植物有：碱草、狼尾草、星星草、刷帚草、碱唐松草、碱蓬等；分布于潜育性土壤上的草甸好水性植被类型的植物有：芦苇、乌拉草、三棱草、石菖等。

土壤：灌区土壤有五个土类，即，黑钙土、草甸土、盐土、沙土及水稻土。黑钙土分布于灌区北部微高地旱田区；草甸土有盐化及非盐化草甸土、潜育草甸土。非盐化草甸土、盐化草甸土及盐土一般呈复区形式交错分布于灌区低而平坦地形上，潜育草甸土及盐化潜育草甸土也以复区形式交错分布于灌区西部地表积水的低洼地上；沙土一般以沙丘形式零星分布于灌区；水稻土是长期种稻条件下形成的土壤，时间是重要成土因素。前郭灌区种稻历史尚不长久，故其种稻土壤仍保留原母土特征，据此，水稻土划分为：黑钙土型水稻土、草甸土型水稻土、盐化草甸土型水稻土、冲积草甸土型水稻土和盐化冲积草甸土型水稻土，

它们广泛分布于灌区种植水稻区域。

前郭灌区是吉林省重要的水稻生产基地之一。该灌区历史悠久，早在1942年就开始计划建设，1943年秋，日本开发局派遣应援技术官指导施工，并从农安、郭前旗等地征集劳工8万余人，开始在郭前旗第二松花江左岸沿江地区全面开工。以第一抽水站（哈达山）、第二抽水站（西伯屯）为重点，在前郭灌区建站、修渠、开发灌区扩大水田。1949年中华人民共和国成立后，政府加大对灌区的开发力度，增设了大型电力抽水站、增加总装机容量、扩大灌溉面积、开发“引松工程”（引松花江水工程）等措施，扩大水田面积，提高粮食产量。前郭灌区自1998年实施“续建配套与节水改造”项目以来，建设步伐明显加快，已经形成了畅通的灌排体系。灌区现有哈达山抽水站、锡伯屯抽水站、七门吐排灌站三座大型渠首工程。并建有引松补水站、门吐坑排灌站等五座补（排）水工程，共安装机电设备32台（套），总装机容量1.3451万KW。灌区内现有各类渠系建筑物687座。其中总干渠3条，长100.3 km；干渠18条，长122.5 km；斗渠140条，长298 km；农渠4088条，长3035 km；排水总干沟1条，长53.8 km；排水干沟15条，长184.5 km。

前郭灌区下辖吉拉吐乡、白依拉嘎乡、达里巴乡和红旗农场、红光农场、莲花泡农场、八郎农场、哈拉毛都原种场、红星牧场等乡和国营农牧场，总人口约10万人，现有耕地面积38611 hm²（其中水田面积23344 hm²），草原面积17588 hm²，水面面积2869 hm²。2011年全灌区粮食产量突破37万吨，水稻产量达到32万吨。

1.3 灌区管理体制

前郭灌区灌溉管理局是灌区的运行管理单位，是隶属于前郭县人民政府的事业单位，实行企业管理。局机关设灌溉科等10个职能科室和专门负责工程建设的机构“续建配套与节水改造项目”办公室。管理局还下设提水泵站、灌溉收费等各类基层单位24个。灌区主要经济来源为水费收入。多年来，随着改革与发展，灌区的水费收缴分别经历了乡镇村水费代收代缴、灌区收费员入户收缴和金融部门代收代缴等几个管理阶段。

2003年以前，前郭灌区水费收缴。完全由乡镇（场）政府直接对农户按照灌区提供的水费额度代表灌区进行收缴。之后逐步改变收费方式，成立了灌区灌溉管理局自己的水费收缴部门。由水费收缴部门职工直接入户收缴。2007年底，灌区进行灌溉管理与水费收缴综合改革。将灌溉管理与水费收缴两个部门合二为一，在三个分灌区共建立8个“灌溉收费管理所”。但是，由“灌溉收费管理所”的工作人员直接到用户家收缴水费的作法，也存在水费收缴困难的问题。

2012年1月9日，前郭灌区灌溉管理局与吉林省农村信用联社正式签订了水电费代收代缴合同，标志着金融部门代收代缴灌区水电费工作正式启动。委托金融部门代收水电费，实行灌区用水户直接向农村信用联社交纳水电费，使水电费的收缴更加便利。同时，水费收缴管理主体也发生了变化。水管单位委托金融部门代收水电费后，收缴到的水电费统一上缴到县级财政局，水管单位的各项支出需向财政部门申请资金。全部水费的开支在财政部门的严格控制和审计部门的严格监督下进行，防止了挪用和违纪违规事件发生。

前郭灌区每年4月25日开闸放水。至9月10日全年灌溉工作结束。用水计量主要采取的方式为：一是根据各灌溉收费管理所的用水需求，制定用水计划和调水方案，实行轮灌政策；二是推行“流量包段、责任到所”的管理办法，严格控制分水口闸门启闭权，确保水量统一调度。由于没有实现计量收费，前郭灌区仍按耕地面积收取农业水费，每公顷水田收取水电费为1060元。其中700元为水费，360元为电费。

前郭灌区农业灌溉水价的具体审批程序为：由供水单位根据供水需要，测算出供水成本，报上级水行政主管部门和物价部门审核同意后，由县人民政府批准，供水单位组织实施。

(1) 哈达山水库

哈达山水利枢纽工程（哈达山水库），位于松原市城区东南约20 km的第二松花江干流上，前郭灌区哈达山抽水站上游200 m处，距第二松花江与嫩江汇合口约60 km，是第二松花江干流规划中最末一级控制性水利枢纽工程。工程的任务是以向工农业和生活供水为主，兼顾生态环境保护、发电、防洪等综合利用，并为以后向辽河流域缺水地区供水创造条件。哈达山水利工程是吉林省有史以来最大的水利工程项目，也是吉林省增产百亿斤商品粮能力建设的重要水源工程。该工程主要由哈达山水利枢纽和供水区输水干渠

及渠系建筑物组成。其中哈达山水利枢纽由土石坝、溢流坝、河床式电站、重力坝、渠首闸、上游库区左岸防护堤等组成。该工程供水区输水工程通过泵站和管道、渠道向第二松花江右岸的松原市区、3个采油厂（新民采油厂、扶余采油厂、新木采油厂）供水；利用哈达山水利枢纽左岸总干渠输水和花道泡调蓄，向前郭灌区、乾安、长岭及白城市的通榆县城和2个采油厂（乾安采油厂、前大采油厂）与氟病区的30个乡镇供水。该工程正常蓄水位140.5 m，总库容6.084亿 m^3 ，坝顶总长2450 m，水电站装机27.6兆瓦。输水干渠总长97.54 km，设计引水流量176 m^3/s 。工程建成后，年均可向吉林省西部供水20.112亿 m^3 ，供水范围包括：松原市区及其所辖的乾安县、前郭县、长岭县、宁江区、扶余县，以及吉林西部白城市的大安市、通榆县部分乡镇；其中城镇生活和工业年供水量2.825亿 m^3 ，油田年供水量0.322亿 m^3 ，农村防氟病改水年供水量0.159亿 m^3 ；发展灌溉面积285万亩，其中改善灌溉面积43万亩，新增灌溉面积242万亩，年均增产粮食16亿斤，年灌溉供水量15.058亿 m^3 。

2.1 工程建设背景

吉林省西部地区资源丰富，地势平坦，土壤肥沃，是最具工农业发展潜力的地区。松原市地处第二松花江流域最下游，是1992年由国务院批准成立的地级市，是吉林省中西部地区新兴的以石油、化工为主的现代化工业城市。区内交通方便，公路、铁路四通八达，建市以来的20余年，松原市经济总量迅速扩大，国内生产总值占吉林省国内生产总值的10%，居全省第三位，耕地总面积占吉林省耕地总面积的14.2%，是松嫩平原的重要组成部分，也是重要的粮食和畜牧业生产基地，具有非常优越的开发建设条件。现已被吉林省列为生态环境建设、湿地保护以及粮食增产计划的重点发展地区。但因水资源匮乏带来的吉林省西部农业灌溉缺水的问题；松原城区、乾安、通榆、长岭四县城供水不足的问题；农村人畜饮水困难和湿地、泡塘和生态环境不断恶化等问题严重阻碍了该地区国民经济的发展。解决西部地区城乡人民生活用水需求和农业灌溉用水需求，已成为西部地区经济发展的关键问题。利用第二松花江水资源是解决这一地区缺水问题的最佳措施。总之，哈达山水利枢纽工程是基于下列需求而建设。

(1) 农业需求

国家粮食安全规划将东北的松嫩平原、三江平原列为国家粮食生产基地。松辽流域综合规划中，将松嫩平原、三江平原列为东北地区发展水稻生产的重点地区。国家增产千亿斤粮食规划分配给吉林省的粮食增产任务是75亿斤，其中稻谷增产任务为22亿斤。2008年，国家发展和改革委员会批复了《吉林省增产百亿斤商品粮能力建设总体规划》，吉林省提出的粮食增产目标为100亿斤，其中水稻增产目标为40亿斤。

《吉林省增产百亿斤商品粮能力建设总体规划》要求：吉林省将立足提高中部粮食生产核心区，主攻西部粮食生产后备区，稳定东部产粮区，以增产百亿斤粮食生产能力为目标，积极推进基础设施建设。在西部地区，通过引水工程建设，大面积改造中低产田，加快盐碱地治理，增加灌溉面积，充分发挥西部粮食增产的潜力，使粮食产量大幅度提高。为实现上述目标，必须解决吉林省西部地区缺水问题。

灌区内的大赉、红星、深井子等地是传统的牧业生产基地。早在建国初期，先后建立了大赉、红星、深井子等牧场，以饲养骡马为主，为农业生产的畜力需求作出过较大贡献，种植的的优质羊草不但满足了区域畜牧业生产需求，而且曾出口到国外。随着经济的发展及生产力水平的提高，各牧场从饲养骡马为主，逐步过度到以饲养牛羊为主，以满足人们对肉产品的需求。长期以来，牧区内草原没有得到合理的保护，草地超载放牧日益严重。现有单位面积载畜量为1.89个羊单位/ hm^2 ，是适宜载畜量0.6~0.7个羊单位/ hm^2 的3倍左右，过牧加速了草地的退化、沙化、盐碱化的进程。加之该地区干旱缺水，草原产草量逐年下降，草质变差，并出现大面积的盐碱荒漠，畜牧业发展已受到严重的制约。为了使草原生态向良性方向发展，需要进行天然草原灌溉。哈达山水库的建设可提供灌溉用水。

(2) 工业和生活用水需求

松原市作为新兴的石油化工城市，拥有中国石油吉林油田分公司、吉林石油集团有限责任公司、大唐长山热电厂等中央、省直属重要工矿企业，工业发展前景广阔。随着工业化、城镇化的快速发展，工业用水量将逐年增大。松原地区地下水资源量为 $12.39 \times 10^8 \text{m}^3$ ，可开采水量为 $9.41 \times 10^8 \text{m}^3$ 。预计到2025年城镇

生活和工业需水量将达到 $4.15 \times 10^8 \text{ m}^3$ ，农业灌溉需水量 $32.22 \times 10^8 \text{ m}^3$ 。同时还要保证农村人畜饮水安全，其有限的地下水资源供给将难以满足日益增长的用水需求。由此看出，水资源匮乏已经成为制约吉林西部工业经济持续增长的重要因素。而第二松花江水资源虽然较为丰富，但由于在其下游没有大型控制性枢纽工程，大量的地表径流水资源没有实现有效的开发和利用，地下水成为区域的主要工业水源。由于大量开采地下水和地域开采不平衡等原因，出现了明显的地下水位下降漏斗。因此，哈达山水库的建设是解决该地区缺水问题的重要途径。

2.2 工程建设

哈达山水利枢纽工程从设想到开工，差不多经历了一个世纪。早在清朝康熙年间，有人就设想在哈达山修建一条运河，把松花江水引到辽宁。上世纪初，孙中山先生在《建国方略》中，也曾设想在这里建造水利工程。中华人民共和国成立后，20世纪50年代到60年代，国家先后几次成立哈达山水利工程建设管理机构，多次组织人员进行勘测、规划和论证，做了大量而充分的前期技术准备工作，但都由于条件不具备，工程建设迟迟没有得以实施。1983年，水利部所属的“松花江辽河水利委员会”在松辽流域规划中，正式把哈达山水利枢纽工程列为“北水南调”的骨干工程。1994年国务院批复的《松花江辽河流域水资源综合利用规划》中，将“北水南调”工程列入向辽河流域调水的近期项目，计划于2010年前后实施。1995年，吉林省政府决定修建哈达山水利枢纽工程，并于1997年成立了哈达山水利枢纽工程筹建领导小组办公室，隶属于省水利厅。当时提出的设计方案是正常蓄水位150.9m，淹没耕地40万亩，移民20万人。2002年，水利部东北勘测设计研究院和吉林省水利水电勘测设计研究院联合编制完成了正常蓄水位145m方案的项目建议书。从1995年到2004年，对哈达山水利项目的研究及论证一直没有停止过。2005年10月19日，吉林省政府派出哈达山水利枢纽工程调查组到松原实地调研，提出按满足吉林西部地区的用水要求，确定工程规模，分期建设。一期工程按正常蓄水位140.1 m方案，利用现有的第二松花江堤防，把淹没范围控制在河道行洪区内，利用西部地区的湖泊、泡沼调节水量，最大限度减少淹没损失。二期工程根据松辽流域水资源综合规划确定的规模进行扩建。这一方案得到了吉林省政府的同意。同年10月25日，吉林省政府召开会议，专题研究哈达山水利枢纽工程建设有关问题。会议决定：一是鉴于省水利工程项目多，为调动和发挥地方政府积极性，确定松原市政府为哈达山水利枢纽工程的建设业主，并负责成立项目法人单位。二是在堤坝方案设计中，要考虑国家水利建设总体规划和未来可能再次启动“北水南调”工程，大坝设计要预留加高的可能和条件。三是省和松原市各相关部门要通力协作，加快工作进度。

2006年8月，吉林省水利水电勘测设计研究院完成了《哈达山水利枢纽工程（一期）项目建议书》的编制工作。

2006年10月，水利部水利水电规划总院完成对《哈达山水利枢纽工程（一期）项目建议书》的审查，并以水设总[2006]608号文《关于报送哈达山水利枢纽工程（一期）项目建议书审查意见的报告》上报了水利部。

2007年4月，水利部以水规计[2007]159号文《关于报送哈达山水利枢纽工程（一期）项目建议书审查意见的函》上报国家发展和改革委员会。

2007年6月，中国国际咨询公司完成了对《关于报送哈达山水利枢纽工程（一期）项目建议书》的咨询评估工作，并以《关于吉林省哈达山水利枢纽工程（一期）项目（建议书）的咨询评估报告》咨农水[2007]883号上报国家发展与改革委员会。

2007年8月，国家发展和改革委员会以发改农经[2007]2083号文《国家发展和改革委员会关于吉林省哈达山水利枢纽工程（一期）项目建议书的批复》批复了该工程的项目建议书。

受哈达山建设管理局的委托，吉林省水利水电勘测设计研究院依据项目建议书阶段的审查意见，2007年10月完成了《哈达山水利枢纽工程（一期）可行性研究报告》。

2007年11月，水利部水利水电规划总院完成对《哈达山水利枢纽工程（一期）可行性研究报告》的审查，并以水设总[2007]665号文《关于报送哈达山水利枢纽工程（一期）项目建议书审查意见的报告》上报了水利部。

2007年11月，水利部松辽水利委员会以松辽水政资[2007]246号文《关于哈达山水利枢纽工程（一期）

水资源论证报告书审查意见的函》对该工程的水资源论证报告进行了批复。

2007年12月，水利部以水规计[2007]519号文《关于报送哈达山水利枢纽工程（一期）可行性研究报告审查意见的函》上报国家发展和改革委员会。

2007年12月，国土资源部以国土资预审字[2007]345号文《关于吉林省哈达山水利枢纽工程（一期）建设用地预审意见的复函》对土地预审进行了批复。

2007年12月，水利部以水保[2007]540号文《关于哈达山水利枢纽工程（一期）水土保持方案的批复》对水土保持方案进行了批复。

2008年1月，吉林省人民政府以吉政函[2008]4号文《吉林省人民政府关于哈达山水利枢纽工程（一期）建设征地移民安置规划大纲的批复》对大纲进行了批复。

2008年1月，国家环境保护总局以环审[2008]12号文《关于哈达山水利枢纽工程（一期）环境影响报告书的批复》对环境影响报告书进行了批复。

2008年4月11日~16日中咨公司来吉林省对《可研报告》进行了咨询，6月4日《可研报告》通过国家发展和改革委员会主任办公会审查。同时，涉及工程建设移民征地工作进展顺利，完成工程管理区、料场、拌和站、施工道路等征地75公顷，完成库区、干渠、交叉建筑物移民征地实物调查和松原灌区开发规划前期调查工作。

2008年6月10日，哈达山水利枢纽工程正式开工。2009年10月31日，哈达山水利枢纽工程截流成功。这项以生活和工农业供水为主，结合生态环境保护供水、发电、防洪等综合利用的水利工程，是建国以来吉林省建设规模最大、投资最多的大型水利工程。

哈达山水利枢纽工程建成后，将使现有前郭灌区提水灌溉变为自流灌溉，每年节约电费约1200多万元。这项工程建成后，滔滔不息的松花江水将灌溉西部干涸的土地，为维护国家粮食安全长期发挥作用。哈达山水利枢纽工程还是一项再造秀美山川的生态工程。这项工程建成后，将明显缓解西部工农业和人民生活用水紧张状况，从根本上改善生产生活条件，改善生态环境，促进西部地区及全省经济可持续发展。

该工程建成后还可发挥一定的旅游功能。哈达山水利枢纽工程管理局，从工程开工之时就把哈达山水利枢纽工程列入了松原市乃至全省旅游目的地之一，他们聘请专业人员编制了《松原哈达山水利枢纽工程旅游发展策划报告》、《吉林省松原市哈达山景区建筑规划》，为工程竣工后的库区旅游事业奠定了基础。

松原地区是吉林省主要的氟病区，项目区内长岭县、乾安县、通榆县是重氟病区。前郭县及白城市的大安市是中氟病区，现有氟病村(屯)683个，病区人口44.6万人。工程建设后，引第二松花江水入松原地区改换水源，可以使该地区人群免除氟病威胁。

基于 GIS 方法的吉林省生态承载力动态分析

刘伟杰（中国科学院东北地理与农业生态研究所）

前言

随着经济的快速发展，我国的资源与环境也面临重大的问题，资源与环境的和谐是可持续发展的基础。可持续发展应该控制在一定的生态承载力供给范围之内，因此，研究区域生态承载力的供给情况、变化趋势以及空间格局分布，建立基于生态承载力基础上的环境规划、环境管理政策，确保人类生存环境健康和谐，具有很大的实践和理论意义。

本文运用生态足迹的基本理论，基于 GIS 方法，在利用净初级生产力（Net Primary Productivity, NPP）计算均衡因子的过程中，将本身即是栅格数据的 NPP 值进行空间运算，得到与 1 平方公里土地严格对应的均衡因子，从而将研究区生态承载力栅格化。然后，对 1990 年至 2007 年的吉林省生态承载力进行动态空间格局分析。结果表明：吉林省生态承载力中部最大，东部次之，西部最小；在从 1990 年到 2007 年的过程中，吉林省生态承载力呈现先减小后增加的趋势。

1. 研究区概况

吉林省地处东经122-131°、北纬41-46°之间，位于中国东北中部，属于温带大陆性季风气候，四季分明，雨热同季。面积18.7万平方公里，占全国面积2%，人口2700万人。全省拥有耕地面积557.84万 hm^2 ，园地面积11.56万 hm^2 、草地面积104.56万 hm^2 、其他农用地面积45.52万 hm^2 、建设用地面积104.98万 hm^2 。全省拥有林业用地面积932.7万 hm^2 ，森林面积827.8万 hm^2 ，活立木总蓄积量9.35亿 m^3 ，森林覆盖率达43.6%。全省拥有水资源总量为686.68亿 m^3 ，地表水资源量622.07亿 m^3 ，地下水资源量141.88亿 m^3 。

2. 研究方法

(1) 均衡因子的计算

某类生物生产性土地的均衡因子等于该类土地的平均生产力除以研究区域内所有各类土地的平均生产力，通过某类生物生产性土地的 NPP 除以这几种类型土地的平均 NPP 得到：

$$r_j = \sum NPP_j / NPP$$

式中， r_j ：不同土地类型的均衡因子； NPP_j 为某类生物生产性土地的 NPP， NPP 为这几类土地的世界平均的 NPP。

(2) 生态承载力栅格化

将下载的各年份 NPP 栅格数据用土地利用数据进行切割，得到的 NPP 栅格数据除以各土地类型的世界平均 NPP，得到各年份均衡因子的空间数据；根据下面的公式在 Arcmap 软件中进行做栅格乘法，乘以各土地类型的产量因子，再扣除 12%的生态多样性保护土地，则得到研究区各年份生态承载力的栅格数据。

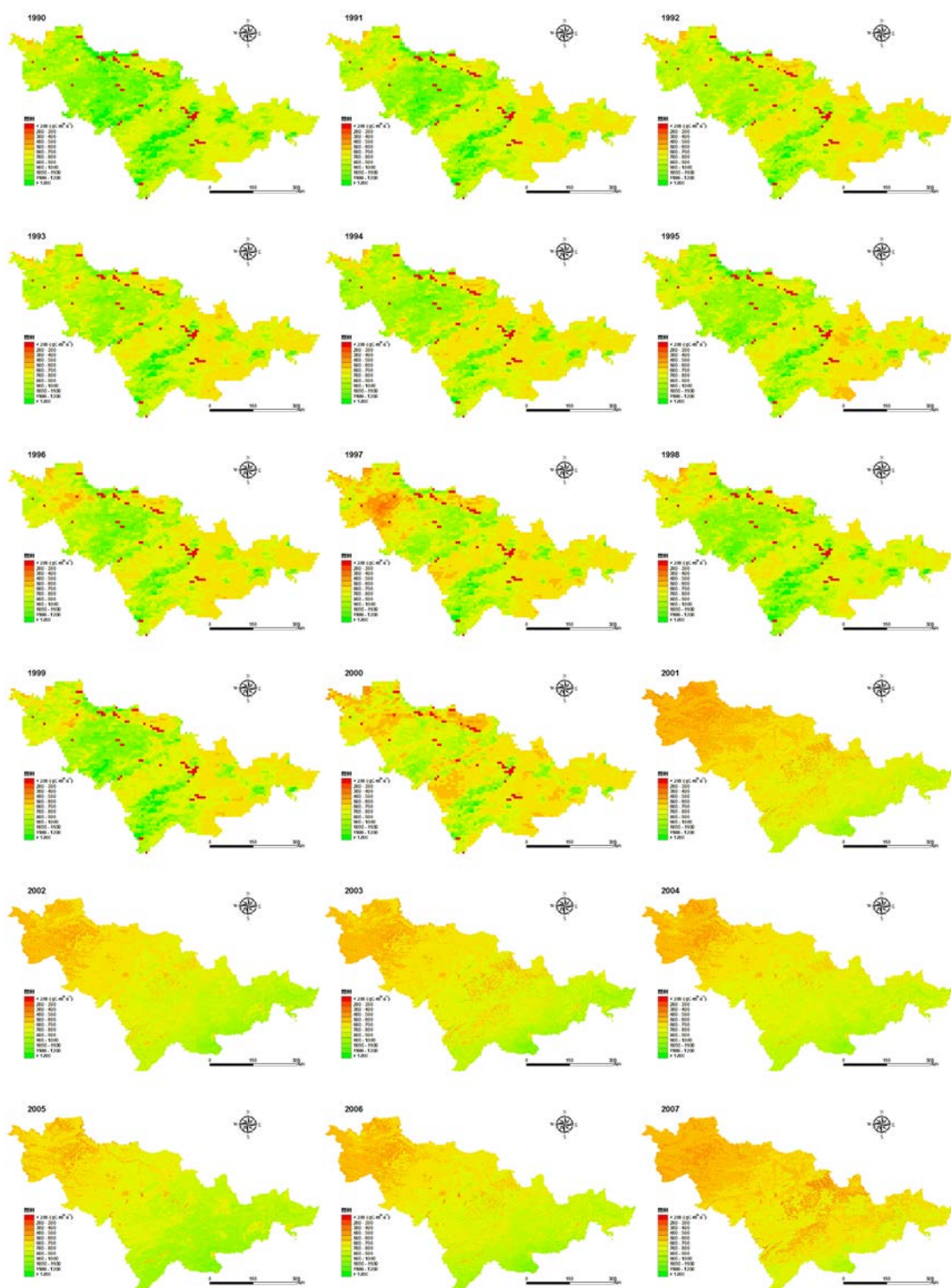
$$EC = N \times ec = N \times \sum a_j \times r_j \times y_j (j=1, 2, 3 \dots 6)$$

式中， EC ：区域总承载力； ec ：区域人均生态承载力； a_j ：某种人均生物生产性土地面积； r_j ：不同土地类型的均衡因子； y_j ：某种生产性土地的产量因子。

3. 数据来源与处理

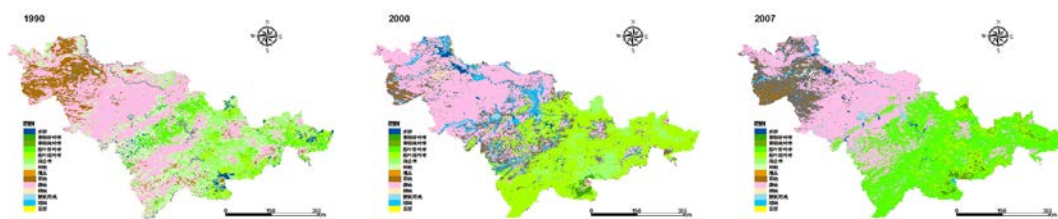
(1) 数据来源

1990-2000 年的 AVHRR GLOPEM NPP 数据(全球 NPP 数据,分辨率 1km)来源于美国马里兰大学(Prince & Small, 1990); MOD17A3 数据, 2001-2007 年的年均 NPP 数据。



第 1 图 1990-2007 年 NPP 数据

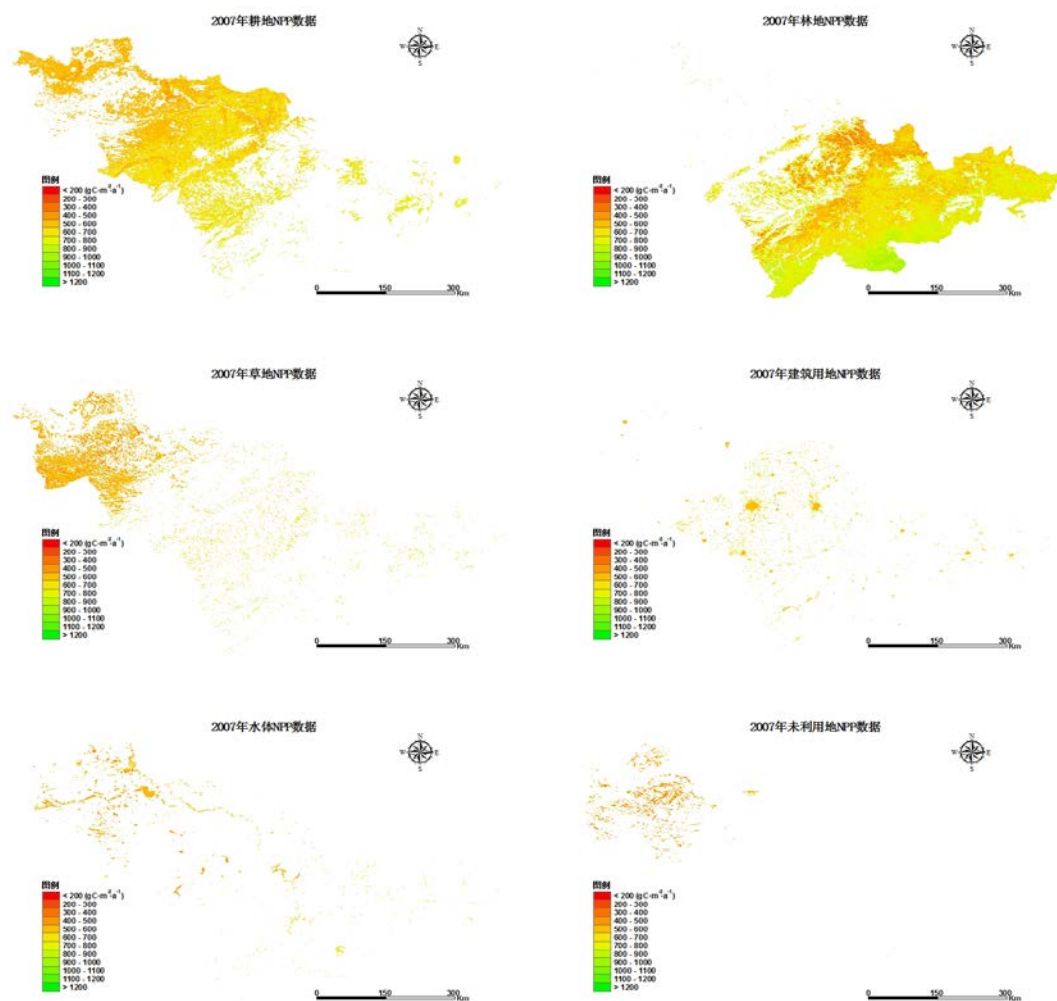
1990 年、2000 年和 2007 年土地分类数据,其中 1990 年土地分类数据来源于马里兰大学(Prince & Small, 1990) UMD Land Cover Classification, 分辨率为 1km; 吉林省边界数据。



第 2 图 1990 年、2000 年和 2007 年土地利用数据

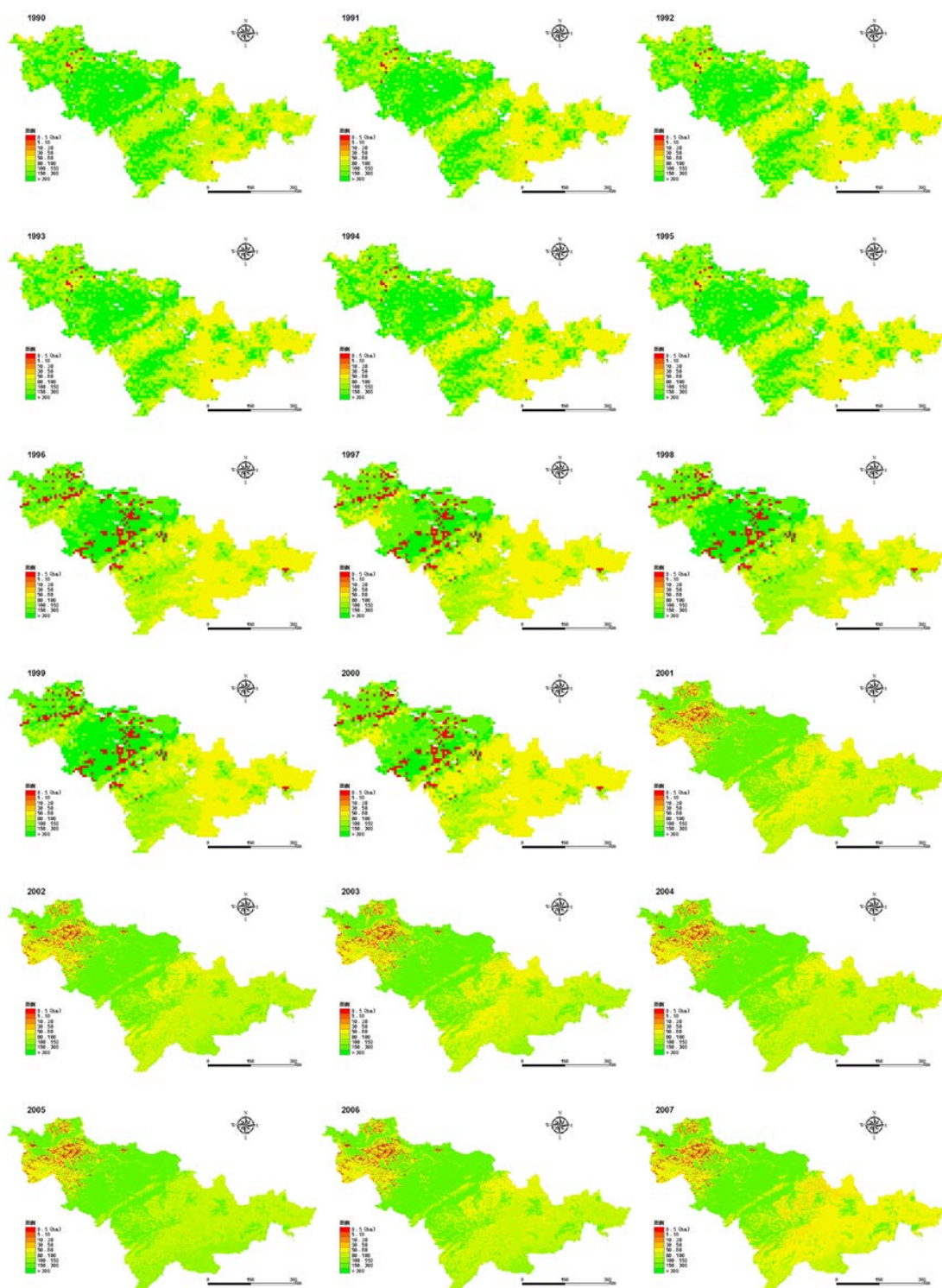
(2) 数据处理

首先，把 NPP 数据在 Arcgis 软件中用土地利用数据进行切割，每个年份的 NPP 数据都切割成 6 个部分（耕地、林地、草地、建筑用地、水体和未利用地）。



第 3 图 2007 年切割后的 NPP 数据

然后，每种土地类型的 NPP 数据通过栅格计算器功能，乘以各自的系数，变为该土地类型的生态承载力 (EC) 值栅格数据；最后，在 Arcgis 软件中，用 Mosaic 功能将各土地类型的 EC 栅格数据拼接起来，得到各年份吉林省的整体 EC 数据。



第 4 图 1990-2007 年吉林省生态承载力数据

4. 结论与存在的问题

- ① 吉林省生态承载力中部最大，东部次之，西部最小。
- ② 在从 1990 年到 2007 年的过程中，吉林省生态承载力呈现先减小后增加的趋势。
- ③ NPP 数据分辨率不同导致 2001 年前后视觉上的差异。
- ④ 只有 3 期土地利用数据导致生态承载力结果必然存在误差，如果有 5 期土地利用数据参与计算，则会大幅度降低误差。

参考文献

- Brown MT Ulgiati S: Emergy measures of carrying capacity to evaluate economic investments, *Population and Environment*, 2001, 22(5)
- C.Monfreda M.Wackernagel D.Deumling: Establishing national natural capital accounts based on detailed Ecological Footprint and biological capacity assessments, *Land Use Policy*, 2004, 21
- William Rees: Ecological footprints and appropriated carrying capacity: what urban economics leaves out, *Environment and Urbanization*, 1992, 4(2)
- 陈贻安: 关于人类发展的环境容量之思考, *生态学杂志*, 1995, 14(2)
- 陈劭锋 承载力: 从静态到动态的转变, *中国人口·资源与环境*, 2003, 13(1)
- 高 标 崔凤午: 吉林省生态足迹与生态承载力动态变化分析与预测研究, *水土保持研究*, 2012, 19(6)
- 刘某承 李文华: 基于净初级生产力的中国生态足迹均衡因子测算, *自然资源学报*, 2009, 24(9)
- 孟爱云 濮励杰: 城市生态系统承载能力初步研究——以江苏省吴江市为例, *自然资源学报*, 2006, 21(5)
- 夏 军 王中根 左其亭: 生态环境承载力的一种量化方法研究——以海河流域为例, *自然资源学报*, 2004, 19(6)
- 徐中民, 张志强, 程国栋等: 中国 1999 年生态足迹计算与发展能力分析, *应用生态学报*, 2003, 14(2)
- 赵先贵, 肖 玲, 马彩虹等: 基于生态足迹的可持续评价指标体系的构建, *中国农业科学*, 2006, 39(6)

吉林省松原市前ゴルロスモンゴル族自治県における馬頭琴音楽の普及と無形文化遺産代表リストへの登録

高橋健太郎（駒澤大学）

1. 無形文化遺産への関心の高まり

世界遺産に代表される有形の文化遺産のみならず、1990年代頃より、無形文化遺産への関心が世界的に高まっている。2003年には国際連合教育科学文化機関（以下、ユネスコ）の総会で「無形文化遺産の保護に関する条約」（以下、無形文化遺産保護条約）が採択され、無形文化遺産の保護と次世代への伝承に対する各国の取り組みが活発になっている（国末 2012、七海 2012）。中国は、2004年に無形文化遺産保護条約に批准し、また2011年に「中華人民共和国非物質文化遺産法」を公布し、無形文化遺産¹⁾の保護を進めている（李・唐 2010、周 2012）。

中国における無形文化遺産保護の取り組みの一環に、全面調査の実施と代表リストの作成がある（松山 2012）。国家、省、市、県などの各レベルの行政機関が無形文化遺産の代表リストを作成しており、国家レベルでは、2006、2008、2011、2014年の4回に渡って合計1,372件の無形文化遺産が登録されている²⁾。

中国における無形文化遺産の代表リストの空間分布の特徴について、程・凌（2013）はGISを用いて分析し、国家代表リストに登録されている地域は、北京市・天津市、および浙江省東部の2か所を核として主に東部沿海地区に分布していることを指摘した。しかし経済水準が比較的低い他地域では、第2、3回と登録時期が後になるにつれて、無形文化遺産の登録件数が増えていることも指摘されている。ここから、東部沿海地区以外では、より近年になって無形文化への関心が高まり、「遺産」としての保護活動や代表リストへの登録が進められていると考えられる。また、陳・陳（2010）は、2000年代以降の中国西部少数民族地区における無形文化遺産に関する研究をまとめ、少数民族の文化継承や少数民族地区の経済活性化にとって、無形文化遺産の保護は重要な役割を担っていることを考察した。また、中国の少数民族地区の地域性およびそこで生活する少数民族の無形文化遺産は多様であることから、さらなる研究の蓄積が必要であることも指摘した。

このような先行研究を受け、本稿では、吉林省松原（Songyuan）市前ゴルロス（郭爾羅斯）モンゴル族自治県（以下、前ゴルロス県）におけるモンゴル族の無形文化遺産の保護や普及、代表リストへの登録の実態を考察する。本稿のための地域調査は、科学研究費補助金（基盤研究（B）海外学術調査、課題番号24401035、研究代表者・京都大学小島泰雄）により、中国科学院東北地理・農業生態研究所の協力を得て、2013年8月16～27日に行なった。主な調査方法は、地方政府機関や民間の関係者への聞き取り、および博物館や資料館、図書館での資料収集である。

2. 松原市のモンゴル族

松原市は吉林省の北西部、松花江（Songhuajiang）上流の松嫩（Songneng）平原南部に位置する地区レベルの市（地級市）で、面積は約2.1万km²、総人口は288.0万人（2010年）である。吉林省の省都・長春（Changchun）市、四平（Siping）市、白城（Baicheng）市、内モンゴル自治区通遼（Tongliao）市、黒竜江省ハルビン市と隣接する（第1図）。

松原市は、寧江（Ningjiang）区、扶余（Fuyu）市、長嶺（Changling）県、乾安（Gan'an）県、前ゴルロス県の1区、1県級市（県レベルの市）、3県より構成される。市政府は寧江区にあるが、市街地は寧江区のみならず、隣接する前ゴルロス県にも広がっている。

松原市全体の民族別人口（2010年）は、総人口2,880,086人に対して、漢族が2,791,242人（96.9%）と大部分を占め、少数民族は、モンゴル族54,718人（1.9%）、満州族23,573人（0.8%）、回族6,754人（0.2%）、朝鮮族2,095人（0.1%未満）、シボ族1,061人（0.1%未満）などである。松原市でモン

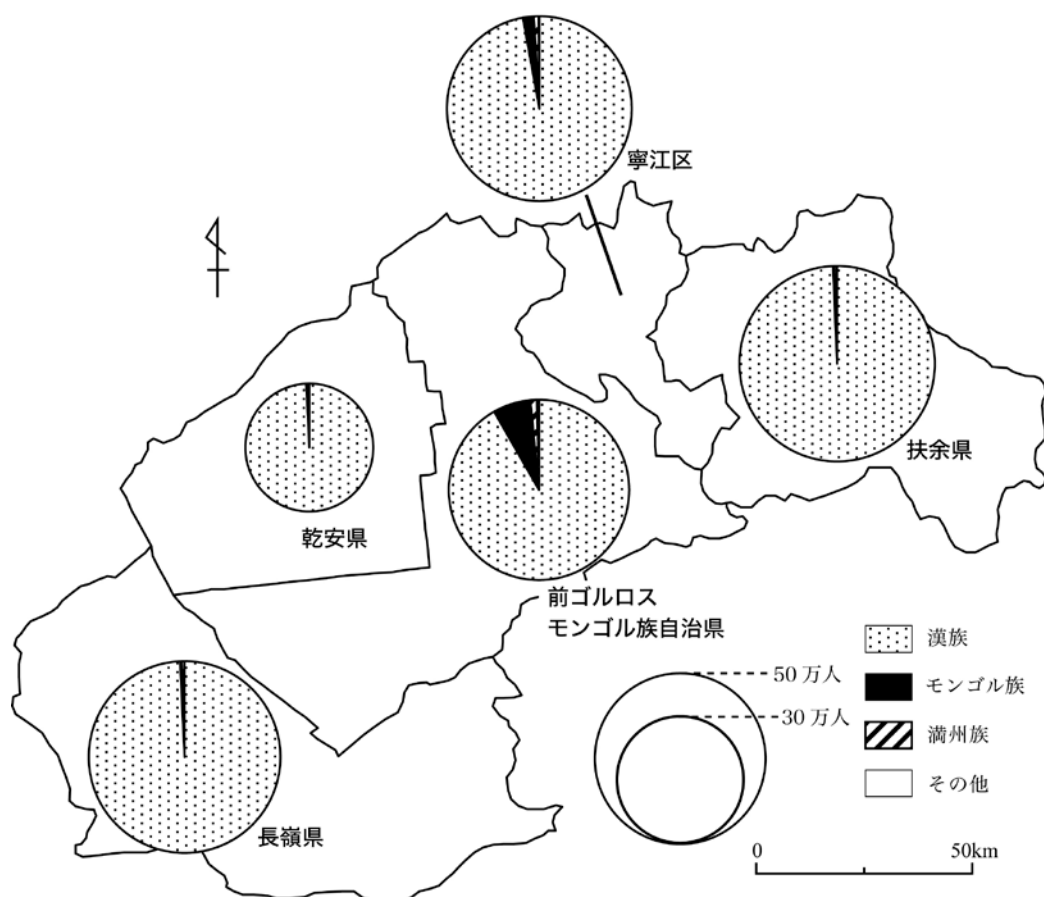
ギル族の人口が相対的に多い地域は、前ギルロス県であるが、モンギル族自治県であるにもかかわらず、その民族別人口の内訳は、県の総人口 607,640 人に対して、漢族 557,290 人で 91.7%を占め、少数民族は、モンギル族 41,133 人 (6.8%)、満州族 6,848 人 (1.1%)、その他民族 2,369 人 (0.4%) で (第 2 図)、モンギル族の人口はわずか 6.8%にすぎない。しかし、民族自治県であることから、モンギル族に対して一定の優遇があり、県共産党委員会 (以下、党委) の書記および県長がモンギル族から選ばれていたり³⁾、街なかの看板に中国語とともにモンギル語が併記されていたり (写真 1)、県内の学校でモンギル語教育が実施されている。

第1図 調査地域の概略図



写真 1 前ゴルロス県の看板表記

中国語に加えて、モンゴル語も併記されている。(2013年8月18日撮影)



第2図 松原市各地区の民族別人口（2010年）

資料：第6次人口センサス

なお、中国全体におけるモンゴル族の総人口（2010年）は5,981,840人であることから、松原市のモンゴル族人口はその0.9%にすぎない。それに対して、内モンゴル自治区のモンゴル族人口は4,226,093人で、中国全体のモンゴル族人口の70.6%を占める。

3. 松原市の無形文化遺産

松原市において無形文化遺産の保護を担当する政府機関である松原市文化館での聞き取り、および松原市文学芸術界連合会が管理・運営するウェブサイト「松原文化網」（<http://www.sywhw.org.cn>）によると、吉林省の無形文化遺産のなかで国家代表リストに登録されているものは41件あるが、そのうち松原市のものは10件ある（第1表）。これらはすべてモンゴル族が主に行なったり伝承しているもので、松原市のなかでも前ゴルロス県が申請地区（中国語では「申報地区」）である。そして、前ゴルロス県は、吉林省のなかでもっとも多くの無形文化遺産が国家代表リストに登録されている県である。ここから、松原市さらには吉林省の無形文化遺産において、前ゴルロス県のモンゴル族が重要な存在になっていると考えられる。次に、第1表にもとづいて、国家代表リストに登録されている前ゴルロス県の無形文化遺産を概説する。

ウルゲル（烏力格爾）とは、モンゴル族の講談の一種で、声音のみまたは弦楽器の伴奏とともに故事や叙事詩を語ったり歌ったりするものである。2006年に代表リストへ登録される際には、内モンゴル自治区通遼市ジャールト旗とホルチン右翼中旗、および遼寧省阜新モンゴル族自治県も、前ゴルロス県とともに登録された。

モンゴル族馬頭琴音楽は、内モンゴル自治区を申請地区として2006年の第1次国家代表リストに登

第1表 国家代表リストに登録されている松原市の無形文化遺産の一覧

名称	分類	登録年	申請地区
ウルゲル（烏力格爾）	曲芸	2006	前ゴルロス県
モンゴル族馬頭琴音楽	伝統音楽	2008	前ゴルロス県
モンゴル族四胡音楽	伝統音楽	2008	前ゴルロス県
ゴルロス・モンゴル族民謡	伝統音楽	2008	前ゴルロス県
モンゴル族婚姻習俗	民俗	2008	前ゴルロス県
ツァガンノール（查乾湖）冬漁習俗	民俗	2008	前ゴルロス県
長編故事『トクトホ』（陶克陶胡）	民間文学	2011	前ゴルロス県
馬頭琴製作技術	伝統技術	2011	前ゴルロス県
モンゴル族ツァガンサル（旧正月の習俗）	民俗	2011	前ゴルロス県
ブーの舞（博舞）	伝統舞踏	2014	前ゴルロス県

資料：松原市文化館提供資料および「松原文化網」ウェブサイト。

録されている。前ゴルロス県は2008年の第2次代表リストに追加登録された。なお、馬頭琴伝統音楽（the traditional music of the morin khuur）は、モンゴル国の申請により、すでに2003年にユネスコの「人類の口承と無形遺産の傑作」に登録され、2008年に「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」（以下、ユネスコ代表リスト）に統合された。

モンゴル族四胡音楽の「四胡」は弦楽器で、モンゴル語ではホーチルなどと呼ばれる。この無形文化遺産は、馬頭琴音楽と同様に、2006年に内モンゴル自治区を申請地区として第1次国家代表リストに登録され、前ゴルロス県は2008年の第2次代表リストに追加登録された。

ゴルロス・モンゴル族民謡（中国語では「民歌」）は、「モンゴル族民謡」の一部として2008年に代表リストに登録された。前ゴルロス県以外の申請地区は、内モンゴル自治区通遼市、オールドス市ハンギン旗、遼寧省阜新モンゴル族自治県である。ゴルロス・モンゴル族民謡は、1900年代初頭から1940年代に特に盛んになり、モンゴル語だけでなく中国語も取り入れられていることが特徴だそうである。

モンゴル族婚姻習俗は、内モンゴル自治区アルホルチン旗、西ウジムチン旗とともに、2008年に代表リストに登録された。前ゴルロス県のモンゴル族婚姻習俗には、婚礼の際の歌や音楽、儀礼、服装などに特徴があるという。

ツァガンノール（查乾湖）は前ゴルロス県北西部にある湖で、モンゴル語で「白い湖」や「聖なる湖」を意味する。モンゴル族は、冬季に氷結したこの湖の湖面で、儀礼をとまなう集団漁労を営む。これがツァガンノール冬漁習俗（中国語では「冬捕習俗」）として2008年に代表リストに登録された。この無形文化遺産の申請地区は前ゴルロス県のみである。

長編故事『トクトホ』（陶克陶胡）のトクトホ・タイジ（1864～1922）は、前ゴルロス県の前身であるゴルロス前旗出身で、漢人移民による草原の開墾を認めるモンゴルの王公と清朝に抵抗して挙兵した人物である。彼の故事は長編叙事詩となってモンゴル族に歌い継がれている。この無形文化は2011年に代表リストに登録され、その申請地区は前ゴルロス県のみである。

馬頭琴製作技術は、「民族楽器製作技術」の一つとして、2011 年に代表リストに登録された。他の申請地区と無形文化の名称は、北京市海淀区（宏音齊笙管製作技術）、内モンゴル自治区ホルチン右翼中旗（モンゴル族擦弦楽器製作技術）、上海市閔行区（上海民族楽器製作技術）、貴州省凱里市（ミャオ族芦笙製作技術）、雲南省臨滄市臨翔区（タイ族象脚鼓製作技術）である。内モンゴル自治区のモンゴル族擦弦楽器製作技術には、馬頭琴のみならず他の擦弦楽器も含まれている。

ツァガンサル（査乾薩日）は、モンゴル族の旧正月を祝う習俗である。この習俗には、火祭り、チンギス・ハーン祭礼、新月祈とう、祝宴などが含まれる。この習俗は、2011 年に「春節」（中国の旧正月）の民俗の一つとして代表リストに登録された。「春節」は、すでに 2006 年に、中国文化部（日本の文化庁に相当）によって、漢族や一部の少数民族の民俗として代表リストに登録されている。ツァガンサルはここに追加登録された。

ブーの舞（博舞）の「ブー」はモンゴル語でシャーマンを指し、ブーの舞とはモンゴル族のシャーマンが儀礼中に行なう舞踏のことである。単身の舞踏みならず、2 人、4 人、および集団での舞踏があるそうである。この伝統舞踏は、2014 年に代表リストに登録された。

無形文化遺産の代表リストへの登録がどのように行なわれているかについて、松原市文化館の担当者に聞き取りを行なった。それによると、習俗や伝統音楽、伝統技術などは、その歴史や特徴、実践されている地域の範囲等を把握、整理した後、まず前ゴルロス県の無形文化遺産代表リストへ登録される。その際、政府担当者や学者によって掘り起こされる無形文化も多いそうである。この機関においては、ある無形文化が「遺産」に相当するかどうかを考える際の基準は、その実践が、3 世代およそ 100 年間以上に渡って伝承されているかどうか、およびその実践や影響力の範囲が県域以上に広がっているかどうかとのことである。

習俗や伝統技術が無形文化遺産として前ゴルロス県の代表リストに登録された後は、松原市および吉林省の代表リストへの登録を申請する。そして、各政府の担当者や専門家委員会が認定したものが、市や省の代表リストに登録される。さらに、省の担当者が省の代表リストに登録されたもののなかから選び、国家代表リストへの登録を申請する。最終的には、国家代表リストは国务院より公布される。

前ゴルロス県のモンゴル族の無形文化が国家代表リストに多数登録されている理由について、松原市文化館の担当者は、前ゴルロス県にはモンゴル族の習俗や伝統音楽、伝統技術などが伝承されており「遺産」として価値があるものが多いことに加えて、松原市と前ゴルロス県の政府リーダーや担当者が無形文化遺産の掘り起こし（中国語で「挖掘」）や保護、代表リストへの申請に力を入れていることをあげた。そして、内モンゴル自治区をはじめ中国内にモンゴル族が居住する地域が多くあるなかで、それらの地方政府との間では、無形文化遺産の申請をどちらが先に行なうか一種の競争があるそうである。類似する習俗や伝統技術については、先に申請して国家レベルの無形文化遺産として認定された地域が、その保護や伝承のためのより手厚い支援を受けることができるそうである。

4. 前ゴルロス県における馬頭琴音楽の普及

(1) 学校教育のなかでの馬頭琴音楽の普及

松原市、特に前ゴルロス県におけるモンゴル族の無形文化遺産の保護や伝承について理解するために、馬頭琴の演奏や教育、楽器製作について聞き取りを行なった。馬頭琴は、その音楽がユネスコ代表リストや中国の無形文化遺産の国家代表リストに、また楽器の製作技術も中国の国家代表リストに登録されており、さらにモンゴル族の講談や民謡、儀礼中の音楽演奏などでも使用され、モンゴル族の無形文化遺産と深く結びついているため、事例として取り上げるのに適していると考えられる。

まず、馬頭琴音楽の子どもたちへの普及の状況を理解するために、幼稚園や学校で聞き取りを行なった。松原市の中心市街地には、ともに前ゴルロス県内にモンゴル族幼稚園、モンゴル族実験小学校、モンゴル族中学校が各 1 校ずつある。

前ゴルロス県モンゴル族幼稚園（写真 2、3）には約 400 人の児童がいるが、モンゴル族のみならず漢族や他民族の児童も通っている。幼稚園では、民族の別を問わず希望者を対象として、馬頭琴の演



写真2 前ゴルロスモンゴル族幼稚園の外観
(2013年8月22日撮影)



写真3 前ゴルロスモンゴル族幼稚園の入口
(2013年8月17日撮影)

奏やモンゴル族の民族舞踏を教えている。児童は、電子ピアノや美術、算数などの多くの習い事を選択肢の一つとして馬頭琴を習うそうである。

前ゴルロス県モンゴル族実験小学校では、各学年2クラス程度が、大半の授業をモンゴル語で行ない語学教科として中国語を習うクラス（蒙授班）だそうである。他のクラスでは、大半の授業は中国語で行なわれており、語学教科としてモンゴル語を学ぶクラス（加授班）もある。この小学校では、選択科目として、馬頭琴の演奏とモンゴル族の民族舞踏を学ぶことができる。受講生にはモンゴル族だけでなく、漢族やその他民族の生徒もいるそうである。

前ゴルロス県モンゴル族中学校には、初級中学校（略称「初中」、日本の中学校に相当）と高級中学校（略称「高中」、日本の高等学校に相当）の合計6学年があり、そのうち、「高中」の3学年にそれぞれ蒙授班があり、また「初中」と「高中」それぞれの学年に加授班がある。さらに、漢族と一部のモンゴル族の生徒ために、一般の学校と同様にすべて中国語で授業を行ないモンゴル語を学ばないクラスもある⁴⁾。この学校では、選択科目として馬頭琴を学ぶことができるそうである。また、生徒によるクラブ形式の馬頭琴の楽団があり、約100人が所属している。楽団のなかには漢族の生徒もいるそうである。

今回訪問できた教育機関は限られていたが、前ゴルロス県の幼稚園や学校においては、選択科目やクラブ形式で馬頭琴を学ぶ機会が提供されていることがわかった。なお、吉林省政府のウェブサイト⁵⁾によると、前ゴルロス県では、1998年に県内のモンゴル族小中学校に馬頭琴教育が導入され、2000年には16校の民族小中学校で馬頭琴音楽の選択科目が開設された。2004年には、各民族小中学校の教師として、馬頭琴を専門に学んだ音楽学校の卒業生13人を内モンゴル自治区から招聘した。また、前ゴルロス県の北西部にある查乾花（Chaganhua）鎮などの農村・草原地域では、都市部よりもモンゴル族の人口割合が高く、小中学校での馬頭琴の教育がより盛んに行なわれているそうである。

(2) 専門家による馬頭琴音楽の普及と伝承

松原市におけるより専門的な馬頭琴音楽の普及や伝承について理解するため、職業として馬頭琴音楽の演奏と教育に携わっている薩仁満都拉（サラン・マンドラ）氏に聞き取りをした（写真4）。満都拉氏は前ゴルロス県公設の前ゴルロス民族歌舞団の団員で馬頭琴とホーミー（呼麦）を演じており、また個人で馬頭琴教室を主宰している。ホーミーとは、モンゴル族に伝わる喉を用いた歌唱法である。

「モンゴル族ホーミー」は、内モンゴル自治区を申請地区として、2006年に無形文化遺産の国家代表リストに登録された。また、中国の申請により、2009年には「モンゴルの歌唱芸術ホーミー」（Mongolian art of singing: khoomei）として、ユネスコ代表リストに登録された。なお、吉林省においては、ホーミーは、2012年に前ゴルロス県を申請地区として省代表リストに登録されている。

満都拉氏は1985年生まれ、内モンゴル自治区赤峰市出身のモンゴル族で、2006年より前ゴルロス民族歌舞団に所属し演奏している。自身の馬頭琴教室には約50人の生徒がおり、年齢層は多様で小学生から60歳代までいる。生徒にはモンゴル族のみならず漢族もおり、なかには夏休みを利用して香港から馬頭琴を学びに来た漢族の小学生もいたそうである。聞き取りによると、調査地域においては、馬頭琴を学ぶことはバイオリンやピアノなど他の楽器を学ぶことと同列の選択肢のなかにあり、民族の区別なく学びに来るそうである。なお、氏の収入は、主に前ゴルロス民族歌舞団に所属し演奏することによって得ているようで、無形文化遺産の普及や伝承に関わる人の経済的基盤として、公的機関による支持が重要であることが見受けられた。

馬頭琴音楽の普及や伝承においては、馬頭琴という楽器が安定的に生産、供給されることも重要である。そのため、前ゴルロス県においてゴルロス民族楽器廠という工房を開設し（写真5、6）、馬頭琴を製作、販売している白蘇古郎（ヴァイスグラン）氏に聞き取りをした。白蘇古郎氏は1982年生まれ、内モンゴル自治区フルンボイル市出身のモンゴル族で、2000年より内モンゴル自治区の首府・フフホト市で馬頭琴製作の修行をはじめ、2006年に前ゴルロス県に来て、馬頭琴製作の工房を開設した。氏の知る限りでは、吉林省内に馬頭琴製作の工房は他にはないそうである。調査時現在、工房で馬頭琴を製作している職人は、白蘇古郎氏および60歳代と40歳代のモンゴル族男性の3人である。



写真4 馬頭琴を演奏する満都拉氏(右) (2013年8月20日撮影)



写真5 ゴルロス民族楽器廠の外観
(2013年8月19日撮影)



写真6 工房で展示されている馬頭琴
(2013年8月24日撮影)

馬頭琴の製作技術は、専門学校など教育機関ではなく工房に弟子入りして学ぶことが一般的だそうである。氏の工房にも、これまでに数人が馬頭琴の製作技術を学びに来たことがあり、そのなかには漢族の人もいた。氏は、モンゴル族に限らず、他民族の人でも弟子として受け入れる方針とのことである。その理由は、どの民族であるかにかかわらず、馬頭琴の演奏や製作には熱意と素質があれば誰が関わってもよく、また馬頭琴をモンゴル族のなかにとどめると、演奏者や楽器製作者の数が減少してゆき、将来的に発展の余地が縮小していくと考えているからである。

中国全体のモンゴル族人口に対して前ゴルロス県のモンゴル族人口の割合は 1%未満と少ないにもかかわらず、前ゴルロス県の馬頭琴音楽は内モンゴル自治区とともに無形文化遺産の国家代表リストに登録されていたり、馬頭琴製作技術も前ゴルロス県を申請地区として国家代表リストに登録されている。白蘇古郎氏は内モンゴル自治区の出身で、自治区内で馬頭琴の製作技術を修行した後に前ゴルロス県に転居してきたことから、内モンゴル自治区と前ゴルロス県とを比較できる立場にあると考え、前ゴルロス県の馬頭琴が無形文化遺産として国家代表リストに登録された理由を尋ねた。

白蘇古郎氏によると、前ゴルロス県は、1990 年代という比較的早くから政府が馬頭琴音楽の教育や普及に努めていることが特徴的であるという。前ゴルロス県では、幼稚園から高等学校までの教育機関で馬頭琴を学ぶ体制が整っており、実際に馬頭琴を学んでいる人が多い。また、馬頭琴の教師や演奏者を内モンゴル自治区から招聘するなど、政府リーダーが馬頭琴などのモンゴル族文化の保護や伝承に積極的である。これらの点が評価されて、前ゴルロス県の馬頭琴は国家代表リストに登録されたと考えられるとのことである。

(3) 政府リーダーによる馬頭琴音楽の普及

現地での聞き取りにおいて、前ゴルロス県における馬頭琴音楽の普及に積極的に取り組んでいる政府リーダーとして、しばしば阿汝汗（アルハーン）氏の名があげられた。政府高官である氏には聞き取りができなかったため、新聞報道やウェブサイトで公開されている情報をもとに、氏が前ゴルロス県における馬頭琴音楽の普及にどのように取り組んだのかをまとめた。

複数のウェブサイト⁶⁾の情報によると、阿汝汗氏は 1957 年生まれ、吉林省白城市出身のモンゴル族である。1980 年代より前ゴルロス県政府の各部署で勤務し、2001～2005 年に前ゴルロス県長、2005～2007 年に前ゴルロス県党委書記、2007～2013 年に松原市党委の常務委員や広報部長、副市長を務めた。2013 年より吉林省党委の民族事務委員会主任と省宗教事務局の局長である。民族事務委員会とは党委において少数民族関連を担当する部署で、宗教事務局とは行政において宗教関連を担当する部署である。両者は業務の重複が多く、役職が兼任されることがある。

阿汝汗氏は、自身が作詞家、作曲家でもあり、モンゴルの草原やそこでの人々の暮らしなどを題材とした曲を作成しており、それらの曲は馬頭琴で演奏されたり、モンゴル族の歌手によって歌われている⁷⁾。このようなこともあり、阿汝汗氏は前ゴルロス県と松原市に勤務していた期間、馬頭琴音楽をはじめとするモンゴル族の無形文化遺産の保護や普及に積極的であった。新聞報道（人民日報海外版、2008 年 7 月 18 日版第 2 面）によると⁸⁾、前ゴルロス県では 1990 年代末から学校での馬頭琴音楽の教育に力を入れていたが、教師不足になった。その際、前ゴルロス県党委書記であった阿汝汗氏が自ら内モンゴル自治区や吉林省他地域を回り、2 回に渡って合計 26 人の馬頭琴教師を前ゴルロス県に招聘した。そして、それらの教師に正規の職位を与え厚遇した。そのため、それらの教師は前ゴルロス県に留まり、県の馬頭琴教育を推進する基礎となったそうである。これらの点は、先述の関係者への聞き取りでも確認できた。

また、複数のウェブサイト⁹⁾の情報、およびゴルロス博物館で収集した資料によると、氏が前ゴルロス県党委書記を勤めていた 2006 年 9 月、前ゴルロス県成立 50 周年の祝賀大会において総勢 1,199 人で馬頭琴を同時演奏し、馬頭琴演奏で最大規模、最多人数としてギネス世界記録（ギネスブック）に登録された。またこれと同じ場で、学校での馬頭琴の普及などが評価され、前ゴルロス県は中国民族管弦楽学会によって「中国馬頭琴の郷」と認定された（写真 7）。この学会によって「中国馬頭琴の

郷」と認定された地域は前ゴルロス県が唯一である¹⁰⁾。さらに、2008年7月には、北京オリンピックの聖火リレーが前ゴルロス県を通過するイベントにあわせて、総勢2,008人で馬頭琴を同時演奏し、ギネス世界記録を塗り替えた（写真8）。

無形文化遺産の代表リストへの登録申請は地方政府が行なうことから、当該政府のリーダーの理解と協力は重要な意味を持つと考えられる。前ゴルロス県においては、県の党委書記などを歴任した阿汝汗氏が、外部地域から人材を招聘し、馬頭琴等のモンゴル族文化の保護と普及に積極的であったことが確認できた。また、専門的な学会やギネス世界記録など外部組織によって馬頭琴に関する認定を受け、地域の取り組みの知名度を上げたり権威を高めたりすることも行なわれたことがわかった。



写真7 馬頭琴工房に展示された「中国馬頭琴の郷」パネル授与式の様子

2006年9月の前ゴルロス県成立50周年記念の祝賀大会での一コマ。写真右が阿汝汗氏で、中央は当時の中国民族管弦楽学会の会長（2013年8月24日ゴルロス民族楽器廠にて撮影）。



写真8 博物館に展示されたギネス世界記録の証明書

2008年7月、前ゴルロス県にて2008人で世界最大規模の馬頭琴演奏が行なわれたことを証明するもの。右が中国語版で、左が英語版（2013年8月18日ゴルロス博物館にて撮影）。

5. おわりに

ユネスコ総会での無形文化遺産保護条約の採択（2003年）に前後して世界的に無形文化遺産に関心が高まるなか、中国でも代表リストが作成されるなど、無形文化遺産の保護や伝承が盛んに取り組まれている。前ゴルロス県のモンゴル族は「自治県」においても少数民族の立場にあるが、馬頭琴をはじめとする音楽や文学、習俗の多くが国家や省の無形文化遺産となり、保護や普及、次世代への伝承が支援される存在となった。本稿では、馬頭琴を例に、無形文化遺産の代表リストへの登録が成功した背景として、学校教育のなかでの普及、政府リーダーや担当者の積極的な関与、外部人材の活用などがあったことを考察した。

前ゴルロス県の馬頭琴教育を紹介した先述の人民日報の記事には、前ゴルロス県の無形文化遺産担当者の話として、かつて繁栄していたモンゴル族の文化や芸術は文化大革命期に破壊されたため、当時は県内に馬頭琴は五つしかなくなり、馬頭琴を弾ける人はほとんどいなくなったとも書かれている。ここから考えると、改革開放以降の約30年間で、前ゴルロス県の馬頭琴音楽の演奏者数は回復しつつあり、さらにモンゴル族以外の漢族などにも演奏者を増やしているといえる。馬頭琴音楽と楽器製作技術の国家代表リストへの登録により、この傾向はさらに強まっていると考えられる。

しかし、このような傾向に対する危惧も存在する。一つは、馬頭琴音楽そのものに関するもので（通拉嘎 2013）、現代の馬頭琴音楽が芸術性と専門性を高めるなかで、モンゴル族文化の一部分という性

格が薄れているのではないかという主張である。ユネスコの無形文化遺産制度には当該民族の伝統文化の保護や伝承を促すという意図があるが、馬頭琴音楽の発展はそれとは異なる方向に向かっているのではないかということである。

この点については前ゴルロス県においても確認でき、モンゴル族に限らず漢族など他民族の人も、馬頭琴を演奏したり楽器の製作を学んでいる。また、馬頭琴音楽をモンゴル族のなかのみに留めなくて、興味のある人に広く普及してゆくべきだという意見も聞かれた。ユネスコや中国の無形文化遺産制度の理念を踏まえた上で、この現状をどう考えたらよいのか、今後の研究課題といえる。

また、モンゴル族文化の次世代への伝承という点については、前ゴルロス県においては、馬頭琴は盛んに演奏されているかもしれないが、モンゴル語を使うことができないモンゴル族が増えていることが指摘されている（欧登草娃 2014）。中国においてより有利に進学や就職をするために、モンゴル族学校ではなく一般の学校へ進学したり、中国語を身につけることを重視する人が増えている。その結果、前ゴルロス県では、モンゴル族の地域社会や家庭内においても次第にモンゴル語が使われなくなっているという。

この点は筆者の聞き取りにおいても確認でき、何人ものモンゴル族インフォーマントが、前ゴルロス県の都市部ではモンゴル語を使う機会は少なく、モンゴル語が話せないモンゴル族が増えていると言った。あるモンゴル族の30歳代女性の家族では、この女性の両親はモンゴル語しか話せず、子どもは中国語しか話せないで、祖父母と孫の間で会話ができないそうである。このようなモンゴル族の母語喪失が今後も続くならば、無形文化遺産となっているモンゴル族の講談や民謡、台詞をともしなう儀礼、馬頭琴音楽に合わせた詠唱などは伝承が困難になることが考えられる。中国少数民族の母語喪失は、モンゴル族のみならず、ウイグル族やチベット族など他民族でも発生していることから、今後に関心を寄せるべき研究テーマである。

謝辞

本稿の地域調査に際しては、前ゴルロス県で馬頭琴などモンゴル族文化の普及と伝承に関わる多くの方々に聞き取りにご協力いただいた。また、中国科学院東北地理・農業生態研究所の先生方には調査の補助をしていただきお世話になった。記して感謝いたします。

注

- 1) 中国では、ユネスコのいう無形文化遺産 (intangible cultural heritage) に相当する語として「非物質文化遺産」が使用されているが、本稿では、表記が混乱することを避けるため、固有名詞以外は「無形文化遺産」の語を使用する。
- 2) 中国の無形文化遺産のリストについては、中国文化部が管理・運営するウェブサイト「中国非物質文化遺産網・中国非物質文化遺産数字博物館」(<http://www.ihchina.cn>)、および中国国務院発行の公文書などを参照した。
- 3) 前ゴルロス県政府のウェブサイトによると、2015年2月現在、前ゴルロス県党委書記と県長はモンゴル族で、7人の副県長のうち1人はモンゴル族、他の6人は漢族である。なお、中国の各行政地域においては、党委書記がその地域の実質的な最高指導者である。
- 4) 前ゴルロス県モンゴル族中学校のカリキュラムについては、聞き取りに加えて、欧登草娃 (2014) を参照した。なお、「高中」のみに蒙授班がある理由は、「初中」まで農村部のモンゴル族学校でモンゴル語による教育を受けていた生徒が、「高中」から都市にあるこの学校に進学してくるためである。
- 5) 前郭県馬頭琴文化発展背景与現状 (吉林省政府ウェブサイト、2014年4月8日掲載)。http://www.jl.gov.cn/shfz/wh_shfz/whycbh/201404/t20140408_1643143.html。(最終閲覧: 2015年2月28日)
- 6) 「阿汝汗任吉林省委 (省宗教局) 主任 (局長)」(中華人民共和国国家民族事務委員会ウェブサイト、2013年4月2日掲載)。http://www.seac.gov.cn/art/2013/4/2/art_3980_180593.html (最終閲覧: 2015年2月28日)。「松原市人民政府副市長阿汝汗簡介」(中国網河南頻道ウェブサイト、2012年9月21日)

- 掲載) <http://henan.china.com.cn/news/china/201209/387504LGFA.html> (最終閲覧: 2015 年 2 月 28 日) .
- 7) 阿汝汗氏の曲を紹介するウェブページは多く存在し、なかには「阿汝汗創作歌曲専区」(http://www.songjunwang.com/index_arhzq.shtml) という、阿汝汗氏の曲をもつぱらに紹介するウェブサイトも存在する。また、「中国原創音楽基地 5SING」というウェブサイト(<http://5sing.kugou.com/8115114>) では、阿汝汗が作詞、作曲した曲を合計 207 曲 (2015 年 2 月 28 日現在) 聴くことができる。
- 8) 例えば、「前郭県 1199 人合奏馬頭琴創“吉尼斯”世界記録」(新浪新聞中心、2006 年 9 月 2 日掲載) <http://news.sina.com.cn/c/2006-09-02/01379913818s.shtml> (最終閲覧: 2015 年 2 月 28 日) . 「前郭爾羅斯的馬頭琴」(松俊網、2012 年 6 月 5 日掲載) <http://www.songjunwang.com/zh/mtqzq/mtqwh/info/14125/2012-06-05.shtml> (最終閲覧: 2015 年 2 月 28 日) .
- 9) 中国民族管弦楽学会ウェブサイト (<http://www.folkmusic.org.cn>) の 1986 年以降の年代記による。
- 10) 人民日報海外版、2008 年 7 月 18 日版第 2 面. http://paper.people.com.cn/rmrbhwb/html/2008-07/18/content_61298.htm (最終閲覧: 2015 年 2 月 28 日) .

参考文献

- 国末憲人 2012. 『ユネスコ「無形文化遺産」—生きている遺産を歩く—』平凡社.
- 周 超 2012. 日中無形文化財保護法の比較研究. 文明 21 29:43-53.
- 七海ゆみ子 2012. 『無形文化遺産とは何か—ユネスコの無形文化遺産を新たな視点で解説する本—』彩流社.
- 松山直子 2012. 東アジアの無形文化財保護制度における伝統的工芸技術の登録状況—日本・中国・韓国の国家級一覧表から—. 無形文化遺産研究報告 6: 37-53.
- 陳 煒・陳 能幸 2010. 近十年来中国西部民族地区非物質文化遺産保護研究述評. 原生態民族文化學刊 2(1): 96-102.
- 程 乾・凌 素培 2013. 中国非物質文化遺産的空間分布特征及影響因素分析. 地理科学 33(10): 1166-1172.
- 吉林省第六次人口普查領導小組弁公室・吉林省統計局編 2012. 『吉林省 2010 年人口普查資料(上冊)』. 中国統計出版社.
- 李 榮啓・唐 驊 2010. 新世紀我国非物質文化遺産の保護与伝承. 広西民族研究 2010(1): 194-201.
- 欧登草娃 2014. 蒙古族双語教育实践与教育選択—前郭爾羅斯蒙古族自治县蒙古族中学的個案研究—. 西南民族大学学報(人文社会科学版) 2014(2): 15-20.
- 通拉嘎 2009. 繁荣与隱憂—談馬頭琴作為非物質文化遺産的保護与伝承—. 内蒙古大学芸術学院学報 6(4): 5-9.

吉林省松原市自然经济现状与发展规划

刘志明（东北师范大学地理科学学院）

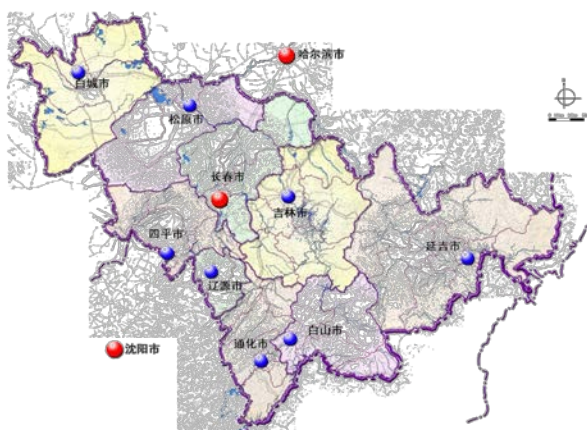
前言

自然地理背景是一个城市得以发展的基础。从自然地理背景角度,分析吉林省松原市城市发展中地理区位条件要素上的优势。按照市域、城市规划区与中心城区三个空间层次,对松原市城镇化体系,城市发展,中心城区的规划,城市绿地景观以及城市休闲娱乐、文化教育等发展进行论述,并展示了松原市生态经济区总体布局与地域划分。

1. 松原市自然格局

1.1 区位特点

松原市位于吉林省中西部,介于东经 $123^{\circ} 6'$ 至 $126^{\circ} 11'$, 北纬 $43^{\circ} 59'$ 至 $45^{\circ} 32'$ 之间,东西长 240 公里,南北宽 172.4 公里,总幅员面积 22034 平方公里。南与长春、四平市为邻,西与白城市、内蒙古接壤,北隔松花江与黑龙江省相望。松原市地处松嫩平原,地势平坦开阔,起伏和缓。地形主要由冲击平原、松辽分水岭台地平原组成,海拔高度在 130 米至 266 米之间。总人口 280.8 万,其中市区人口 55 万,有汉、满、蒙、回、朝等 31 个民族。



第 1 图 松原市地理区位图

上世纪初,伟大的革命先行者孙中山先生在著名的《建国方略》中,曾设想在松嫩两江交汇处,建一座称之为“东镇”的中枢城。而今,中山先生夙愿变成现实,1992 年 6 月,国务院批准,在中山先生称“东镇”之地建立地级市 - 松原。松原市辖 1 个市辖区、3 个县和 1 个自治县。即宁江区、长岭县、扶余县、乾安县和前郭尔罗斯蒙古族自治县。13 个街道 40 个镇 38 个乡 96 个社区 1140 个村。



第 2 图 松原市市域范围图

1.2 自然资源

松原资源丰富，风光秀丽。资源富集，特产富饶。松原幅员辽阔，地上地下资源富集，素有“粮仓、肉库、渔乡、油海”之美誉。资源特点可以用“一黑、一黄、一绿、一白”来概括。

一黑：地下有以石油为主的丰富的矿产资源，其中石油总储量达 26 亿吨，天然气储量 185 亿立方米，油母页岩储量 80 亿吨，中国陆上第六大油田—吉林油田就坐落在松原。

一黄：松原地处世界黄金玉米带上，是全国重要的商品粮基地。主要农作物有玉米、大豆、水稻、高粱、葵花、花生、黄烟、大蒜以及药材等。每年仅玉米产量就达 400 多万吨，人均生产粮食居吉林省第一位。

一绿：松原地处世界三大草原之一的科尔沁草原和松嫩平原的交汇处，是欧亚草原带延伸的东端，也是吉林省草原比较集中、面积较大的地区之一，全市有草原面积 53 万公顷。

一白：境内有“三江、一河、一湖”（第一松花江、第二松花江、嫩江、拉林河、查干湖），江河总径流量 398 亿立方米，总流域面积 8012 平方公里，有可养鱼水面 100 万亩。

松原历史悠久，文化灿烂，远在七千年前，这里就有人类繁衍生息。这里满蒙文化交相辉映，松原旅游资源丰富。有众多古遗址、古墓葬等文化古迹，还有查干湖、三江口、泥林、大草原等别具特色的自然景观。松原交通便利，京哈、京齐、长白、通让四条铁路穿越境内，与明沈、京哈、科铁、珲乌、长白等国省级公路干线形成贯穿东西南北的交通网络。特别是长哈高速公路和投资 8.7 亿元建设的松原至肇源人桥，使松原成为联结哈尔滨、大庆、长春、沈阳的重要交通枢纽和物流中心。



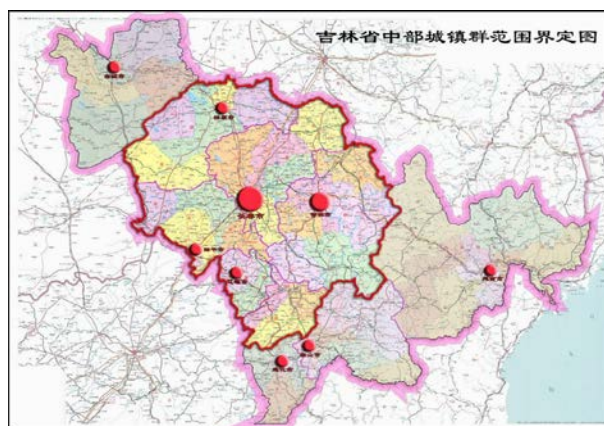
第 3 图 松原市交通图

松原市属中温带大陆性季风气候区。春季干旱少雨，升温较快；夏季炎热，降水集中；秋季凉爽，变温快，温差大，天气晴好；冬季漫长，降雪量小，寒冷干燥。年平均气温 4.5℃，低温出现在一月，最低气温-36.1℃；高温出现在七月，最高气温 36.9℃。年平均日照 2879.8 小时，无霜期 135~140 天。年降水量在 400 毫米至 500 毫米之间，多集中在七、八月份。这两个月的降水量约占全年降水量的三分之二。春季多风，春夏秋三季以西南风为主，冬季则多刮西北风，年平均风速为 3.4 米/秒。松原市内江河纵横，泡沼众多，尤以三江一河一湖而闻名。松花江(又称第一松花江)，始于第二松花江与嫩江汇合处，沿市北境东流注入黑龙江，境内流长 120 公里，流经扶余县的 8 个乡镇，区间流域面积 2229 平方公里。第二松花江源自于长白山天池，是吉林省第一大江。从市东南陶赖昭镇入境，穿越市中心向西而北折，与嫩江汇合后注入松花江。境内流长 188 公里，流经扶余、前郭两县和宁江区的 13 个乡镇，区间流域面积 1332 平方公里。嫩江源于大兴安岭伊勒呼里山，从市西北部入境，东流与第二松花江汇合后注入松花江，市内流长 61.7 公里，流经前郭县 2 个乡镇，区间流域面积 1800 平方公里，河道切割深，多沟槽支叉。拉林河为松花江右侧支流，源于敦化县境内的别石拉子山，从市东部入境，北流汇入松花江，境内流长 84 公里，流经扶余 5 个乡镇，区间流域面积 1081.86 平方公里。查干湖位于前郭尔罗斯蒙古族自治县西北

部，是全国十大淡水湖之一，湖水面积 259 平方公里，蓄水 6 亿多立方米，芦苇面积 3.6 万公顷。

1.3 社会经济状况

松原市处于长哈经济带中间，是吉林、黑龙江、内蒙古三省区的结合部，是规划中的吉林省中部城市群之一。下图为吉林省中部城市群范围界定图。



第 4 图 吉林省中部城市群范围界定图

2013 年，松原市实现地区生产总值 1650.5 亿元，按可比价格计算，比上年增长 8.2%。其中，实现第一产业增加值 265.2 亿元，增长 4.1%；实现第二产业增加值 784.1 亿元，增长 6.6%；实现第三产业增加值 601.2 亿元，增长 12.9%。松原市人均 GDP 达到 57635 元，比上年增长 4.5%。三次产业结构比例由上年 15.9:48.6:35.5 调整为 16.1:47.5:36.4。综合经济实力已位居吉林省第三位。城镇居民人均可支配收入和农民人均纯收入分别达到 25500 元和 9800 元。三次产业构成为 16.1:47.5:36.4。恩格尔系数(Engel's Coefficient) 25.4%。

2013 年末，松原市小学 723 所，招生 2.71 万人，在校生 15.95 万人。初中 128 所，招生 2.4 万人，在校生 6.66 万人。普通高中学校 18 所，招生 1.6 万人，在校生 4.65 万人。中等职业教育学校（机构）20 所，招生 0.25 万人，在校生 0.86 万人，毕业生 0.23 万人，其中获得职业技术证书的人数为 0.12 万人。学前教育机构 856 个，其中独立设置幼儿园 341 所，入园（班）幼儿为 3.18 万人，在园（班）幼儿为 4.44 万人。特殊教育学校 2 所，在校生 103 人。2013 年末，各级各类民办学校 8 所，在校生 0.3 万人。

截至 2013 年末，松原市共有 13 个文物管理机构，其中博物馆 8 个，藏品 1.6 万件；文物管理所 5 个，藏品 395 件；图书馆 5 个，总图书藏量 66.8 万册，新书 4.2 万册；群众艺术馆（文化馆）7 个；文化馆站 78 个。

松原市在中国东北区域 41 座城市经济增长最快的 10 座城市排名榜单中高居首位。经济总量位居全省第三，中国陆地第六大高产油田—吉林油田就在松原市。入选“2006 跨国公司眼中最具投资潜力的中国城市”（排名第 19 位）。与包头、呼和浩特、鄂尔多斯一起被称为“中国北方经济增长四小龙”。2006 年，松原市入选 2006 跨国公司眼中最具投资潜力的中国城市 20 强。2007 年，松原市被授予“中国最佳休闲旅游城市”称号；2008 年，松原市又被国家建设部命名为“国家级园林城”；2007 年应松原市人民政府的请求，中国科学院和国际天文学联合会相关组织批准，

建市以来，松原面向市场，发挥比较优势，重点发展了石油化工、农畜产品加工两主导产业和生化制药、建筑材料、商贸旅游三个新兴产业。

年产 500 多万吨原油的中国石油吉林油田分公司；年加工 150 万吨原油的中国石化前郭石化分公司；年产 32 万吨化肥的长山化肥厂；年发电能力 69 万千瓦的长山热电厂等大企业构筑了松原石化产业的主体框架。

吉安生化乾安酒精有限责任公司 50 万吨玉米深加工；草原兴发集团长岭 50 万只肉羊加工；吉林布尔蛋白公司 10 万吨大豆深加工等企业，构成了松原农畜产品加工业的骨干群体。

2. 松原市未来发展规划

对松原市未来发展规划的确定包括市域、城市规划区和中心城区三个空间层次。

(1) 市域：包括所辖的宁江区、前郭尔罗斯蒙古族自治县、长岭县、乾安县和扶余县行政范围，国土面积为 21227 平方公里。

(2) 城市规划区：包括宁江区的行政范围（包括团结街道、文化街道、民主街道、临江街道、繁荣街道、石化街道、铁西街道、建设街道、新区街道、大洼镇、善友镇、毛都站镇、新城乡、兴原乡等），前郭县前郭镇、吉拉吐乡的行政管辖范围，扶余县社里乡的行政管辖范围，以及二龙山地下水源保护区和腰井子羊草草原自然保护区、查干湖自然保护区、大布苏狼牙坝自然保护区范围，总面积约为 2540 平方公里。

(3) 中心城区：包括团结街道、文化街道、民主街道、临江街道、繁荣街道、石化街道、铁西街道、建设街道、新区街道以及新城乡、兴原乡的行政范围和善友林场的范围，总面积约 327 平方公里。中心城区和前郭县城共同组成中心城市，统一规划。

2.1 构建城乡统筹发展的城镇体系

坚持统筹城乡、突出重点、合理布局、节约土地、功能完善、以大带小的原则，积极构筑中心城市、节点城市、县城、小城镇梯次发展“四位一体”的特色城镇化格局，着力打造“1139+N”城镇体系。

目前松原市正在全力构建“1139+N”现代城镇体系：即着力打造 1 个中心城市（松原）；1 个中等城市（扶余）；3 个小城市（乾安、长岭、长山）；9 个特色小城镇（弓棚子、乌兰图嘎、太平川等）以及 N 个新型农村示范社区。

在打造中心城市方面，松原提出了建设宜居宜商宜游生态松原的目标。2012 年，松原市重新划定中心城市“一环线”，完成划定区内的 100 万平方米棚户区改造，打造松原政治、经济、旅游、人居核心区，将江南、江北两个城市中心连接起来，有效带动中心城市的整体发展。打造三个商圈，即建设东镇、金钻和哈萨尔三个城市综合商务中心，引进香港铜锣湾百货和沃尔玛超市。建设四个新城区，一是滨江新区核心区，重点建设“一岛”、“一坝”、“一路”、“一廊”工程。把江心岛建设成为以自然植被为主的生态岛；建设壅水坝工程，改善城区的生态环境和小气候；将滨江大道向松花江上游延伸 6.6 公里；在滨江大道右侧建设一条百米宽、百里长的生态景观长廊。二是旅游经济区，即依托哈达山和龙华寺等地湖泊水库、森林乡野等得天独厚的优势，建设以生态为基底、以新产业为主导、以旅游为特色的新城区。三是郭尔罗斯新城区，围绕“森林、亲水、生态、文化、休闲”五大环境主题，在两年左右时间，建成 4 平方公里起步区。四是经济技术开发区，将建设“七横五纵”路网、30 万平方米湿地公园、4 个新农村住宅小区。

在中小城镇建设方面，扶余县将进一步完善基础设施和公共服务功能，争取早日建成具有区域影响力的中等城市。乾安县以建设滨湖生态宜居城为目标，积极引进战略投资者，大力发展特色资源产业。长岭县正以“长春后花园”为目标，改造老城区，建设新城区。长山镇以长山循环经济工业园区为依托，尽早建成吉林省特色镇、经济规模最大镇和松原北部工贸型小城市。

2.2 发展目标

2.2.1 松原市市域城镇体系

松原市市域城镇化发展的目标为，提升松原的区域地位，构建三省区（黑龙江、吉林、内蒙古）交界地区的中心城市；提高中心城市的带动作用，促进城镇化发展；形成结构合理，功能完善的市域城镇体系；建成高效的现代化城乡基础设施体系和社会服务设施体系。

1. 空间结构规划

规划市域城镇体系形成“一心一轴四区”的城镇空间结构；

(1) “一心”指松原中心城市，由松原中心城区和前郭县城共同组成；

(2) “一轴”指沿长白铁路、图乌公路，以松原中心城区、前郭县城、王府站镇和长山镇为发展中心的城镇发展轴；

(3) “四区”指四个经济区域；

(4) “四通道”指加强市域内各城镇间联系的四条通道的建设。

2. 城镇化发展的战略

(1) 提升松原的区域地位，构建三省区交界地区的中心城市；

- (2)提高中心城市的带动作用，促进城镇化发展；
- (3)形成结构合理，功能完善的市域城镇体系；
- (4)建成高效的现代化城乡基础设施体系和社会服务设施体系。

3. 旅游空间总体布局

旅游空间结构为“一体两翼”。

“一体”为旅游资源的集中分布地区：以长白公路和铁路为轴线，两侧 20 公里的范围内；“两翼”分别为左翼的是大布苏湖和泥林、腰井子和二里界草原自然风光，以及右翼的珠尔山、大金得胜陀颂碑休闲度假和人文景观。

4. 少数民族建设发展

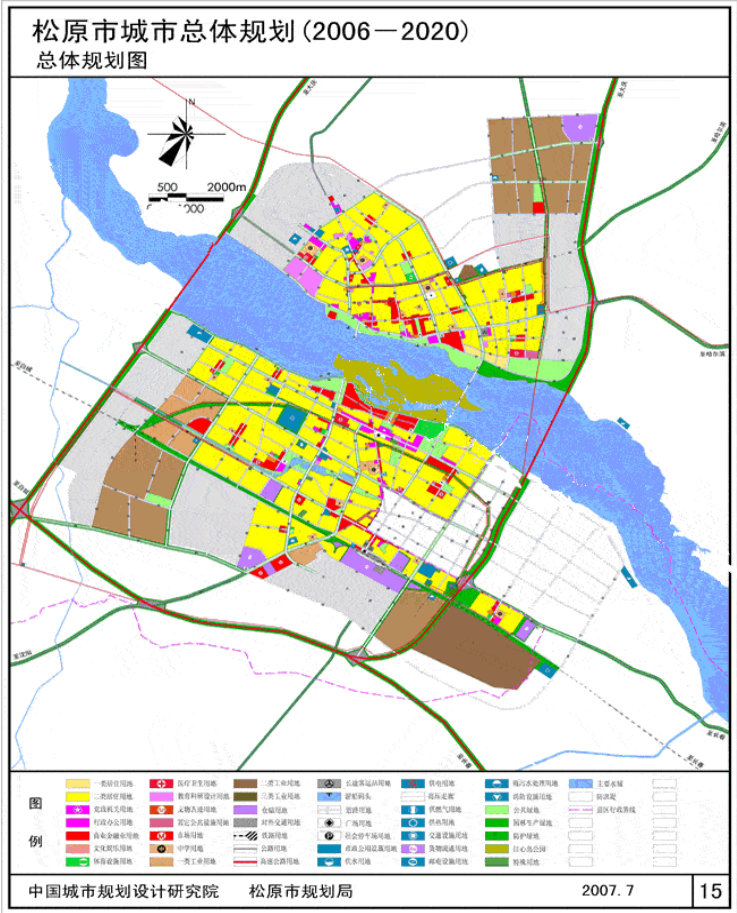
- (1)政策帮扶 解决根本问题；
- (2)对口帮扶 解决实际问题；
- (3)科技帮扶 授之以“渔”；
- (4)抓创新思路，探索新农村建设新模式。

5. 文化发展

- (1)搭平台——有序组织文体、娱乐活动，从而发扬和传承少数民族文化；
- (2)建基地——一方面加大资金扶持力度建设少数民族文化传承基地，另一方面投入专项资金补助少数民族文化事业单位和重点项目；
- (3)办教育——坚持专家与群众结合，上来与下去结合，请进来与走出去结合，不断拓宽少数民族文化艺术人才培养、培训渠道。

2.2.2 松原市城市发展

松原市城市发展的定位为：全国重要的石油开采基地之一，吉林省石油与天然气化工、农产品深加工基地，吉林、黑龙江和内蒙古三省（区）交界地区的中心城市。



第 5 图 松原市城市总体规划图（2006-2020）

1. 形态与空间结构

松原市城市发展方向为沿江发展，工业用地以西南、东北为主。用地选择以松花江为轴，主要包括四个区块：分别是江北城区的西北区块、江北城区的东北区块、江南城区的西南区块、江南城区的中部区块，面积共约 40 平方公里。

松原市中心城区形成“一心两翼、三区五片”的城市空间结构。

(1) “一心”是指江南与江北城区、中心城区与前郭县城统一规划，共同高水平建设滨江新区；

(2) “两翼”是指设施相对自成体系的江南、江北两个城区。同时，依托跨江交通，加强两翼的联系，明确分工、并进发展；

(3) “三区”是指三个工业区，即雅达虹工业区、江南东南工业区、江南西南工业区；

(4) “五片”是指五个居住片区，分别是江北居住 I 片区、江北居住 II 片区、江南居住 I 片区、江南居住 II 片区、江南居住 III 片区。

2. 市级公共中心布局

(1) 市级行政中心布置在江南城区沿江路两侧；

(2) 市级商业中心布置在江堤内移的沿江地区；商贸办公中心位于江堤内移的沿江地区和江北滨江大道沿线，由现状江北城区的金融机构和江南规划的商贸设施共同构成；

(3) 市级文化中心布置在中心广场北侧、江堤内移的沿江地区；

(4) 市级体育中心布置在江南滨江地区；

(5) 教育园区位于江北滨江大道沿线、江滨公园西侧。

3. 城市绿地系统布局

重视城市绿地建设，预计到 2020 年城市绿地面积 1073.47 公顷，占城市建设用地的 13.4%，人均绿地 15.3 平方米。其中公共绿地 675.84 公顷，占城市建设用地的 8.5%，人均公共绿地 9.7 平方米，达到国家园林城市标准。

规划形成“一心两链、一环多带”的绿地结构。“一心”是松花江江心岛公园，“两链”是沿江两岸的带状绿地；“一环”是沿两条高速公路、两条国道布置的宽度 50~200 米左右的环城绿化带，“多带”是沿多条城市主干路和圈儿河两侧形成的带状绿地。

生产防护绿地：规划生产防护绿地面积 21.3 公顷，位于江北城区松原大桥东侧；规划防护绿地面积 357 公顷，包括卫生隔离带、道路防护绿地、铁路防护绿地、城市高压线走廊绿化带、防护林等。

第 1 表 松原市城市公园一览表

序号	公园名称	面积 (hm ²)	位置	备注
1	滨江公园（儿童公园）	19.9	江北临江西路	现状
2	森林公园（植物园）	45.8	江北望江路	改造
3	沿江带状公园	56.3	江北临江东路	改造
4	江心岛公园	289.8	松花江江心、江南沿江路	未计入城市建设用地
5	中山广场	28.3	江南乌兰大街、松原大桥桥头	现状
6	科技公园	24.9	江南松原大路西	新建
7	青年公园	21.3	江南沿江新路	新建
8	镜湖公园	48.8	江南镜湖路	改造

公园绿地主要布置在滨江（松花江）、滨河（圈儿河）地带（见第 1 表）。其中：

(1) 规划市级公园 8 个，分别是江北城区的滨江公园、森林公园、沿江带状公园，江南城区的中山广场、科技公园、青年公园、镜湖公园，以及江心岛公园。每处占地面积一般应在 20 公顷以上；

(2) 规划专类公园 2 个，分别为植物园（森林公园）和儿童公园（江滨公园）；

(3) 规划片区级公园 5 个，结合片区中心布置，每处占地面积在 3~5 公顷左右；

(4) 规划 9 处居住区级公园，每处占地 1~2 公顷。同时鼓励建设小型的街头绿地。

3. 城市景观

城市景观带：临松花江的江南、江北城区的滨江绿化景观带。通过圈儿河、镜湖水体整治、设置多出滨水公园，形成串联居住区的滨水休闲游憩空间。

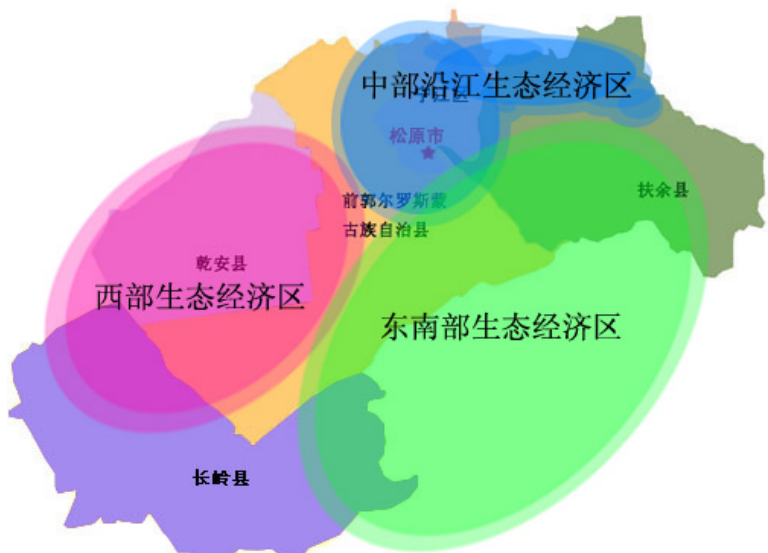
城市景观轴线：在中心城区形成 7 条景观轴线：江北团结街+和煦街景观轴；晨光街景观轴；发展大路景观轴；江南沿江路景观轴；郭尔罗斯大路景观轴；青年大街+康宁街景观轴；乌兰大街景观轴。

城市景观节点：结合各城市标志建筑、历史建筑、广场、游园、规划建设在江北市级商贸区、江北居住Ⅱ片区中心、江南市级商贸区、火车站片区、江南居住Ⅲ片区中心、江南居住Ⅱ片区中心等地段的城市景观节点。

城市出入口景观：包括大广高速交叉口以及沿康宁街、郭尔罗斯大街、临江东路、晨光街、瓦房街的城市出入口。

城市轮廓线：江北城市轮廓线以滨江公园带为背景，引导高层建筑集中于江北城市商贸区，形成建筑与绿色开敞空间交替布局、多层次的景观轮廓。江南城市轮廓线以集中展现现代城市风貌的江南市级商贸文化中心为核心，两侧的沿江居住区为两翼，青年公园、中山广场作为游憩空间，形成核心集聚、两翼伸展、绿色融入的滨江轮廓线。

4. 松原市生态经济区总体布局与地域划分



第 6 图 松原市生态经济区布局与地域划分

中部沿江生态经济区发展方向：从加强农田基本建设入手，积极兴建水利工程，建立完善的排灌体系。同时，加强环保监测，进行污水处理，加大湿地保护力度，创造生物繁衍的良好环境。充分发挥本区域优势，建设绿色水稻、水产品生产基地；发展绿色石油化工产业。

西部生态经济区发展方向：从建设良好的生态环境入手，建设以草为主，农、牧、工、商全面发展的草业生产基地。

东南部生态经济区发展方向：从改善生态环境，建设良好生态系统入手，控制污染，增强土壤肥力，搞好植物树造林，发展节水灌溉，恢复与保持良好的农业生态环境。逐步建立绿色农产品生产、加工、销售体系，发展可持续农业。

参考文献

- 张红娟 彭红霞 王新军，等：山东省城市发展的自然地理背景评价，《华中师范大学学报》2012, 46(4)
- 唐琦 虞孝感 王辰：试从地理学视角探讨区域综合竞争力的指标体系，《长江流域资源与环境》2009, (03)
- 宫卫华 刘正平 周一鸣：城市总体规划中城市规划区和中心城区的划定，《城市规划》2013, 37(9)
- 松原市规划局：松原市城市总体规划（2006-2020），<http://wenku.baidu.com/link>

中国東北における地域構造変化の地理学的研究
—— 松原調査報告 ——

発行日 2015（平成 27）年 3 月 26 日

編 者 小島泰雄

発行所 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

京都大学 人間・環境学研究科 地域空間論分野